
上下逆天

藁部 御門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

上下逆天

【Nコード】

N9991W

【作者名】

藁部 御門

【あらすじ】

間違えて入学した学園は武道を極める者たちの巣窟だった。

それなりの實力はあるものの、過去に挫折を経験し武道をやめた神乃天下。

そんな彼がひょんなことから、序列一位の生徒会長天上葵を倒してしまう。

そして、天上葵に脅されて彼女を再び生徒会長にするため、会長選

という戦いに参加するのだった。

日常のおわり

五月の半ばになり、日差しが強くなる。太陽という強敵に一度も勝った事のない俺は、これから訪れる憂鬱な季節にテンションを落としたながら教室で机に倒れこみ、いつもと変わらない毎日をやり過ぎそうとした。

教室では、今週末にある生徒会長を決める、「会長戦」にみんなそわそわしながら、誰が生徒会長になるのかみんなで予想し合っている。全く元気なことである。

一体いつからこれほど暑くなったのだろう。地球温暖化のせいなのだろうか。とりあえず、生徒と大人が暑さに耐えられず教室ではまだ五月だというのにエアコンが導入された。エアコンの設定温度は本来二十七度なのだが、現代っ子がその程度の温度で納得できるはずもなく現在二十度の空気が教室を冷やしていた。

始めの内は、何度も先生が設定温度を勝手に下げることが怒っていたが、「地球を甘やかすから、あいつらは気温を上げてるんです。だから、僕たちは地球に厳しく接さないといけないんです」と熱く語った生徒がいて、そのうえ、担任が暑がりなため、その理論に賛同し現在二十度の設定温度は黙認されている。

暑さは人間の体力を徐々に、そして確実に奪って行く。そのため、多くの人間が同じ行動を取る。ようは寝るのだ。特に俺の部屋にはエアコンがないため、教室は最高に整った睡眠場所であった。

本当なら、俺みたいな人間は眠ってもいい身分では無い。だが、そのことをいちいち気にする連中も眠っている。そのため、エアコンが稼働した日から毎日眠っているのだ。

そして、俺は夢の中で泳いでいる。冷たい水に包まれて、嫌なことを全部無視しながら。空などなく、底も無い。どこまでも深い俺の夢の海。息をする必要もなく、ただ水中に漂っていた。

だが、突然俺が背にしていた部分に亀裂が入る。そして、海水が

その亀裂に流れていく。俺は吸い込まれる亀裂から必死に逃げようとする。しかし、海水の勢いに勝てるわけもなく俺はあっさり亀裂に飲み込まれた。

目が覚めると、俺は確かにイスに座って机を枕にしていたはずなのに、枕にしていた机が真っ二つになっており、イスは床に転がっており、肝心の俺は床にだらしく寝転がっていた。

あれ、俺ってそんなに寝相悪かったっけと思いつながら、頭を上げようとする。だけど、その動作はあっさりストップさせられる。俺の目の前に刀の鞘をストンと落とされたのだ。

一瞬硬直し、そしてゆっくりと視線を上げていく。目の前には、女子のものと思われる足があり、完全に視線を上げた時、一人の美少女が刀を杖にして俺の前に立っていた。

そして彼女は刀を抜き、俺の目の前に突きつける。

「あなた、ちゃんと責任とってよね」

日常のおわり（後書き）

いろいろと精神的にヤバかった時代の作品です。

駄文ですが、付き合っていただけると嬉しいです。

脅迫

とりあえず、まず俺の学校の説明をしておこう。俺の学校は「私立天武学園」という。まあどういう学校かというと、学園のコンセプトが、「力なきものは去れ、向上心無きものは去れ、力を求めし者のみぞ我が門戸は開かれる」というものであり、学園独自のルールである、序列というランキングが全てを決めている。

この学園では、序列は簡単に言えばそいつの強さを示している。そして、この学園ではその序列によって様々な特権が与えられている。例えば、授業にでなくていいとか、序列の低い人間をパシリにしているとか、私服登校オーケーとかである。

しかし、皆そういった特権よりも純粹に序列の上位を目指し、日々、学園内でバトルを繰り返している。

当然この学園に入学するものは、そういった校風を受け入れ、自らの力を試したいものがいっぱい入学してくる。おかげで、俺が入学してから三年間、一度も入学式を始めとした行事が、まともに行われたのを見たことが無い。

そんな中、俺はこの学園の序列登録者、千人中九百九十位という最低ランク、三年の中ではダントツの最下位として、存在していた。というか、俺は本来このような学校に入学するつもりはなかった。俺の入学するはずだったのは「市立天智学園」だったのに、なにがどうして、こうなったのか知らないが、この学園に入学することになってしまった。

そこからは、もう大変だった。入学式で、新入生と在校生の歓迎大乱闘で、ボコボコにされて、序列上位の人間にパシラれることにより、パシリを極めて。とまあ散々である。ただ、どれだけひどい目に遭っても序列を上げようとは思わなかった。戦い続けることのほうがよっぽど面倒だと思えたからだ。けれど、ようやく今年最高学年になり、序列戦に全く関わらないようにし、またパシリを強

要してくる先輩も卒業したため、俺が望んで止まない平穏と二つ名を手に入れた。

『最弱無敵』それが俺の二つ名だった。無敵という言葉がついてはいるが、なんてことは無い。ただ弱すぎるため武を鍛える連中には相手にされないためついた名だった。つまり敵にする価値すらないという意味であった。

それに対し俺の目の前にいた人間は、天上てんじょう 葵あおい『現在序列一位』『現生徒会長』『完璧無敵』という称号を持つ化物クラスが存在であった。

彼女は天武学園の長い歴史の中で、女性として数々の伝説を作った人だった。女性として初めての二年の時から序列一位。女性の序列一位期間歴代一位。と彼女は圧倒的な力で他の追隨を許さなかった。

彼女は、いつもの通り、肩の位置より少し長めの、光できらきら輝く綺麗な黒髪を後ろで括ってポニーテールにし、彼女のトレードマークである長い日本刀を持って俺の前に立っていた。

いつもと違う所を上げるとすれば、学校中の女子が憧れ、学校中の男子が見蕩れる整った美しく麗しい顔が、いつになく真剣で、俺を睨みつけていることと、俺が勝負を挑んだわけでもないのに、刀が引き抜かれていることである。

この天武学園、武器の持ち込みが許可されてある。もちろん刃物の刃は落としてあるし、銃の弾丸は特殊ゴム弾である。しかし、目の前にいるような達人が武器を持てば、切れない刀だとわかっていてもあまり関係ない。とりあえずとてつもなく怖いのである。

「あのー、なんのことでしょうか、生徒会長」

俺はビビって声が上がずりながら、目の前の人に話かける。頼む人間違いであってくれ。

「はあ！ あなた、私にあんなことしておいて、知らんぷりするつもり！」

目の前の女の子は激昂しながら、俺に言い寄る。

ああ、ごめんなさい。だから刀をそれ以上近づけないで。

「あんなことって、何ですか！？ 会長きつと人違いですよ」

「間違えるわけないでしょう」

「だって、俺今日ずっと寝てたんですよ」

「あなた、本当に覚えてないの？」

「覚えてません」

「なら、思い出させてあげる」

そういつて、彼女は俺の右手を引っ張り、教室から俺を強制的に引きずって行く、女の子とは、到底思えない力で。

美人に手をひかれていくという、生まれて初めての誰もがうらやむ経験を現在しているのだが、手を引かれるのではなく、引きずっていかれており、エスコートというより、強制連行だった。

「どこに行ってるんですか？」

俺は引きずられながら、疑問を彼女にぶつける。

彼女は俺の問いに答えず、ぐいぐいと更に力を入れながら俺を引きずって行った。

痛いんですけど、まじで。

結構な間引きずられ、そういえば俺女の子に手を握られるの初めてだなんて、どうでもいいことを考えられるほど心に余裕ができた時、急に空中に投げだされた。

急な出来事で、俺は投げ出された勢いのまま転がった。三回転ほど回って、ようやく止まり、そしてあたりを見渡す。

そこは、ひと気のない、学園の裏庭だった。

「どう、思い出した？」

「いえ、あの記憶の隅にもないんですけど」

というか、女の子とこんな場所に来たのなら、絶対覚えてると思うんだけど。

「なら、説明してあげる」

そういつて、こちらを向き直る。

「体でね」

彼女は腰に差した刀を抜き、銃弾のようなスピードで目の前に飛び込み、俺の顔目がけて刀を振るった。俺は、素早く、カメが頭を引っ込めるようにしゃがみ、彼女の一撃は空を斬る。けれど、刀は空を切ったはずなのに、後ろにあった使われていないベンチが真っ二つになった。

「あのーボディーランゲージはよく知らないんですけど？」

「うるさい、とりあえず一発あなたに攻撃しないと気が納まらないの！」

刀が空を切ると、彼女は足払いを放つ、俺はしゃがんだまま飛び、彼女の地面を狩る一撃をかわす。だが、彼女の本命はこれでは無い、彼女は足払いの勢いをそのままに一回転し、刀を空中に浮いている俺目がけて、繰り出す。

空中に逃げ場などない、そのまま俺は彼女の一撃を腕を盾にしながらくらう。わけのわからないままくらうダメージとしては、十分すぎる痛みをもらい。そのまま、俺は軽く飛ばされて、先ほど破壊されたベンチに頭を強打した。

一体俺が何をしたんだ！？ 納得できない展開に巻き込まれながら思う。

「痛いですよ。何するんですか！」

「本当に覚えてないみたいね。なら教えてあげる。あなたはここで私を倒したのよ」

何言ってるんのこの女！？ 俺が勝てるわけねーじゃん、あんたみたいな化物レベルの連中に。と言うよりなにより、俺が戦おうとするわけない。

「あのー、その冗談笑えないですよ」

彼女のセリフをにわかにも信じてない俺は、愛想笑いを何とか作りながら彼女に言う。

そして、もう一度刀で斬られた。

「私も笑えないわよ。まさか、序列最底辺のあなたに負けるなんてね」

痛みで悶絶している時に彼女は続ける。

「本当に全部忘れていたみたいだから、最初から教えてあげるわ。あなた、授業中寝ていたでしょ？」

「……うう、はい」

痛みをこらえながら、なんとも情けない声で答える。

「あなたはね、体育の授業中も寝てたのよ。そして、あなたのクラスと私のクラスは合同授業なの。そして、女子はあなたのクラスで着替えることになってんの」

そこまで言われて、二限目が体育だったことを思い出す。そうだが、現在昼休みである。つまり、体育の時間も俺は眠り続けていたわけだ。

「そこで、私はやさしく『起きなさい、もう体育の時間だよ』って起こしたのに。あなた何て言ったと思う」

「わかりません」

ただ嫌な予感はある。

「『うるさい。俺は眠いからほっとけ』って言ったのよ。だから、私が無理やり叩き起こしたの。そしたらあなた逆ギレして、『表出ろ、ブッ飛ばしてやんよ！』って言って、ここまで連れて来られて、私を倒したの。ああ思い出しただけでも腹立つ」

刀を振り回し、地団駄を踏んでいる。またしても、刀は触れてはいないのに、周りの木々の葉っぱが切り刻まれながら、宙を舞っていた。あれおかしいな、目の前の生徒会長さんは、普段は割とおとなしい人だと思ってたのに。

彼女の説明を聞く限り、寝ぼけていた俺は彼女に勝負を挑んで、彼女を倒してしまったらしい。

普通に考えたらありえない。けれど、目の前の人が嘘をついているとも思えなかった。

「あなた、今まで武道の経験は？　っていうか私を倒せるほど強いのに、どうして序列最底辺なの？」

「五年ほど、剣術をしてました。あと、俺は戦うことに興味が無い

んですよ。それに弱いし」

「剣術ってどの流派？」

弱いと言った部分は完全に無視して彼女は質問を投げかける。俺の話の内、自分の興味を引く部分しか聞く気はないらしい。

「無天流ですよ」

「無天流！」

彼女はいきなり驚き、大きく目を見開いてこちらを見る。

ああ、またその反応だ。

「あの『無天流』なの！　そういえば名前は確か、神乃しんの　天下てんかだつたよね。もしかして、あの剣帝、神乃しんの　伊吹いぶきの身内？」

「親父ですよ」

「そうか、なら納得できる。あなたが、私に勝てたわけが」
彼女は一人で納得しながら、うんうん、と頷いている。

「でも、結構剣を握ってる時間は短いだね。中学の時から剣術をならったの？」

「いえ、幼稚園の時からです」

彼女は俺の言葉を聞いて、すこし笑いながら話を続ける。

「えっ、だってそれじゃ年数あわないじゃない」

「あってますよ。幼稚園のときから初めて、小学生でやめたんですよ」

「えっ、なんで」

彼女は俺の言葉を信じられないのか、驚いて、おろおろし始める。
「正確に言くと、やめさせられたんですよ。いわゆる破門ってやつですよ」

「どうして、だって強いのに」

「答えは簡単ですよ。才能が無いからです」

そう、世の中には努力で埋まらないものがたくさんある。それを知ったのが、小学四年生というのは、いささか早すぎた気がするけれど。

「才能が無いって……。私はあなたに負けてるんですけど」

彼女は納得がいかないのか、俺に対して、怒りを滲ませた目で見らみつけてくる。

俺に言われてもどうしようも無いが……。

「たまたま、勝っただけですよ。ちなみに俺はどうやって、あなたに勝ちました？」

「それは、戦いを始めた瞬間あなたが、貧血を起こしたみたいに地面に倒れそうになって、そしたらいつの間にか、目の前にあなたがいて、私が気を失ったの」

なるほど、『天剣』か、あれなら初見の相手なら恐らく勝利できるだろう。だけど……。

「もうひとつ聞きたいんですけど、もう一度同じ技で負けると思いますか」

「いや、今度は油断しないし、きっと撃ち破って見せるよ」

「だから、俺は弱いんですよ」

俺は自暴自棄気味に語る。

「確かに、俺は初見相手なら、何とか勝てるかも知れない。でも二度目に戦ったら大概負けるんですよ。だから俺は強くない。一回だけ不意打ちで勝っても、自慢にも何にもならないんですよ」

「でも勝ちも勝ちでしょ。そんな風に自分を過小評価しなくても」
何故か、会長様は俺の事を持ち上げようとする。

きつと、同情でもしてくれているのであろう。

「いいんですよ。安定した実力がないと強いなんて言えないのが、俺の理論ですから。ですので、今回の一件は謝ります。スイマセンでした。だから、許してください」

そういつて俺は彼女に頭を下げる。彼女は綺麗な顔を納得できなさそうに崩していた、だが、しばらくすると綺麗な顔が悪魔のように微笑み、意地悪そうに言う。

「やだ。許さない。言ったでしょ、私を倒した責任を取ってもらうって」

「責任ってなんですか」

というか、俺に何をしろと。

「私とコンビを組みなさい。そして、明後日の会長戦と一緒に参加しなさい」

「……はあああああ!!!!!!」

そして数秒遅れで、声を発する。

目の前の女が何を考えているのかわからないが、何となく面倒な事態に巻き込まれていることはよくわかった。

この天武学園は、力こそ全て、をモットーとしている。そんな学校を取り仕切る人間を決めるのも当然力である。そのため、一般の高校がやるような、選挙など存在しない。学校が開催する行事によって、学年も関係無しで、全校生徒の中から生徒会長を決定するのだ。

それが生徒会長決定戦挙。通称『会長戦』である。

そして、この会長戦、毎年ルールが変わるのである。俺が一年の時には、生き残りのバトルロワイヤル方式。二年の時は、誰が一番最初に百人倒し切るかというポイント制バトル。そして、今年はかじりの異例のルールとなる、「タッグ制バトルロワイヤル方式」を採用されたのだ。

そのため、多くの人間が自分より、より上位の序列の人間と組めるようにやきもきしているなか、序列一位である彼女はよりによって序列学年最下位である俺と組もうと持ちかけたのである。

「馬鹿なことを言うのはやめてくださいよ。あなたは、自分の実力知ってるでしょ。こんな、序列最底辺の俺と組むよりもっとすごい人がいるでしょう」

「私今序列一位じゃないよ。あなたに負けたから、現在序列九百九十位の状態なの。だから、私がお願しているの、『序列一位の神乃様私とコンビになってください』ってね」

「そんな風にふざけてる場合ですか。ていうか、俺に頼むより、生徒会の役員のなかで序列上位の子いたじゃないですか」

「恋^{れん}のこと？ 彼女はちょっと用事があるから無理なの。それに、私と組もうとした子もあなたに負けて私が序列最下位になったら、組んでくれなくなったの！」

彼女の言葉に少し、罪悪感が湧く。

たしかに、俺のせいで会長戦に出れなくなったならそれは俺の責任だ。

「だから、責任とってよ」

だが、彼女の言葉に俺は素直に「うん」とは言えなかった。第一、俺と彼女じゃ釣りあわなさすぎる。

俺が決めかねて、もしもじしていると。彼女はため息をついた。よかった、あきらめてくれたんだ。と俺が思った瞬間彼女がつぶやく。

「この手は使いたくなかったけど……」

呟きは小声だったので俺が聞き直そうとした瞬間、彼女は再び刀を俺へと向け直す。

「もし、私の言うことを聞いてくれないと、私はあなたを毎日ボコボコにします。私がみんなに働きかけて、序列一位であるあなたに向かって毎日刺客を送り込みます。あなたの交友関係のある人間に圧力をかけます。あなたの成績を改ざんします。最悪留年させてあげます」

「ちよっと何言ってるんですか、そんなことできるわけないでしょ。特に後半の事とか」

俺はひきつった笑いを浮かべながら、彼女に言う。だが、彼女は本気らしい。目がマジだ。

「序列一位になれば、この学園でできないことは、生徒を退学にすることぐらいよ。今言ったことは、事実上可能よ。今の私の序列は最下位だけど、絶対頂点に返り咲いてあなたに復讐してあげるわ」俺の表情が動かなくなった。これが顔が凍りつくというやつか、

とか思いながら、彼女の脅迫について考える。

けれど、ここで負けていいのか俺。ノーと言いたい時に言わないとずるずると言いなりになるぞ。今こそノーと言える日本人にならなければいけないのでは？ 女の脅迫なんぞに負けてはいけな
いのでは？ そうだ、俺は断るときにはきちんとして断ってやる。

「だが断——」

「まずは、この場であなたに殴りかかるかな」

そうやって、彼女は刀を振り上げる。目は据わっており、両手でしっかりと刀を握っている。決して冗談には見えなかった。

「まった。ストップ。了解します。いうこと聞きます。だから、殴らないで」

折れた。俺はあっさりと彼女の脅迫に屈したのである。いつの時代も力というものには逆らえないな。仕方ないよね。子は親の背をみて育つ。全て政治家が悪いことにしておこう。

「ありがとう。あなたが味方だと心強いな」

彼女はさっきまであたりにふりまきまくっていた迫力を容姿に似合ったかわいらしさに変換し、俺に話かける。

女って怖いよ。

「じゃあ、いろいろ説明したいことがあるから、今日の放課後生徒会長室に来てね」

そうやって、彼女は裏庭から去ろうとする。携帯の時計を見ると昼休みの終わる五分前である。

だが、俺は一つだけ気になることがあった。それを背に向けた彼女に聞く。

「ねえ、俺って会長と戦うとき、刀持ってたんだろ。それ誰に借りてた？」

「あなたのクラスの幼馴染じゃない？ 有名な」

そうやって答えると彼女は去っていく。

こうやって俺は面倒な出来事にばっちりと巻き込まれたわけだが、こうなると不満も言いたくなる。そういうわけで、俺は愚痴を言い

に教室へと帰って行った。

幼馴染

幼馴染と言えど何を思い浮かべるであろうか。毎日寝起きの悪い主人公を起こしに健気に毎日迎えにくる女の子を思い浮かべるのだろうか。それとも、本当は主人公のことが好きなのに、思春期特有の男女の差を妙に意識してずっと主人公に本当の気持ちを伝えられず、つい意地っ張りな態度をとってしまうツンデレな女の子でも想像するのだろうか。それとも、甲子園へ連れて行っってお願ひする女の子でも想像するのだろうか。それとも、主人公にべったりで、いつも主人公と行動し、主人公が他の女の子と仲好くなると、空っぽの鍋でおたまを回してしまう女の子でも想像してしまうのだろうか。

悪いが俺の世界では、まずはその幻想をぶち壊してもらおう。そんな幼馴染はこの世界には存在しない。あるのは残酷な結果のみである。幼馴染至上主義の人には深く謝っておこう。俺の幼馴染、いや、腐れ縁の”奴”は俺の、いや、みなさんの期待の全てを裏切っている。

……なぜなら、男だからだ。

「くたばれ神楽」

「どうして、顔を見合わせるなりそんなこと言うんだよ！」

「お前の存在がいけないんだ。もう、なんていうか『ここからいなくなれ』とか『お前は生きていてはいけない人間なんだ』って叫びたくなるんだよ」

「あぶないね、天ちゃん。精神が崩壊する可能性があるよ」

「大丈夫だ。俺は乙は映画版しか知らないから」

「それより、なんでそんなに僕に向かって怒ってるんだよ」

「単純だ。お前が男だからだ。どんなに俺が頑張ってお前の事を中性的な何処か妖艶的なものを感じさせる整った顔。後ろから見た時思わず触れてしまいたくなる、美しい髪。みたいなことを思っても

お前は男なんだよ。どうして、幼馴染というある意味メインヒロイン的ポジションが女じゃなくて男なんだよ。誰が得するんだよ」

「えっ、一部の女の子じゃないの。いわゆるBL的な」

「そんな腐ったベークンレタスいらんわ。それより、ボーイズラブというのは美少年と美少年が絡み合ってるものだ。俺は残念ながら自分で言うのもなんだが残念な顔だ」

「大丈夫だよ。バラは相手を選ばない。ホイホイついてくればいいのさ！」

「お前みたいなひと嫌いだからいかなーよ！」

くだらないことを言い争っていると更に危ない方向へ進んでしまう。こちらで切り上げよう。

今話しをしているのが、俺の残念な幼馴染の式宮^{にみや} 神楽小柄^{かぐら}で端整顔立ちをした万人が万人かわいくて綺麗だと言う容姿を持っている。一緒に街を歩いていると、十中八九、モデルのスカウトが来る。主に女性の。

というか、一発で神楽を男だと見抜ける人間は少ない。まず男の髪とは思えないほど綺麗で肩にかかる位伸ばしており、顔も中性的でまず見分けがつかない、そのため、多くの人が髪の長さから女と判断して話しかけてくるのだ。俺も家は隣どうしだが、幼稚園は違っていたため、小学校に入るまで、女だと思っていた。

そのうえ、神楽は女の子たちにファンクラブを作られるほどの人気ぶりである。毎日神楽は女の子から遠くから、または、近くから見守られているのだ。

そんなの隣に、序列の低い男が、さっきのような暴言を吐きながら話をするものだから俺はファンクラブの人間からものすごく嫌われていた。

ちなみに男でも神楽のファンはいる。それも一人や二人ではなく、いっぱいだ。俺も何度も男から神楽に手紙を渡してくれと頼まれたし、なにより笑えたのが、バレンタインデーで男たちもチョコレートを贈って、段ボール一個分になったのだ。まあ、その後あいつの

家に遊びに行った時に出されたチョコを俺は女の子からもらったものだと思って食べたのに、後からあいつが男から貰ったやつだと言った時はぶちギレたが。

そして、何がすごいってこの男、序列七位になるほどの実力者なのだ。幼馴染だからもちろん彼の実力は知っているが、学園トップクラスである。

顔と実力その二つをもって彼は学園の中でも有名だった。

ここまで、散々な風に書いたが俺は神楽の事は嫌いではない。神楽には特にこの学園に来てからかなり守ってもらった。三年になって俺が序列最底辺なのに誰にもいびられないのは、神楽が隣にいてくれるからであつた。

けれど、今回の件では話が別だ！

「なあ、お前さ。俺が生徒会長様に絡まれてる時に刀渡したか？」

「お前なんて呼ばないでよ。神楽って呼んでよ」

「うるさい」

問答無用で俺は神楽の脳天にチョップする。

思いのほか痛かったのか、頭をかわいらしく抑え、上目づかいに俺を見ってくる。

……かわいい。

不覚にも阿呆な言葉が頭をよぎる。俺はぶんぶん頭を振りながら神楽を問い詰める。

「渡したのか？」

「渡したよ」

「どうして、渡したんだよ。止めろよ」

「だって、着替えてる最中にいきなり、『武器貸せ』って教室に入ってくるんだよ！ そんなの黙って渡すしかないでしょ」

いきなり泣きそうな表情になる。その瞬間周りの男女の冷たい視線が俺を刺した。

どうやら、かわいいほうが正義というルールはこの世界でも適用されるらしい。

耐えきれず俺は、神楽の頭を撫でながら

「ごめん。俺が悪かった」

と謝る。するとすぐに笑顔になり、神楽は俺に飛びついてくる。

「じゃあ、次の会長戦が終わったら、一緒に遊びに行こうね」

小動物が精一杯尻尾を振りながら甘えてくる姿を見ていたクラスメイトは、冷たい視線をやめ、羨ましさと憎しみがこもった視線を向けた。ちなみに、今現在の光景に羨ましさと憎しみをこめた視線を向けないのは、廊下でこちらを見ている一人の女子だけだった。

その子は眼鏡をきちんとかけ直して、俺と神楽が抱き合ったシーンをわくわくした表情で凝視していた。

神楽喜べ、どうやら、俺とお前でもBLは成立するらしい。

あいまいに返事をし、神楽を引き離し、俺は今回の出来事をもう一度よく聞いてみた。

結果、俺が会長に喧嘩を売って、俺一人が帰ってきてもう一度寝ていたから、会長を心配した人間が見に行ったら、会長が気を失って倒れていた。というものだった。

「僕も天ちゃんのことを気になって見に行っただよ。そして、丁度、天ちゃんが会長倒して帰って来たところでさ、僕に刀返して、もう一度眠りに行っただよ」

「ちよっと待てよ。眠りに行っただって、もしかして女子が着替えている中へか？」

「いや、女子の着替えは全員終了していて、みんなグラウンドで集合しにいったらしいよ」

「おい、じゃあ俺は女子の着替えに囲まれて眠っていたのか！」

「そうだね」

かなり、貴重な体験をしている事を考えると、記憶が無いことが悔やまれて仕方ないがしょうがない。

まあ事実関係がわかったところで、俺は成り行き上参加することになった会長戦についての情報を聞いた。

「それより、会長戦ってお前も出るんだよな」

「まあ、僕も剣道部だしね」

天武学園にはたくさん部の活と同好会がある。それらのクラブ活動を行う人間にとって生徒会とは、とても魅力的なメリットがある。部費を自由に割り当てることができるのだ。そのため、部活をしている人間は毎年恐ろしい執念で生徒会長を目指すのだ。

ちなみ俺が二年の時は天上葵が生徒会長をして、公平な部費の振り分けをしていたが、一年の時の柔道部から生徒会長になった人は部費を柔道部で一人占めし、学園に新たに柔道館を建設した。そのような恐ろしい使用も学園側は何も言わないのだから、放任主義ここに極めりだ。

「剣道部主将が、お前だっていうのが、いまだに信じられないよ」

「僕もね……。でも序列の高い奴が主将するのが伝統なんだって」

「まあ、いいんじゃないの。みんな不満言ってるんだろ」

「うん。ただ、女の子にやたらと勝負を挑まれるんだけど」

「しかたない。可愛いものをいじめてみたいんだろ」

「あと、一部の男子の目がたまに怖いんだけど」

「もてる男の運命さだめだな」

うん、俺もイケメンがいたらとりあえず殴っておきたいもん。

「いや、そんなんじゃない、着替えとかのときにやたらと身体と触られるんだけど」

うん。お前は、面と胴と小手と突きを警戒する以上にお尻に気をつけた方がいい。

「きつとお前の気にしすぎだと思うぞ」

気休めを言って話を元に戻す。

「俺もたぶん会長戦にでることになるから。俺がピンチの時は助けてね」

「えっ。本当、誰と出るの。っていうかやつと本気の天ちゃんが見えるんだね。うれしい」

目を輝かせている。こいつ、どうしてくれよう。

「全くもって俺は嬉しくないよ。女にはめられたんだよ」

そういうと、神楽の顔が豹変する。

「えっ、女ってどういうこと」

「えっ、別にどうでもないよ」

「会長戦もしかして、女と出るの!?!」

「いや、まだ……どうなるかわからねーし」

なんか、神楽の顔が怖い。こういう時はあいまいな返事をしておいた方がいい。

「もし、会長戦に天ちゃんが出るなら僕は、天ちゃんを助けるよ。でもパートナーの事までは、知らないよ。ていうか僕がこの手で倒してあげるよ。天ちゃんのパートナーを」

神楽の背中からなにやら黒いオーラが出る。ヤバイよね。これ。俺がビビっていると、ようやく教室に先生が来る。話をしていたらいつの間にか授業時間が二十分ほどオーバーしている。

「すまん、生徒諸君。昼休み寝過ぎした。まあ、メロスも寝過ぎしたせいで友達を助けに行くのがギリギリになったんだし許せ」

どうでもいい言い訳を聞きながら授業を始める。

だけど、隣の席の神楽の黒いオーラは消えていなかった。

p.s. 男もやっぱり怖いです。

ルールと現状と傾向と対策

放課後、俺は会長との約束どうり、生徒会室に向かった。

神楽は休み時間ごとに俺にタッグの相手を聞いてきたが、俺は全て無視した。もっとも、一番うっとうしかったのは、神楽と俺との話を聞いた女子が放課後になり、俺の所に来て、相手を教えろと迫ってきたことだ。

どうせ、神楽に報告でもして、喜んでもらおうという戦法なんだろうけど、あいつに効くとは到底思えない。

生徒会室に着いた俺はノックをして部屋に入る。

「お邪魔します」

「遅かったんだね」

会長は部屋の真ん中にある大きなイスに座って、せっせと書類の山にハンコを押していた。生徒会室に他の生徒会役員はいなかった。

「面倒くさい出来事に巻き込まれてね」

俺は頭をかきながら答える。

「あなたって、学校生活全てが面倒くさいって言いそうだね、少し調べたけど、学園行事に真面目に参加もしてないし」

「学園行事って何ですか？ 修学旅行という名の地方への道場破り旅行のことですか？ それとも、遠足という名の山籠り修行のことですか？ おおよそ普通の奴は参加しないと思いますよ」

けれど、団体行動のほうを優先すべきだと言う生徒会長様の意見が帰ってきたので、反論するのも面倒臭くなって会話を変更する。

「今日のご予定は」

「とりあえずこれを読んでおいて」

彼女は俺にA4の用紙を一枚手渡す。

紙には、今回の会長戦のルールが書いてあった。

その一 今回の生徒会長決定戦拳は、学校主催の正式な行事である。

その二 今回の行事では、生徒会長の決定と共に、序列の順位も変動する。

その三 今回の行事の優勝者は、強制的に序列一位とする。

その四 今回の会長戦はタッグ式生き残り形式とする。最後まで残ったものが、生徒会長と副会長となる。

その五 戦拳から前日までにエントリーすること。また、戦拳の一日前は戦闘を行わないこと。

その六 以下は生徒会長決定戦拳の細かいルールを記載する。

今回の会長戦では、失格となるのは、気絶者とルール違反者と負けを宣言した者とする。

今回の会長戦では学園での使用を認められている武器の使用を認める。また使用許可の出していない武器を使用した場合失格とする。タッグを組んだ片方が失格となった場合、もう片方の出場者も失格となる。

なお失格者を故意に攻撃した場合は攻撃した側が失格。失格者が失格を認めずに暴れた場合は会長戦終了後きついペナルティーを課す。

今回の会長戦では、首輪をしてもらい、その輪が警告音をだした場合、パートナーが失格したことを表す。その場合は速やかに撤退するように。また、参加者は首輪の中央が赤くなっているかどうかで、対戦相手が気絶しているかどうかを知ることができる。

けが人、失格者は戦拳管理委員会と救護班が、速やかに対処するので、生徒は気にしなくてもよろしい。

開始時刻は九時とし、それまでに首輪をしていない人間は失格とする。

また、今回戦拳を速やかに行うため、ジョーカーという存在を投入する。このジョーカーは参加者を無差別に、特に一か所に留まり

なかなか戦闘を行なわない者を攻撃していく。ジョーカーに対し攻撃することは許可するが、ジョーカーに失格はない。つまり、気絶しても、怪我をさせ戦闘不能にしても、すぐさま治療され続行が許可された場合、再び攻撃を開始するため、諸君には逃げることを勧める。なお、ジョーカーは参加者が五組、つまり十名になったところで退場してもらう。

以上が基本ルールとなる。ルールを守って諸君には頑張ってもらいたい。

と書かれていた。

毎年のことながら割とルールが細かいこと、だが、求められていることは単純である。ようは最後まで生き残ればいい。

「ずいぶんと俺達のペアに不利だと思うんですが」

俺は読み終わり、彼女に話かける。彼女は仕事をしながら答える。

「どうして？」

「これって、俺が負けたら終わりじゃないですか」

「そうだけど」

「だったらみんな俺を狙って来るでしょ」

「まあ、大丈夫なんじゃない」

「大丈夫じゃないですね。当初俺はどっかに隠れていようと思ったのに、ジョーカーのせいでとんだ誤算だ」

「まあ、こういうイベントはみんな好き勝手に、因縁のある人と戦いたいっていう場合が多いからそんなに積極的にあなたを狙うとは思わないけど」

「どっちにしろ、俺が戦場を走りまわらないといけないんですよ。

会長の後をずっとついていくしかないんだし」

「積極的に戦ってもいいんだよ」

「遠慮しますよ。会長を倒そうとする人間なんて、化物クラスの敵じゃないですか」

「化物っていうほど強くないよ。それと私を化物っていうのはやめてくれない」

会長はこちらを向いて笑いながら言う、だけど目がわらっていない。

「失礼。手から波動拳が出せる格闘家クラスの人が襲ってくるのに、戦うなんて選択肢を選びませんよ」

そうである。この学園の序列の五十位から上は、気という技を操る人間がほとんどである。もはやマンガのような世界だが、使える人間がいるんだから仕方がない。目の前の人もついさっき、離れた所にあるベンチを真っ二つにしていたしね。そして、俺にはその才能は全くない。まあ、そういう所が破門につながっているわけですけど。

「別にそんなに恐れなくてもいいと思うけど？」

「会長は俺のこと買いかぶりですよ」

笑いながら、話しを続ける。そう、気さえ使えば、きっと俺も会長の隣で物怖じせずに戦えたのだろう。または、会長相手に正々堂々と戦いを挑めたのだろう。

だけど現実には俺は気を使えず、役者不足である会長のパートナーを務めないといけない。まあ、たればを言っても仕方ない。結局の所自分が悪いのだ。決して親のせいじゃない……。

「話しは変わるけど、あなたって、自分の刀持ってるの？」

「家にお古の稽古用の刀がありますよ。もちろん刃はついてないから、明日学校の方で使用許可を取りますよ」

「了解。じゃあ、あとは、参加申込書にサインしておいて、あとは、私が出しとくから」

そう言って会長は、また書類の渦にハンコを押す作業を再開した。だけど俺の聞きたいことはまだ終わっていない。

「ここからは、もうちょっと踏み込んだ話しなだけで、今回の戦いどんだだけ、味方いるの」

「味方？」

「そう味方。仮にも生徒会長だったんでしょ。それなりに強い人が味方になってくれたりするんじゃないの」

「いないわよ」

「そうそう。序列上位の連中の名前がどんどん出てくるって、いないのかよ!」

彼女はため息をつく、そして俺の顔をみて、もう一度ため息をつく。

「もし仮に味方がいたとしたら、あなたと組む? それと私のバツクアップにつく部活動があると思う?」

そうだった。前提が間違ってる。彼女は誰もいないから俺と組んだんだ。

それに彼女に手を貸す部活動も存在するわけがない。彼女は去年の部費の振り分けをどこも贖いせず完全公平の態度で臨んだのだから。

「それでも、生徒会の役員の子ぐらいは味方してくれるでしょ」

「残念ながら、彼女たちには期待できないわ。本当なら今日も生徒会の仕事をしてもらうはずだったんだけど、役員の子は副会長の恋以外誰も顔出してないもん。今日が本当は生徒会活動の最後の日なのね」

そういうと少し寂しそうな顔をする。

結局の所生徒会の人間は、彼女の序列と生徒会の威光にしか興味がなかったのだ。その両方が崩れた今、彼女には孤独があった。

俺の責任か……。一生懸命に生徒会の最後の仕事をこなす彼女に対し、自らの軽率さをひしひしと感じた。

彼女は恐らく、孤独など経験したことないと思う。力あるところに人は集まるから。きっと今まで一人になったことは少ないんだろう。

俺は、一度経験しているからわかる。積み上げたものが一瞬で崩れるときの絶望感を。

俺は自然と書類の半分を会長の机から勝手に奪う。

「ちょ、ちょっと!」

会長が慌てているが、俺は全く気にせず適当なイスに座って、引き出しを開けて、ハンコを押し始める。

「勝手にしないでくれる。これは生徒会の仕事――」

「こんなたくさん一人でできるかよ。手伝うよ。でないと今日中に帰れないでしょ」

「でも」

「いーからいーから。会長は自分の分を頑張ってね」

そういつて、勢いよく、印と書かれた部分にハンコを押していく。

「……一つだけ、言ってい」

彼女はあきらめたのか、頭を手をおいて言う。

「ハンコ押すところ間違ってるよ」

「嘘!」

「ホント。そこは新しい生徒会のハンコを押すところだから」

……ごめんなさい。

俺は仕事を手伝い、そして、微妙に仕事を増やしながら、彼女と話しをする。

「ねえ」

「何?」

「どうして、副会長の双鐘ふたかね 恋れんは会長戦にでないの? あの子確か、会長にべったりだった気がするし、会長のためなら何でもしそうな子だっただろ」

そう、天上葵の生徒会で注目に値する人物は二人いる。一人は天上葵本人、二人目が副会長の双鐘恋である。学年は一つしたの二年だが、常に生徒会長とペア。というより文字道理くっついていた。授業や式などの行事以外に見かける時にはいつも会長の隣にいた。

そして、彼女は序列でも会長にぴったり後ろにつけていて、現在の序列二位である。まさに、会長の切り札だったのだが。

「なんか、学園の方に仕事を頼まれたって言っていたけど。もしか

したら、今回使う首輪とかのテストとか、戦挙委員会と序列委員会のまとめ役してるんじゃない」

「それにしたって、おかしいな。序列に影響のある戦いに現在の二位をださせないなんて」

「そこは、彼女も不思議がってたけど、学校の要請をむげにはできないでしょ。それに恋が代わりのパートナーを一応見つけてくれてただけだね……」

そいつに逃げられたと。彼女の悲惨な状況を思い浮かべながら、原因の一角どころか、全角をしめる俺がまたしょんぼりした。

まあ、きっと彼女を参加させない理由は簡単に想像できた。序列の一位と二位がタッグを組むことを避けさせるためであろう。もし、そのタッグが成立したら、結果はかなり見えている。

毎年、誰が生徒会長やるかで、賭けをしている職員あたりが、それを避けさせるために仕掛けたのだろう。

現状を考えれば考えるほど、俺達の勝利が薄い気がしてきた。

ハンコをひたすら押すという単純作業をしながら、本番どうやって立ち回るかを考えていた。

だが、シュミレーションの結果はどうにもよくなかった。一番多そうなのが、会長狙いの敵に巻き込まれることである。

まあ、本番迎えないとどうしようもないよね。

そう思っていた時、ハンコが紙ではなく、机をたたいた。

「よっしゃ終了」

声をだして、伸びをする。会長の方を見ると、会長も間をおかずに終了した。

時計を見ると丁度十二時だった。生まれて初めての学校で日付が変わるのを体験した。

「お疲れ様」

会長に俺が声をかけると

「御苦労さま」

と会長が返した。ホントに長時間頑張って疲れたよ。

「じゃあ、荷物全部整理するから、先に帰ってて」

「手伝うよ」

「いいよ。それに女の子は私物は見られたくないの」

そういつて、俺は生徒会室に追い出される。

電気が落ち真っ暗な廊下が、校舎が目の前にあった。会長は普段からこんな風に生徒会室で頑張っていたのだろうか。天武学園のよいうな無法地帯でも生徒会の仕事は決して少なくはない。だが、歴代の生徒会長は別に無視していい仕事は全て無視してきた。だけど彼女はきちんと仕事をしていた。学園祭のステージの出しものなど。生徒からアンケートを取るなど面倒なことまでしていた。

だけど、この学園で彼女の仕事に対して褒める人間はいない。結局の所評価されるのは、彼女の序列のみなのだ。その象徴が生徒会の最後の仕事をサボったあの生徒会の役員だ。

ほんの少し、俺は真面目に彼女を勝たす事を考えた。本気なんてもの、ここ十年近く出したことなく、錆びついていたが、どうやら使用不可ではなさそうだ。

「先に帰ってくれてよかったのに」

しばらくすると会長が、生徒会室から出て、生徒会室の戸締りをする。

「会長を置いて、帰りませんよ」

そう言った俺の口に会長は、手を当てる。

「今日から、私は生徒会長じゃないの。ただの、天上葵だよ。だから、名前で呼んで」

「じゃあ、天上さん」

「駄目。名前で呼んでよ」

「じゃあ、会長戦まで、葵さんと呼ばさしてもらいます」

「さん、なんて堅苦しい呼び方はやめてよ。呼び捨てでかまわないよ」

勘弁してくれ、同級生の女子を呼び捨てなんてしてたらまずいよ。生徒会長様にはいろいろファンがいるんだから、そいつらに殺さ

れるよ。

「嫌です」

丁重にお断りした。

「私もやだ」

だが、断られた！

なんとか妥協点を見つけよう。

「じゃあ、葵ちゃんでもいいすっか」

まあ、ちゃんづけならギリギリセウトだろ。

彼女はほんの少し悩んで、「いいよ」と言った。

「じゃあ、会長戦まで葵ちゃんって呼びますよ」

「なんで、会長戦までなの？」

「だって、会長戦の後は生徒会長でしょう。葵ちゃん」

すると意外なことに葵ちゃんは腹を抱えて大きく笑う。そして、目に涙を浮かべてこっちを見た。

「俺なんか変なこと言いました？」

「いや。おかしくてね」

何がおかしいのかさっぱり分からない。

「そうなんだ、君は勝つつもりなんだね。ふふ、おっかしいな。君はさっきまでやる気なんてなかったじゃない」

「男子三分会わざるは活目して見よってことですよ」

「三日じゃなかったっけ」

そう言って、葵ちゃんは下駄箱へ帰り始めるそれに俺もついていく。

「これから言うのは全部独り言だから気にしないでね」

そう言って廊下を歩きながら喋りだす。

「私はさ、この学園がさ、序列なんか関係なく楽しい学校にしたいって思ってたの。だけど、今年一年間の生徒会活動はどれも失敗だった。だけど、無駄じゃないと思ってたの、次に繋がるステップだって。だから、今日生徒会の子とお昼一緒に食べながら、理想の学園生活を語ろうって思ってたの、でも恋しか来なかった。そこでさ、

自分のしてきたこと全部無駄だってわかったの。そしたら、急に腹が立ってさ、だからあなたに昼休みに八つあたりしにいったの。そして、会長戦で勝ってさ、私に見切りをつけた全員見返してやろうってね。でも、あなたはやる気ゼロ。はあ、これで終わったんだって思ってたんだ」

下駄箱の戸締りをして、星がきらめく夜空の下にでた。今日は月が綺麗で、道は街灯がなくても明るいほどだった。

「そして、生徒会の引き継ぎの資料を頑張って作成してたの。それで、生徒会の仕事が終わってさ、残った会長戦で最後の悪あがきをするつもりだったのに、君が急にやる気出してるんだもん。そりゃ笑うでしょ」

ははは、と小さく笑いながら、同時に涙が流れていた。

「君じゃないですよ。名前で呼んでください」

「そうだね。神乃くん」

「駄目です。名前で呼んでください」

一瞬きよんとし、そして、彼女はもう一度笑う、今度は涙を止めて。

「そうだね。じゃあ、天下くんって呼ばせてもらうね」

そうして、俺は彼女と一緒に夜道を帰る。

幾分進んだところで、彼女は「こっちだから」とわかれ道で別れを告げてきた。

「きちんと家まで送ろうか？」

「大丈夫だよ」

俺は彼女をつま先からつま先まで見る。

確かに俺より強い彼女にボディガードは必要ないか。

「じゃあ、今日はありがとうね。お礼はまた今度するから」

「簡単にそんなこと言わない方がいいですよ」

「えっ、なんで？」

「お礼が気になって夜も眠れなくなるんで」

どうして俺がそんなこと言うのかわからないみたいな顔をする。

この人は自分の顔を鏡で見たほうがいい。美人からのお礼ほど男が期待するものはないだろう。そんな無防備な台詞ばかりいってると勘違いした変態にいつか最悪な命令をされるぞ。

「じゃあ、お休みなさい。葵ちゃん」

とりあえず、今日は手を振ってそのまま帰る。お礼について胸を熱くさせながら。

家に帰るとねーちゃんがちょうど風呂上りでビールを飲んでいた。

「ねえねえ、ねーちゃん」

「なあに、天くん」

「かわいい子に今度お礼してあげるって言われたんだけど、何されるのが一般的？」

「それはね天くん、社交辞令って言ってね、何にもないのが一般的だよ」

……認めたくないものだな、童貞ゆえの過ちと言う奴を。

決戦前日、俺は鳥の鳴き声と共に目が覚める。窓を見るとまだ外は薄暗かった。

時計を見ると現在五時である。もう一時間もすれば門下生が、道場へ次々と顔を出す時間だろう。

俺はパジャマのまま布団から抜け出し、道場の方へ歩いて行った。日中は暑いが、早朝はまだ肌寒い季節だった。

俺の家は剣術をたしなみ、そして弟子も何十人もとっている。そういうわけで、家の敷地内に道場があるのである。ちなみにすぐ隣には、神楽の家の道場がある。

道場の中は思った通り誰もいない。俺はそのまま道場の奥の倉庫へと足を踏み入れる。するとそこには、一振りの刀が置いてある。俺にとっては夢の残骸であったが、周りから見れば、十分な業物に見えるものだった。

それを持って、道場で何度か型どうりに振るってみる。体がかろうじて覚えていたのか、それほどぎこちない動きにはならなかったが、通用するかどうかはわからない。

そして、決戦は明日。いまさら野試合でもして戦えるかどうかを試すのは不可能だった。

まあ、どうにかなるでしょう。どうやら大事なものは、生き残ること。なら逃げ足のほうが大事。ちなみに体力は一年二年の時たっぷりパシリとして鍛えてあるので、たぶん大丈夫である。

刀を左手に持って、俺は道場を出ていく。

俺みたいな人間に頼ったかわいそうな女の子の願いを叶えるために。

学校へ登校するとまず、刀を戦拳委員に見せに行った。すぐさま、俺の刀は使用許可が下り、その場で俺に返された。

とりあえず会長戦への必要最低限の準備は終了した。あとは、勝つための情報収集だ。

まず、俺は新聞部が発行している、今回の会長戦についてまとめている雑誌を百円で買った。そこには、どこの誰が誰とタッグを組んだとか、優勝候補筆頭特集とか、どこの部活が生き残るかの予想や、主な戦闘場所と予想される地域などが載っている。

俺は教室へ向かって歩きながら、雑誌を読む。

本日はルールで戦闘行為が禁止されているため、まことに静かだった。

クーラーの効いた教室に入ると、クラスの人間の視線がかなり気になった。

まぐれでも、序列一位になって注目されているということであるのかなと思い、さして、気にせず教室に入った。

そして、荷物をかたづけ、刀を机のわきに置いて、雑誌の続きを読み始める。

こういう雑誌の記事の信憑性はかなり低い。今まででもかなりの数、外している。それでも、学校全体の地図や序列についての情報、誰がどの部活動に属しているか、などを一通り理解するには役立つ。

「おはよう」

「おはよう」

神楽が登校してくる。そして、俺に言う。

「すごい格好してるね。さすが序列一位」

俺は自分の姿を見る。パジャマのままだった。

俺は学校の一限目をすっぽかし、二限目の終了ごろに着替えて学校へ戻った。序列一位に、先生は何にも言わないが、クラスの人間は口を押さえて、苦笑していた。

この学校では制服ではなく私服で登校する人間も当然いるが、まさか、パジャマで登校してしまうとは……。

「人間失敗ぐらいするよ」

「うるさい！ 何にもいうなほっといてくれ」

慰めに神楽が声をかけたが、俺は誰にも触れられて欲しくなかった。

ただただ、そっとしておいてほしかった……。

俺は昼休みが過ぎても、立ち直れず学食でパンを買って屋上で一人食べようとした。

だが、パンをかじっていた時に、屋上のドアは開いて、一人の女がやってきた。彼女は昨日知り合った、元生徒会長の天上葵だった。

「あら、先客がいるなんて珍しいな」

「教室でご飯食べるには、やんなき事情がありました」

「友達いないの？」

ザクッ！

いま、俺の心に長ドスを容赦なく突き刺された音が聞こえた。

「じよ、じよ、冗談はよしてよ！ いるよ友達ぐらい……一人だけだ」

神楽、今まで散々お前につらく当たってごめん。やっとわかった、友達って大切だ。うん。もし本当に俺が友達いなかったら、今の一言で屋上からダイブしてるわ。

「???」 別にそんなに慌てなくても、ただの冗談だよ。冗談」

何で俺が慌てていたのか、わからないという感じで彼女が返答する。

こいつ、冗談は相手を見て選べ、今は明らかに俺には禁句だぞ。第一この学校で友達作ろうと思ったら、序列である程度自分の力を示さないといけねーじゃん。俺この前まで、学年最下位ですよ。人というより奴隷的立場ですよ。友達なんざできるわきゃねーだろ。

と、一通り心のなかで愚痴を言った後に気付く、何で彼女はここで一人で飯食うとしてんだ？

「葵ちゃんも一人じゃないですか、もしかして一緒に食べる友達いないんですか？」

葵さん、冗談はこういう風に使うんですよ、「馬鹿言わないで、友達ぐらいちゃんといます」っていう突っ込みが確定している人しか使っちゃいけないですよ。

「……………」

あつれー、何で無言なんすか、葵さん、顔を向こうに背けて。もしかして俺、地雷踏んだ？ ねえ、嘘でしょ。まじかよ。だって自分に友達がいらないのに、「友達いないの？」なんていう、からかい

かた、普通しないでしょ。

俺が一人テンパっていると、不意に彼女は立ち上がり、フェンスに向かって歩き始めた。

「ちよつとまってー！」

やばいよ、ジャンプするつもりだよ。屋上からダイブするつもりだよ。死に花咲かせるつもりだよ。

歩き出した彼女の手をつかんで俺が話しかける。

「ゴメン、さっきのはほんの冗談だから！」

俺はまじでビビッていて、若干声が上ずっていた。振り返ってこっちを見る彼女は、目に一杯の涙をためては……おらず、いたずらっぽくこちらを振り向いて、笑いかけてきた。

「引っかった！」

はぁー、なんていいましたかこの女。

「屋上からジャンプなんてしないよ、少しあなたをからかっただけだよ。まあ、友達がいけないのは本当だけどね」

あれ、さりと、重たいこと言ったな。うん。

「いままで、お弁当も生徒会室で食べてたんだけど、生徒会室使えないし、前一緒に食べてた役員の子は電話しても、反応ないし、恋は休んでるし」

なんだろう、なんかすごくかわいそうな子が目の前にいた。哀れんではいけないのだろうが、残念な子としか思えない子が目の前にいた。

はぁー、仕方ないな。友達が少ない同志で仲良くしますか。

「葵ちゃん、携帯のアドレスと電話番号教えてください、俺でよければ、友達になりますよ」

この台詞を言っと思ったんだが、これって俺、完全に上から目線じゃね、まあいいか。友達が一人でもいる俺のほうが現在上の立場だろう、まあ五十歩百歩だが。

「あつ、うん。……わかった、じゃあ、友達として、これから、よろしく。あと会長戦もね」

そうして携帯の赤外線通信で互いのメルアドを交換する。

「了解、あと、携帯は会長戦で、もしはぐれた時の連絡ツールとして使うんで、よろしく頼みますよ」

ただ、メルアドを交換した後に、若干恥ずかしかったので、会長戦のことを強調した気がする。

まあ、あれだな、あなたのメルアドがほしかったわけじゃないんだからね、ただ、会長戦で必要だから交換しただけなんだからね、という台詞と同じ感じだな。

そして、俺はいくつかの事を確認していく。

「まず、葵ちゃんは、俺とタッグ組んでることを周りに内緒にしておいてくださいね。本番なにが起こるかわからない。俺が狙われる可能性をギリギリまで下げておきたいんで。あと、どこで俺達は戦うか。これが結構大事です。会長戦のスタートが九時で校門が開くのが七時です。今のうちにきちんと決めておいて陣取らないと」

「場所は私の教室でいいわ」

「どうして？」

彼女の教室は俺と同じ階で学園の教室棟三階である。退却路や戦い易さなどを考えても優れていると思わないのだが。

「毎年どこで戦ったって一緒だよ。ほぼ全校生徒が戦うことになるんだから、人数がある程度減らないと、歩くたびに誰かと戦うことになるよ。それなら、外からの突然の攻撃が無い教室棟の三階で暴れている方がいいと思う。それである程度人数が減って落ちついたら、ある程度守りやすい場所を考えよう」

「まあ、ジョーカーのルールもあるし中々難しいでしょうけどね」

二人で話しをする中で、彼女はパンの傍らに置いている、俺の刀に興味を移す。

「これが、天下くんの刀？ 結構格好いいんだね」

俺の刀は鉄鞘ごしらえの一般の日本刀となんだ変わらない反りをした刀であったが、少し普通の刀と違う部分がある。柄の部分に銃の引き金のようなものがついていた。

「これ何？」

刀を指差し効いてくるので、俺は刀を彼女に渡す。まず彼女は刀を普通に引き抜こうとする、だが刀は抜けない。

「どうなってるの？」

そう呟き、今度は力を入れて抜こうとした。

だが、それでも抜けない。

「トリガーを引きながら抜いてみなよ」

そう俺が言うと、即座に彼女は試す。すると、刀はいとも簡単に抜け、刀身の輝きを俺達にみせていた。

「ストッパーになってるの？」

「そうだよ。無天流の刀は何処かにストッパーがついてるんだよ」
「変なの」

そう、本来はおかしい事極まりない作りだが、これには理由があった。無天流の創始者は、人を殺すのを非常にためらう人間だったらしい。そのため、剣術でありながら、人を斬らずに倒す技を第一とした。つまり、刀は鞘におさめたまま、相手を倒す技を磨いた結果が無天流であった。故に体術も結構重視して稽古している。

そして、俺が葵ちゃんを倒した技は、刀を抜かないと自らが倒されると判断したときのみに使用する抜刀術だった。

「ねえ、手合わせしてよ」

自らの刀を握りしめ、彼女はこちらに提案する。

「嫌です。絶対ボコボコにされるもん。それに戦闘行為は本日禁じられてます」

「えー。いいじゃん稽古だよ稽古」

「また今度ね」

俺は残りのパンを口にかきこむと、出口に向かって歩いて行く。

「あと、明日の本番まで、会うのはやめときましょう。タッグを組んでることばれるとヤバいんで。では、ごゆっくり召し上がってください」

ジェントルマン風なお辞儀をしながら、俺は屋上から、去ってい

く。その時、屋上へ続く階段で一人の女の子に出会った。

体格は小柄。髪は茶髪で、長い髪をツインテールにして、ゆらゆらと揺らしている。そして、一番目を惹かれたのは、彼女の顔である。お人形という言葉がぴったりなほど、かわいく幼い顔をしていた。ゲームやアニメで言うロリキャラである。

「お前、神乃天下ですか」

俺と一緒に並べば俺が不審者として通報されそうなほどかわいらしい幼女に声をかけられた。いや、幼女というのは正しくないか。彼女の存在はよく知っている。彼女こそ学園で序列二位、そして前生徒会副会長の双鐘恋だった。

俺との面識はゼロなのに、声をかけられた。

これってフラグたってるよね。これ実は、序列一位になったことで俺のファンになったってことだね。俺結構、双鐘みたいなかわいらしい子がタイプなので、テンションが上がっちゃう。

心の中でフラグが屈伸運動を始めていたが、俺はそんなことはおくびも出さず、極めて冷静に「そうだけど」と答えた。

これこそ、紳士の対応である。たとえば、心の中で何を思っている、それを相手に気づかせなければ、表面上は紳士でいられる。変態という名の紳士で。

「わかったのです」

そう言って、彼女は俺の目の前に拳を突き出した。突然のことで全く反応できず、迫りくる拳に身体が固まる。

しかし、拳は俺の目の前でストップする。

「今日が戦闘禁止の日でよかったですね。昨日出会ってたら、確実に全治三カ月のけがにさしあげていたのに、です」

「そりゃどうも」

屈伸運動をしていたフラグくんが、粉々に砕け散ったのを感じながら、彼女と話しを続ける。

「あんたは、おねいさまに恥をかかせたのです。そのことをたっぷり後悔させてあげるのです」

俺は本日始めて知った、普段ロリ声の人間がドスを効かせるとマジで怖い。普段行事などで効く声が妙に高いイメージがある分、ドスを利かすと今までにない怖さが頭の中に響くのである。

「後悔ならもうしてるよ」

「じゃあ、反省しているってところをみせてくださいなのです」

「むしろくしゃしてやった、今は反省している」

「全く反省の部分が見えないんですけど」

「過去の反省を生かして、前向きに検討する。次は問題を起こさないように善処します」

「まるで、何もしない日本の政治家みたいですね」

「まあ、言葉でいくら言っても、無駄だろ」

「忘れないでくださいです。あなたがお姉さまにしたことは消えないし、私も忘れないです。いつか大嫌いなお前をぶっ殺してやるです」

そう言って、三か月の怪我からかなり悪化した状態へ俺をいざなう事を宣言し、俺と彼女はすれ違う。彼女は屋上の扉を開けて「おねいさま、こんなところにいたんですか、探しましたですよ」といつものロリ声と甘えた口調で彼女のもとへ駆けて行った。

「なんかあったの」

教室に帰った後、神楽が俺に声をかけてくる、どうやら俺は心配されるような顔をしていたらしい。

「お前さ、今度一日女装して学校来ねえ？」

目の前にいる美少年に女装させれば、かわいい少女になるのではないだろうかとくだらないことを考えるほど俺は馬鹿な状態になっていたらしい。

タイプな女の子に俺は今日、尋常じゃないほど嫌われていることがよくわかった。それは結構ショックなだった。

陰口より正面から堂々と言われる方がいいという諸君。真正面からお前の事嫌いって言われてみる。かなり傷つくから。

どのくらい傷つくかと言えば、目の前の美少年でもいいか、というぐらい傷つく。

良く見ると、神楽は小柄できれいな整った顔をしている。案外イケルンジャネ。

何がイケルという部分についてはなにも言わないが。

「うん……。わかった。また今度」

そうやって俺は、幼馴染に妙な提案をしその提案を了承したことを、俺は落ち込みくだらないことを考えていることで聞き逃してしまった。

放課後、俺にはまだたくさんやらなければならないことがあった。まず大事なのが、偵察である。俺はまずグラウンドへと向かい、この学園の二大スポーツ運動部である、野球部と、サッカー部を見に行った。

この二つの部活はグラウンドの使用権をめぐって毎年血なまぐさい争いをしている。今回の戦いでも、まず始めに互いの部活で潰しあいをするだろう。

そこで俺が、戦闘が終了して弱っている状態のどちらかの部活に協力をどうにかして得ようという算段だ。

グラウンドの端から、最後の特訓を行なうところを見ていた。

ひどかった。

野球部はどこから集めたのか、サッカーボールを大量に持ちより、金属バットで一生懸命破裂させており、サッカー部は金属バットをサッカーゴールなどに打ち付けて破損させていた。

そして互いに睨みあい、口汚い言葉の応酬を繰り返している。

あれは、サッカー部か野球部のどちらかの連中が滅ぶまで、俺達と一緒に行動する気はないな。そう思い、俺はグラウンドを去った。

次に足に向けたのは、柔道部と空手部だった。だが、共に俺達に

協力してくれるとは到底思えなかった。

だって会話が

「漢なら拳一本で勝負せんかい」

「武器なんて軟弱ものが使う物だ」

「北都神拳は最強の暗殺術だ」

だもん。

そんなこと言っている人間のもとへ、刀を持った人間が協力を求めても、無駄だろう。

次に、弓道部へと足を向ける。本来こういう戦いは、飛び道具があった方が完全に有利である。それに、弓道部には序列の二十位にランクインしている人がいたはずである。

俺は軽快に弓道場まで歩いて行く、俺が軽快に歩いているのは、偵察のためだけではない。

袴姿の女の子が見たかった。という、いたって健全で健常で健康的な理由である。決して邪な気持ちなどはない、ただ和服の女の子がみたいだけである。それだけである。

……なんだか、この世界の外側で、俺のことをけがらわしいものを見る目で見られている感じがする。わかっちゃくれとは言わないが、そんなに俺が悪いのか。年頃の男の子が女の子の制服以外の姿を見たいと思うことがいけないのか。

自問自答を繰り返しながらも、足は止まらずこそっと、彼女たちの特訓を覗き見する。

そこでは、女の子たちが、白い袴をつけて、一人の女の子の話を聞いている。その主将らしき女の子は眼鏡をかけており、体型はすらっとしており、なによりも、弓道で使う胸当てが苦しそうなほど胸がでかかった。恐らく彼女が序列二十位の女の子だ。

眼鏡で袴で巨乳キタコレ ktkr。おおよそ、俺が望んだもの斜め上を行く収穫である。

次に俺は彼女がどんなことを話しているのかが気になり少し、多少近づき、耳を傾ける。

「まず用語について勉強しましょう。まず、少し前の言葉ですが、『タチ』と『ネコ』というものがあります。現在では、『受け』と『攻め』という言葉がこれの代わりに使われていますね。ちなみに、タチと攻めが同義語、ネコと受けが同義語と考えて問題ありません。本日までの授業を真面目に受けていれば、意味はわかりますね。次に『リバ』という物があります。簡単に言えば掛け算を反対にするんですね。受けと攻めどっちもいける人を指して使います。次にこれも少し古いですが『オラニャン』というものがあります。一部ではツンデレの男の子バージョンを指して使うこともあるらしいですね。これは、誘い受けと言えばわかりやすいと思います。わかりやすく言えば、我々のアイドルである、神楽くんをこのような、割とがっしりした男の子が日常的には責めておきながら、いざ本番になると神楽くんが攻めで、がっちりして男の子が受けになる時などに使いますね」

そして、眼鏡の女の子には、昨日神楽が俺に飛びついていてる時の写真を取り出しみんなに見せていた。

……どうなってんだ。どうして、あんな美人な女の子たちが腐ってるんだ？ 天武学園の長い歴史が彼女たちをゆっくり腐らせたのか？

そして、どうして、会長戦を明日に控えてるのにこんな話をしてるんだ？

手を施せないどうしようもない状態を目の当たりにして呆然としている時、眼鏡の子はこちらに気づいたのか、小さく礼をしてきた。そして、思い出す。あいつは昨日教室で俺と神楽の絡みを興味しんしんで見ていたやつである。

俺はいたたまれなくなってその場から逃げだした。よりにもよって、眼鏡の女はこっちに手まで振っていやがった。

そうして最後に俺は神楽率いる剣道部がいる武道館に自然と向かっていった。

武道館は中庭の先にある。そこは他にも柔道部が使う武道館などそれぞれの部ごとの武道館があった。

武道館のドアは開いていた。もう練習は終了していたのか、最後に神楽がみんなに激を飛ばしていた。

「みんな、いよいよ本番は明日だ。一緒に今まで頑張ってきたのか、最後はすぐうれしい。頼りない僕だからこそみんなの助けがいる。みんな助け合って頑張ろう」

「おー！！！」

一同が手を上につきだして声をだす。武道館が揺れるほどの関の声だった。

「主将、一つ納得できないことがあります。自分はどうして今回主将と一緒に行動できないのでしょうか」

一人の男の子が前に出る。どうやら、今年入部した人間みたいだった。

「それは、全員で狭い校内を行動すると、退却する時、非常にもたつくからだって言ったと思うけど」

「ですから、何故その……、主将のグループに入れなかったのでしょうか、自分は一年ですが、実力はあると思ってます」

はあ、と神楽がため息をつく、そして、床に置いておいた竹刀を取る。

「じゃあ、今から試合をしよう。キミの実力をきちんと計るから」

その言葉を聞いて一年も防具をつけ竹刀を構える。

「わかりました。あと、主将。別に主将に勝ってもいいんでしょう」
ああ、負けたなと俺は思う。見事なフラグの立て方である。そして、次の瞬間にはフラグを見事に回収していた。

試合が始まった瞬間、一つの大きな音を立てたと思ったら、一年生はそのまま後ろにひっくり返った。

「小手を両手に、二発、突きを一発、面を一発かな」

そう、神楽は一つの音にしか聞こえないほどのスピードで、四か

所の有効打を確実に与えていた。

「それに、右肩に一発入れてるわね」

突然後ろから声をかけられる。慌てて振り向くと、道着を来た、背の高い女が立っていた。

俺が全く気がつかなかった。

割と寝ている時以外は人の気配には敏感だと思っていたのだが簡単に後ろを取られ、目の前の女の能力の高さを感じた。

「一応聞いとくけど、入部希望じゃないよね」

「入部希望者じゃないですね」

「残念あなたが入ったら、うちの主将がすごく喜ぶのに、神乃天下くん」

「残念ですが、あいつの望むことの反対をするのが、俺の仕事なん
で」

そう言っただけは、武道館から足をそむけようとした。

「そんなに、急いで帰らなくても……なんなら、その手に持った得物で主将と戦う？」

「遠慮しますよ。かませ犬は一人で十分でしょ」

「なら、私が相手をしようか」

「結構ですよ。序列九位の九条 九信くじょうくしなさん」

「そんな肩書より、剣道部の副主将と呼んでほしいな。なんなら、あだ名の九九くくって呼んでもいいよ」

「八十一さん」

「そこまで言えとは言っていない！」

「今日は帰りますよ。神楽が相変わらず強いってだけで十分な収穫ですよ」

そういつて俺は学校から帰る。

今日一日持ち歩いた、自分の刀を見返しながら思う。

神楽は変わらず強かった。当然と言えば当然だった、刀を捨てたあの日から、神楽は全く鍛錬を欠かしてないんだから。

それに比べて俺である。どうやっても、勝てる気がしないね。特

に神楽とか。

俺が真面目に刀をやっていた時、唯一負けた神楽にどうすれば勝てる？ 卑怯な手も考慮しながらいろいろ考えるけど、負けているイメージしか浮かばないね。

家に帰ってもずっと考えるけれど、どうもいい案が出てこないの
で、結局眠った。

夢の中で思う。あれ？ 今日一日で得たものって、双鐘からの憎悪と弓道部が腐女子部だったことと誰も俺達の味方をしてくれない人がいないってことだけじゃない？

開幕

遠足前に眠れなくなる、なんてものとは、俺は無縁だった。寝過ぎて遅刻したことはあったが……。

だから、今日もぐっすり寝て起きたら、丁度いい時間だった。そう、六時に目覚ましをセットしてあったのに、俺が目覚ましたのが八時十五分でも。

うん、いい時間じゃないか。ゆっくり、着替えて飯食って歯磨いて、歩いて行けば……九時十分。余裕でアウトじゃねーか！

俺は即行で着替え、トイレをして、朝食のパンを啜えて、刀を持って、靴を履いて全速力で駆けだして行った。

落ち着け天下。こういう時、焦ってる時ほど面倒なことがよく起きるんだ。走っていけば、二十分で着く。そうすれば八時五十分で十分OKだ。

この時の俺は、最強に冴えていた。角から飛び出てくるパンを啜えた美少女を華麗にかわすことで「ちょっと気をつけなさいよ」と主人公に絡んでくる勝気な美少女との出会いを絶ち切り、キョロキョロしている幼稚園の女の子がいると、近くにいた母親風の女性に「娘さん迷子になってますよ」と言って即行で解決することで、少女と一緒に母親を探して「お兄ちゃんありがとう」といわれるイベントを回避し、後ろから来るひったくりを自分を追い越す前に裏拳で一発で気絶させ、犯人を追いかけまわすという出来事もキャンセルした。

その甲斐あってなんとか、予定通りの時刻に到着した。入口では首輪を配っている。

どうも最後の参加者らしき俺は、ひったくるように戦拳委員の奴から首輪をもらって、即座に装着し、葵ちゃんの教室へと移動する。するとすでに教室は序列の上位者が、開始を今か今かと待っている。当然全員葵ちゃん狙いである。やはり、現在の序列一位でなく

ても、十分に獲物として魅力的らしい。

「遅いよ。もう」

葵ちゃんは俺をみるとほっとした顔をして、俺に言う。
すると教室にいる全員が驚いた顔をして、俺の方を見ている。

「まさか、天上のパートナーはあの男か」

「誰だあれ」

「この前、天上に勝った奴だよ」

「まじでか」

「強いのか」

「いや、不良にパシリにされてたぜ」

「そんな奴と何で？」

様々な言葉が行きかう。その隙に、俺達は窓側に進む。できるだけ敵を背にしなくてもすむようにしたかったのだ。

本人に丸聞こえの噂話はしばらく続いたが、校内放送が始まり全員が一瞬で静かになった。

「えー、はわわ。マイクテス、マイクテス。これより、学園長から生徒会長決定戦拳の開幕を宣言してもらいます。学園長どうぞ」

「えっ、これ、もうマイク入ってるの？ ちよつとキミ、マイク渡す時はオフにしてから渡してくれないと困るよ」

緊張感ゼロの声が聞こえる。生徒全員がズッコケる。

「えー。みなさんにこれから、殺し合いをしてもらいます」

ありきたりなセリフをおちゃめな学園長が喋る。

ちよつとは自重してくれ、学園長。確かに首輪をしてるから、まんまみた目がそれだから、言いたくなる気持ちはわかるが。

アウトかセーフかで言えば、ファールだから。

「ごめんなさい。間違えました。ジジイちよつとはしゃいじゃった」
歳を考えろよ、爺さん。

「では、気を取り直して。これより、会長戦を始める。皆の物、今までの鍛錬で得た力を存分に振るえ。では、始め！！！」

その一言で、全員いきなり、表情を引き締める。そして、まずは

隣にいるもの同士で潰しあわずに、目先の獲物である葵ちゃんに全力で襲いかかった。

俺はと言うと、葵ちゃんの後ろに隠れてやり過ごそうとする。当然、俺を狙って来る奴もいたが、攻撃そのものは大したことはなかった。回避に専念し、葵ちゃんに全て任せた。

なんてことはない、集まっていた連中は大したことのない連中ばかりで、葵ちゃんが簡単に倒していく。近くの敵はそのまま刀を振るって倒し、気を使った攻撃をしてくる奴らには、一瞬のタメで練り上げた気を倍返しでぶつけて粉碎していく。昨日見た雑誌に載っている優勝候補たちが面白いぐらい簡単に失格になっていった。

正直、始まる前までの心配が馬鹿らしく思えるほどだった。

けれど、日頃の行いが悪いのか開始から五分もしない内に俺の考えは変わることになった。

ガシャーンと派手にガラスが砕け散る音が教室中に鳴り響き、敵がロープを使って外の窓を突きやぶりながら、教室へ入ってきた。敵は十数人、全員アサルトライフルを持っており、彼らの得物は一斉に火を噴いた。

窓際にいた俺は突入してきた射撃部連中に蹴っ飛ばされて、葵ちゃんのすぐ近くまで転がった。

動転する頭と心臓を落ち着かせ、立ち上がって現状把握に努める。銃撃を行う彼らの背後にぶら下がっているロープを見ながら考える。どうやら敵は屋上からロープを利用し窓からの奇襲をかけてきたらしい。そして、目の前の連中が何部か、彼らの手に握られたアサルトライフルをみて理解する。

連中は、射撃部。この学園で唯一銃を中心に使った部活動である。銃という、人類の開発した最強の兵器は、こと、この学園ではあまり重宝されなかった。この学園の人間は、銃撃されても武器などで割と簡単にかわせ、そのうえ、銃弾は有限である。つまり、リロードという戦いの中では致命的な隙がある。

さらに、この学園で使用できる銃弾は、実弾ではなく特殊ゴム弾

である。当たり所が悪ければ気絶するほどの衝撃を与えられるが、武道の達人が簡単に急所に弾を当てさせるわけもなかった。

だが、集団戦になれば、そのうえ、きちんと訓練されていれば、話しは変わってくる。リロードの瞬間を他の人がカバーし、二人がかりで、撃破する。まさに、悪魔の戦法だった。

「天下くん大丈夫？」

「大丈夫じゃないです。どうにかして、逃げられない？」

葵ちゃんを囲んでいた連中は射撃部の斉射によって悲鳴を上げながら倒れていく。

周りに人がいっぱいいる内に何とかして状況を改善しないといけない。とりあえず脱出することを葵ちゃんに勧めた。

「OK。天下くん。逃がしてあげるから、しばらく頑張ってね」

彼女は俺の言葉を聞いて、頼もしい台詞を俺に向かって答える。だが、なんとなく、俺は嫌な予感しかしなかった。

「えっ、あの、どうやって!？」

「光になーれ」

そう言って彼女は、刀を振りかぶる。無論俺に向かって。

俺は事態が飲み込めず、彼女の四番バッター顔負けのフルスイングを俺は自分の刀で真正面で止める。だけど止まらない。

俺は窓に向かって豪快に、さながら場外ホームランのように吹っ飛んだ。

俺は窓から入ってきた射撃部を三人ほど巻き込んで、窓の外にはじきだされる。

ちよっと待てよ、確かに教室からは脱出できたけど、ここって三階じゃねーか！

水平に飛んでいた体はすぐさま重力に導かれ、俺は地面へと落下していく。

「死ぬー!」

俺は窓の向こうの彼女に怨嗟を込めてさけんだが、彼女は俺に手を振って「がんばって」って言うのと、更にカオスな状態になった戦

場で刀を振るいにいった。

消えゆく彼女の姿をみて、今日もう一度再会できるがどうか不安になりながら、地面に落ちた。

結論から言うと俺は、無傷で着地できました。一緒に巻き込まれてくれた三人が肉のクッションとなって、見事に着地できたのです。クッションとなった人間は着地の衝撃で、みんな気絶しており、あの絶望的な場所から俺は見事に無傷で脱出できたわけです。

そこまで考えて、あの人は俺をブツ飛ばしたわけじゃないよね？

俺は彼女の大胆な行動を思い返しながら俺は立ち上がってその場から逃げようとする。かなり目立つことをしたし、人が集まって来るかもしれない。

だけど、チャキという、銃を構える音が聞こえ、俺が振り向いた時、もうすでに十人ほどの人間が俺に向かって銃を向けていた。

「うごくなよ。手を挙げて、その場で負けを宣言しろ」

勘弁してくれ、開始早々だけついてないんだよ。教室から死を覚悟するダイブを見事成功させたのにごらんのありさまかよ。

大勢に囲まれながら、自分の運の悪さを呪う。

銃を構えた十人は迷彩服を着ており、リーダー格の男は軍帽をかぶっていた。

「お前らも、射撃部か？」

「いや、違うが」

「なら何部だよ？俺は射撃部以外に銃を使う部活動を知らないぞ」

「なら、教えてやろう。私たちはサバイバルゲーム同好会だ」

「同好会！？」

「そうだ。それもかなりマイナーな。だが我々は、キミの存在をよく理解しているよ。序列一位の神乃天下くん」

やばい、手も足もでない状態で向こうは俺を倒す気満々である。

「キミを倒せば、我々の名前を上げることができる。我々も日陰ものの名前を返上できるのだ」

「へえ、俺にそんなに価値があったんだ。で、誰が俺を倒すんだ？」

「フン。キミを誰か個人が倒せば、功績が部ではなく、個人の物となるだろ。ゆえにキミは自分で負けを宣言するのだよ」

なるほど、個人の序列の順位が上がることで、部全体を評価されるほうがいいってことか。

「へえ、あんたは組織全体の事をきちんと考えてるんだね。手柄をよくこどるのではなく、自分も含め分け与える。素晴らしい考え方だね。だけど、俺は、自分から負けは認めないよ」

「何！」

「だから、序列を上げたい奴が、進んで俺を撃てばいいよ」

俺は賭けに出る。まだ、この会長戦が序盤なればこそ、賭けだった。

リーダーの男は悩んでいる。そう、この場で、誰かに俺を撃たしても、自分が俺を撃っても、この組織のこれからがギクシャクするのが目に見えている。序列一位を倒すという栄光は誰か一人しか手に入れないのだから。

そのうえ、目の前にいる組織が射撃部のように、会長戦で後半まで生き残れるほど、強そうでも、よく訓練されているとも思わなかった。

恐らく今回の会長戦で一番の宝物を手に入れたけれど、彼らはその宝を扱い損ねているのだ。

ゆえに次の俺のたわごとを聞かざるを得なくなる。

「あんたらさ、正直な話、この会長戦最後まで勝てると思う？」

「それは……」

どうやら、馬鹿じゃない。自分たちの力をきちんと理解している。「なら、あんたらは俺を撃つしかないね。それしか、今回の戦いで名を上げる功績はない」

「そのようだ」

男は、顎から手を話し、腰に下げているホルダーからリボルバー式の拳銃を取り出す。

ヤバい、煽りすぎて、覚悟を決め始めている。

でも、慌てるわけにはいかない。慌ててうえでの、口から出まかせだと思われたら一巻の終わりである。二巻に続かないね。

「だが、あんたらの名前を上げる機会は失っても、あんたらのサバイバルゲーム部全体の利益になる可能性があるとしたら」

俺はほんの少し声のボリュームを上げて話しだす。

「失格になると思って、口から出まかせを言い始めたか」

嘲笑しながら、リボルバーを俺に向ける。

「生徒会長の特権を知ってるよな」

「序列一位、部活動費などの運用権限などだな」

「俺と協力してくれたら、そっだな、しばらくの間この会長戦と一緒に戦ってくれたら、お前らの部費を三倍にしてやるよ。たしか、同好会もきちんと活動していれば、学校から資金を提供できるはずだな」

「そ、そうだが」

リーダー格の男の後ろにいる連中は、三倍というセリフに反応し、軽くうき足だっている。

リーダー格の男自身も軽く動揺している。

「もちろん、成り上がりの序列一位が、こんなこと言っても本当に生徒会長戦に最後まで、勝てるかどうか信じられないだろうから、もうひとつ、教えてやるよ。俺のパートナーは天上葵だ」

「本当か！」

食いつくように俺に聞いてくる。

俺は頷く。

「さあどうする。俺なんかを倒しても、この中の一人の学園生活での待遇が良くなるだけだが、みんなで俺に協力してくれれば、全員がハッピーになれるかもしれないぜ」

「この場で逃げるための方便ではないという証拠は？　この戦いで勝ち抜ける、勝算はあるのか」

「証拠なんてない。だけど、逃げるためだけなら、普通あんたらに協力しろ何て言わないと思うぜ。『逃がしてくれたら』って言うだけでいいんだから。勝算についてはあまりない。あつたら、開始早々、あんたらにつかまったりしないしね」

ここで、リーダー格の男が、嘲笑ではなく、普通に声を出し、腹を抱えて笑いはじめた。

「OK。神乃くん。キミのことが気にいった。キミに賭けてみよう」

そして、全員が銃をおろし、男が目の前まで近づき握手を求めた。
おにみや

「鬼宮 しんと 心人だ。同好会のメンバーからは、軍曹と呼ばれている」

「よろしく、軍曹」

そうやって、今回の戦いで、俺はようやく待望の仲間を得た。まあ、実質会長戦が始まって、序盤の序盤のため、全く持って、気を緩めるわけにはいかないのだが。

とりあえず俺は、軍曹からこの場から、離れる事を提言した。ろくな戦闘も行っていない参加者と一箇所にとどまって隠れている人間に差し向けられる、ジョーカーが怖かったのである。

人数は増えたが、戦力が倍増しているわけでもない。多くの人間が火薬を使って撃つ銃が初めてらしく、そのうえ、戦いそのものが、苦手だという奴までいた。

どうして、この学校に来たんだよ……。

「天智学園と間違えました」

俺とおなじかよ！

彼らに、二人で一人の人間を効率よく倒せというアドバイスをおこない。校舎を目指し、歩いて行った。校舎を目指したことに深い意味はなかったが、物陰から攻撃できるように、外に比べれば物が多い校舎内を選んだ。

懸念事項は、校舎内部で訓練された射撃部と出会おうと恐らく全滅、

大人数で活動している部活動グループなどに会おうと、二人で一人を狙う作戦の成功率が下がるので、全滅する確率が高まるということだった。

不安を募らせて歩いていると、急にけたたましいエンジン音が聞こえた。

「ヤバイ、総員植え込みのなかに行け」

軍曹の一言で全員が慌てて植え込みへと逃げ込む。

「一体何が始まるんです！」

事態をあまり理解していない、サバイバルゲーム同好会の新人が軍曹に聞く。

「大惨事だ」

軍曹の代わりに俺が答える。

今まで、会長戦はすぐにリタイアするだけの存在だったがこれだけは知っている。

爆音と共に、何十台ものバイクが、さっきまで俺達の通っていた道をすさまじい勢いで通り過ぎ、「ヒヤッハー！」と叫びながらコーナーをドリフトしながら走り抜けていった。

「何あれ……」

恐らく今年入学したであろう連中は全員口をあんどあげ、呆然としていた。

その暴走するバイクに驚いていたのではない、搭乗している人間にビクビクしているのだ。ライダーは全員肩にとげパットをつけ、髪型をモヒカンにして世紀末ヨロシク、なカンジで走り抜けていったのだ。

ちょっとした仮装大賞である。

「あれは、二輪研究部だ。毎年会長戦で耐久レースをおこなって、誰が一年間部長をするか決めるんだよ」

「いや、それよりあの衣装……」

「あれは……わからん。きっと、二輪研究部は世紀末なんだよ」

バイク集団は新入生に天武学園でのカルチャーショックを与えた。

ただ、エンジン音が聞こえたら、隠れればいいだけなので、俺達は簡単に彼らをやり過ごした。

ちなみに、一年生の時、俺は彼らに踏みつけられて、会長戦をリタイアした。その時のセリフが

「あいたたたたたたたた………（人生が）終わった……」
である。補足しておく、たの数だけ身体の上をバイクが通過していきました。まじトラウマです。

そうした、いわば会長戦の名物を見物したのち、俺達は割れた窓から校舎内へ侵入した。それと同時に敵に出会う。

敵は二十メートルほど先の曲がり角から顔を出した。

格好はまるで新撰組のような目立つ紺色の羽織をしており、全員が腰に刀を差している。

「最悪だ」

そう軍曹がつぶやく、目の前にいる敵はこの学園内でも有名な武闘派集団「真剣組」だった。

この学園には、剣道部がある。しかし、普段の彼らは竹刀を使用し、剣道のルールにのっとりながら鍛えている。だが、普段から真剣を使用し、より実戦的な鍛錬を行う連中もいる。それが真剣組。部員十四人全員が序列五十位以内にランクインしており、リーダーは序列十位の化物級の實力である。

連中はこちらに気がつく、まず一人が高速で一直線に飛び出してくる。そいつにビビった新人君が、手にもった銃を乱射する。

だが、ビビっている新人君の銃弾は当たらず、銃の反動で銃口が上を向いているのに、構え直しもせずにただひたすら、乱射する。

トリガーハッピー状態である。

恐怖におびえたただひたすら、乱射する新人君だったが、以外に早く彼の恐怖は終わりを告げた。飛び込んできた男にあっさりと斬撃を打ち込まれ気絶させられたのだ。新人君は気絶して、ようやくト

リガーを離し、あたりに静寂が漂った。

飛び込んできた男は、昨日読んだ雑誌に載っていた、序列十位の真剣組リーダーの「近藤 誠」だった。

次に近藤はの中で唯一刀を持っている俺に目をつけ飛び込んできた。それと同時に真剣組の連中も雄たけびと共にこちらへ向かって来る。

俺は手に持った鞘に入ったままの刀で近藤の真一文字に振るった斬撃を受け止める。

「チッ」

近藤は小さな舌打ちをすると。彼は俺達の集団の背後に向かって飛び、俺達を挟撃できる場所に立つ。

久々の実践で俺も反応できるかどうか不安だったが、どうやら目は相手の動きについていている。

序列十位相手の攻撃を受け止めれたことで、ほんの少しだけ、ブランクについては安心した。

「軍曹、こいつは俺が何とかするから、みんなで他の奴らを止めろ」

「止めろと言われても、普通に撃ってもあいづらには通用せんぞ」

「スモークを使い！」

俺の叫びで、ようやく同好会メンバー達は銃を撃ち始める。だが、銃弾を真剣組の連中はあっさりとはじき、またはかわしていた。だが、軍曹がスプレー缶のようなものを投げ込むと事態は一変する。

あたりに煙が立ち込め、ほんの十メートル先も見えなくなる。

「撃てー！」

そんな状況で軍曹が叫び、それと一緒に全員が銃を乱射する。

そう乱射でよかった。狙い何てつけなくてもいい。ここは、狭い廊下で逃げる場所はほとんど無く、中途半端にこちらに向かってきたため、来た道に戻るのも難しい。

そして、何より今まで簡単に行っていた、銃弾をはじくという行為が視界がゼロになったことによりできない。何にも見えない世界で彼らは、一方的にいたぶられることになる。

「グハ」

何にも見えない中で、苦しむ声が聞こえる。どうやら、見事に銃弾をくらっているようであった。

「貴様ら」

「どうした、早く来いよ。お仲間が全滅するぜ」

目の前の男は怒り、俺の方向を睨めつける。

ザコはなんとかあったが、こっちがまだか。

彼の首輪をみたが、警告音鳴っていない。どうやら、彼のパートナーはまだリタイアしていないらしい。

しゃあない。相手をしますか。

俺の挑発で彼はすぐさま動き、こちらへ攻撃してくる。

今度は上段からの振り下ろしだったが慌てず、左手で持った刀で相手の斬撃を斜めに受け流す。

そして、手首を返して、刀の柄で相手の顔面、眉間に目がけ打ち込むが、これは首をひねってかわされる。そして、受け流した刀を返して、もう一度攻撃してきた。

この攻撃は俺が後ろへ飛んでかわそうとした、だが、さすが序列十位、想像以上に速い攻撃をかわしきれず胴に受けた。

痛みはあったが、カス当たりで行動に支障はでなさそうだった。だけど、さすがに一筋縄ではいかない。俺の一撃は確実に入ったと思ったのだが。

「なかなかやるみたいだな」

こちらに向かって声をかけてくる。

「そっちは、あんまり大したことなさそうだな。序列十位だから、身構えてたけど、全然勝てそうだ」

心のなかでは、序列十位の言葉はすぐくうれしいのだが、いけません、相手に冷静に戦われるとこちらが不利である。がむしやらに攻撃してもらうために、俺はわざと相手を挑発する。

「そうかい。なら、本気でやってやるよ」

けれど、俺の行動完全に裏目だった。目の前の彼は、さっきまで

のスピードの三割ましでこちらに、攻撃してくる。

俺はカウンター狙いだったわけだが、とてもカウンターなどできるスピードではなく、後ろに飛ぶ。

そして、新人君の倒れている場所まで押しこまれる。そこまで行くと、仲間が銃を撃っている場所はすぐ背後だった。そのうえ建物の内部でスモークを使ったため廊下全体に広がり始めており、視界がかなり悪くなっていた。

ここで止めないといんなやられて終わる。

そう思い、相手の攻撃を待つ。次で終わらせる決意を持って。

近藤はそのまま俺を押し切るつもりらしく、すぐさま近付き上段から高速で振り下ろす一撃を放つ。

俺は刀を横に寝かせ、相手の攻撃を両手で止める。そして、近藤の顎目がけて足を振り上げる。

だが、相手はあっさりとバックステップで回避する。

「ありがとよ」

俺は小さな声で新人君に呟く。

今俺がしたのは、蹴りではなく、新人の銃の肩に架けるストラップを足に引っ掛け、蹴りあげることだった。

蹴りあげられた銃は、バックステップをした近藤の顎にジャストで当たる。

煙で視界が悪くなっているため、俺が足に銃を引っ掛けているのがわからなかったらしい。そして、俺は引っ掛けた銃を手元に引き寄せ、近藤との距離を一気に詰める。

互いに、刀など振うことなどできない距離。だけれども、俺には攻撃をいとも容易く行える。

「待て！」

近藤は叫ぶが俺が遠慮してやるわけもなく、相手の胴体に突きつけたアサルトライフルをぶっ放した。

俺はゼロ距離でアサルトライフルをぶっ放すという、えげつない行為を行った。

ライフルの銃声が十発ほど鳴り、続いて近藤の倒れる音が流れた。俺は近藤の首輪をすぐに確認する。首輪は赤く光っており、どうやら勝利したようであった。

「窓を開けて、煙を外に出せ」

そう軍曹が命令し、みんなが窓を開けた。ちなみに現在煙のせいで、警報が鳴り、スプリンクラーが作動している状態であった。

しばらくすると、廊下には見るも無残な気絶をした、真剣組の面々がいた。中には、気絶していない奴もいたが、首輪は赤くなっており、警告音が鳴っていた。

「我々の勝利だ」

そう軍曹がいい、残った八人が歓喜の声を上げた。そして、軍曹が、新人君と新人君のパートナーに敬礼した。みんながそれに続いた。俺も敬礼した。

俺達は勝利した。けれども、無傷ではない。あえなく、部隊最初の犠牲者になった新人君に最大限の敬意を払った。特に俺は彼が残した銃のおかげで、勝利できたのだ。彼には言葉にできないほど感謝していた。

「すぐにここから離れよう」

敬礼を終えるとすぐさま、軍曹に提言する。

「俺達は派手にやり過ぎた。大きな戦いのあとには、絶対に残党狩りを狙う輩がいるし、人数も減った今何処か違う場所で落ち着いて体制を立て直した方がいい」

軍曹は頷き俺達はその場所を後にする。振り返ると戦拳管理委員と思われる連中が失格者を運んでいた。

こうして俺達は優勝候補をぶったおし、会長戦の次なるステージへと進んだ。

開始時刻から四十分、この時全体の参加者の半分が倒されていたが、会長戦そのものはまだまだ始まったばかりだった。

敵前逃亡

俺達は空き教室に入り、弾丸のチェックなどを行い、再び移動をする。

移動時に、窓を見ると校庭でも激しいバトルが行われ、その隙間を縫うように、二輪研究会が走っていた。

「次はどうするんだ」

軍曹に聞かれ、困りながら答える。

「どうもこうも無いね」

はつきり言えば、逃げ回らずに立てこもりたいのだ。一か所にいることがジョーカーの標的対象となるから動きまわっているだけで、本当はバリケードを作って、万全の体制で待機していきたい。

警戒しながらの進軍は神経を使い、ただ歩くだけの行為でもみんなに疲労の色が浮かんでいた。

「敵がいなさそうな場所をずっとグルグル回るだけだよ。今はまだみんなが潰しあってる。だけどその中にわざわざ参加する必要なんてない。結局は最後まで生き残ることが大事なんだ。撃破数一人でも最後に生き残れば勝利なんだよ」

「だが、進行方向に敵がいらない保証などどこにもないぞ」

「だけど、じっとしてればジョーカー（ババ）を引かされるぜ。ジョーカーが何者かはわからないけど。戦いたくはないね。ルールで無敵と決められてるようなやつと」

「だが、このままだと、ただ消費するだけだ。どこかにバリケードでも作って、籠る方がいい。無論ジョーカーが来たら逃げられるように」

確かに、一理ある。

というか大分ある。

この時俺は軍曹の意見に賛成しようとした。けれども、その言葉を言うことは無かった。というか俺達の相談

は全て無駄になった。

「みつけたのです。神乃天下。約束どうり三カ月の怪我、いや、ぶっ殺してあげるのです」

やけにかわいらしい声で物騒なセリフが聞こえる。

そしてそこには、小さなツインテールの少女がいた。双鐘恋である。

「どうして……」

「どうして、私が会長戦に出てるのかって不思議そうな顔ですね」

「当たり前だろ。どうして葵ちゃんと一緒に参加しなかった！」

「ちよっとタイミングが悪かったのですよ。今回私は戦拳管理委員会、および序列委員会の推薦とある仕事を受けてたのです。一度了承すれば、断れなかったのですよ」

この段階で俺は目の前の相手がどんな仕事を受けているのか半分分っていた。だけど、聞くのは少し恐かった。

もし、俺が思っている通りなら、最悪な結果が見えているから。

「一体仕事ってなんだよ」

祈りながら聞いてみる。

「もちろん、ジョーカーです」

半ば予測どうりのセリフが帰って来る。

「ちよっと待てよ、お前がジョーカーってのは納得しよう。でもジョーカーってのは、戦闘をしなくて一箇所にとどまる人間をやるんじゃないのか？俺達は戦闘もしてるし、一箇所にもとどまってないぞ」

「それは単なる優先順位です。ジョーカーは常に徘徊し見つけた敵を倒す。本部から戦闘行為を行っていない奴を倒せという命令を受けた時に優先してそいつらを倒すんです」

冷や汗をかきながら尋ねる。

「そして、俺達は？」

「無論ぶっ殺すのです」

「総員逃げるぞ」

彼女のセリフと共に軍曹が叫びみんなを逃がそうとする。

ナイス判断だ。

だけど俺はすぐに逃げなかった。まだ、俺には希望的観測があるから。無傷で俺が助かるという方法が。

「なあ、お前は知らないかもしれないけど、俺のパートナーは天上葵ちゃんなんだよ。もし、俺を失格にすれば、葵ちゃんも失格になるぞ。なあ、お前の大事なお姉さまに迷惑かけたくないだろ？」

映画の最後で命乞いする敵キャラのように情けなく俺は敵に救いを求めた。

「そうですね、確かにお姉さまに迷惑をかけるのはよくないですよ
ね」

「そうだ、その通りだ。だから、俺達のことは、見逃してくれ
どうやら、こいつは馬鹿じゃない。」

助かった。心からそう思う。

「だが、断るのです」

しかし、俺の安堵はすぐさま砕かれた。

「なっ……」

「お前のような下衆の言うことを聞く気はないです。それにお姉さまは、生徒会長になってもいいことはあんまりないです。あの人は一生懸命会長職を全うしてきた。でもお姉さまに感謝する人はいないし、お姉さま自身の精神を追い込んでいます。お姉さまは疲れてる、そんな状態になるのをわかっていてまで、お姉さまを会長にしようとは私は思わないです」

「じゃあ、俺はどうなるの？」

「みなまでいわせるのですか？」

「ですよー！」

逃げた。脱兎の如く。

「逃がすと思うのですか？」

「ですよー！」

彼女は、腕を振ると袖に隠していたのか、ペンが出てきて、それ

を彼女は指の間に握りしめそれを俺に向かって投げつけた。

それは弾丸とそんな色ないスピードで飛んでくる。俺はとっさに前方に転がってかわした。

そのペンは、前を走っていた、同好会のメンバーに当たった。

ペンなど当たっても大したことないと思うかもしれない。事実俺が本気でペンを投げてても大したことにはならない。仮に機械などを使って、ペンを弾丸と同じスピードで投げててもこの学園の連中にとってほとんどの奴には大した事にはならないだろう。

ただ、投げた人間は双鐘恋。この化物揃いの学園で二年生ながら序列二位の化物なのだ。たとえペンとはいえ、化物が投げればそれは十分に凶器で脅威で恐怖だった。

恐らくは気でも込めて投げたのだろう。不幸にも俺が避けたペンに当たったメンバーはその場で倒れた。ペンは背中に背負った銃を貫通して彼を貫いていた。

彼はすぐさま気絶し、同時に近くを走るメンバーの首輪から警告音が流れた。

「やば」

洒落にならん。そう思ってすぐに立ち上がり、みんなを追う。双鐘はペンを今度は手に三本握り投げつける。

一本は俺に向かい、もう二本は俺の前方を走るみんなに向かって飛んでいく。

「しゃがめー」

自分に目がけて飛んでくるペンを刀で落としながら叫ぶ。

しかし、同好会のみんなは決して格闘が得意ではない。よって、叫んだ声に反応できた奴はあまりいなかった。

ペンはメンバーの一人に当たり、もう一本は狙われた奴がしゃがむことで、すんでの所でかわせた。

二人やられた。それは同好会のメンバーが半分になったことを表していた。

双鐘はペンを投げるのをやめ、こちらを追いかけるため走り始め

た。

そんな時、軍曹が振り返った。銃でこちらを、双鐘を狙ってトリガーを指にかけて。

「総員撃てー」

軍曹が立ち止まったのと、軍曹の叫び声を聞いて、他の三人も立ち止まる。そして同じように銃を構えて撃った。

けれど、弾丸は彼女にとってはまるで脅威ではないのか、いったん立ち止まり、顔色も変えずに指で挟んだペンを使い弾き落としていく。

四人のライフルの斉射を全弾涼しい顔して叩き落す。その光景は彼女が序列上位にふさわしい実力を持っている事を十二分に現していた。

だが、さすがの彼女も弾丸を止めるために立ち止まった。これが最高によかった。

俺は彼女との距離をとることができた。そして、銃を撃つみんなの所に行く。

「軍曹助かったよ。このまま撃ち続けながら後退しよう」

「無理だな。恐らくあいつの方が速い。それに相手は飛び道具持ちだ。リロードの瞬間に攻撃されて終わるな。それより、お前はここを俺達に任せて逃げろ」

「でも……。そうだ！ スモーク弾で同じように」

「駄目だ。さっきの時投げたので終わりだよ。あんまり長いこと會長戦で戦うことになると思って無かったんでね」

「他に何か無いのか？」

「もう、無いな。それより速く逃げろ。四人で撃ってるからあいつをやつとので、足止めできてるんだ。一人でも欠ければあいつは止めれん」

「わ、わかったよ。絶対俺、この戦いに勝つから、それを楽しみに待っててくれ」

俺は決断した。生贄になると言った軍曹の意見を尊重した。尊重

したなんて言えば聞こえがいいが、単に見殺しにしたのだ。仲間を見捨てて一人だけ逃げるのだ。

俺は手に入れた最高の仲間以最悪の恩返しをすることを受け入れ、足を特別棟に続く廊下に向ける。

「餞別だ」

軍曹はリボルバー式の拳銃を俺に投げた。

もう俺にはいらなから、そう言って俺に向かって……。

最後のプレゼントを受け取り俺は、その場から逃げだした。

そして、丁度特別棟へつながる渡り廊下を走り終えた時、銃声が鳴りやんだ。

残って足止めしてくれた彼らの稼いだ時間は三十秒程度だった。だが、俺はその時間で、十分に距離を取れたと思っていた。だが、彼女にとっては、大したことは無かったらしく、すぐさま俺を追跡してきた。

足の速さは向こうの方が上だった。双鐘は当初結構離れていた距離をみるみるうちに縮めてきた。

なんせ基本廊下は直線である。ハッキリ言えば姿を見失うこと自体普通あり得ない。

そして、彼女はペンで攻撃しながらの追跡だ。俺はそれを防ぎ、かわしつつの逃亡で距離が開くわけがない。

「潔く諦めたらどうです？」

「殺されることがわかっててあきらめる奴がいるかよ」

「今なら、半殺しですませますよ」

嘘だ！ こいつとのお話しは無駄だね。

葵ちゃんについた害虫を、汚物を消毒するのに必死なのだから。会長の切り札は俺にとってのジョーカージョーカー（ばば）となり襲いかかってきた。しかもババを引いてくれる人が他にいない。桃鉄で、キングボンビーに気に入られている状態だね。なすりつけられない。

ちなみに特別棟の一階に潜んでいた参加者は俺と双鐘の争いに巻き込まれ全員ぶっ倒れていた。

ずっと全力で走りさすがに俺も疲れてきているが、ここで立ち止まるわけではいけない。

俺にも考えはあるんだ、逃げるための……。どう転ぶかはわからんが、チャンスはゼロじゃない。

そう考えた時、近所から苦情がでそうなほどの、爆音が轟き世紀末ライダー達が通りかかる。

俺もただただ、考え無しに逃げてたわけじゃない。昨日の雑誌に載っていた二輪研究会のコースに沿うようにしていたのだ。

後ろから、俺と双鐘をかわしながら大層なスピードで駆けようとする先頭のライダーに俺は狙いを定め、彼の目の前に飛び込んで、刀で思いっきり彼のモヒカン頭を打ち込んだ。

目の前に人が飛び込んだ時点で動揺していた彼はあっさり俺に殴られ、意識を失った。俺はそのままバイクに飛び乗り、意識を失った彼を棄てる。

俺はバイクの運転の仕方は全然知らない。ギアの変え方すら知らない。だけど、アクセルのひねり方だけは知っていた。

「フルスロットルだぜ」

ひゃっほー、と叫びながら、廊下を駆ける。

全身に風を感じながら、髪の毛を自然と逆立てながら、俺は全力疾走を始める。

双鐘が追いかけてくるかどうか見るために一瞬後ろを振り返るが、彼女もさすがにバイクと追いかっこはする気が無いのか立ち止まっていた。

「助かった」

「誰がです?」

俺の独り言はくそ甘ったるいロリ声によって、会話へとステップ

アップした。

後ろを見ると先ほどまで確かに立ち止まっていた双鐘が一瞬でバイクの後ろに追いついていた。無論走ってである。どうやらさっきまでの俺との追いかっちは遊んでいたらしい。

くそつたれな野郎だね。ホント。

「お前、さっきまで手を抜いて走ってたな」

「違いますです、さっきまでは、準備運動です。いきなり全力だと怪我が怖いですから」

「あーそうかい」

畜生め。

そのまま俺は廊下を飛び出し、今度は中庭へバイクで駆け出した。外の中庭をバイクと人間が同じ速度で走るといふ夢の追いかっけが実現した。

だが、それは結構早めに、終わりを告げる。中庭の終わり、俺はカーブで曲がろうとした時、双鐘はペンを投げる。

ペンはあっさりとバイクのエンジンとタイヤを破壊し、バイクは派手にぶっこける。

「ちよっ、待てよ、死ぬぞ俺」

バイクは火花を散らし、黒煙を辺りに振りまきながら武道館にぶつかって、爆発した。

乗っていた俺は、バイクがこけた瞬間、地面に転がってバイクと離れることができたので何とか爆発には巻き込まれなかった。

ゴメンねバイクの持ち主。俺が悪いんじゃないけど。

俺は転んで、ボロボロになったけど、それでもまだ止まるわけにはいけない。もう少しで俺にも逆転できるチャンスがあるんだ。

俺は傷のことなど何も考えずにすぐさま立ち上がり、目の前にある武道館へ俺は全力で飛び込んでいった。

今までの逃走はこの武道館が目的だった。ここまで逃げれば、助かる方法があった。相手が女ならば。ただし確率は三分の一だが。

剣道部は今回グループを三つに分けると言うことを、神楽から聞

いていた。そして、武道館を本部とし三つのグループの内一グループが武道館で待機休息を行い、残る二グループが外に出て戦うと、こうして、ローテーションで補給と攻撃を繰り返せば、ジョーカーの標的にされにくいというものだった。

だから、この中に神楽がいる可能性は三分の一。

俺は武道館のドアを祈りながら開ける。

「誰だ！」

ドアを警備している子達に剣を向けられる。だが、すぐさま。

「待て」

神楽の声が響き、剣の構えを解く。

幼馴染が武道館にいることに安堵し、後ろを見ると、双鐘はペンを指で浪人回ししながら遊んでやがった。どうやら向こうは俺を追い詰めた時点で満足し勝利を確信している。そのうえ、敵が増えても意に介さないらしい。

「双鐘、一ついい台詞を教えてやるよ、『相手が勝ち誇ったとき、すでにそいつは敗北している』」

「別に勝ち誇ってはいないです。ただ、これからあなたを倒すっていう楽しい出来事に心が躍っているだけです」

双鐘……、お前って最低な奴だったんだな、残念だよ。

でも、まあ、もうここまでくれば俺を倒すっていうのは不可能だ。俺は神楽に向かって真正面に立った。

見せてやるよ、双鐘、俺の切り札をな。

「神楽、紹介するよ。俺のパートナーの双鐘だ」

そう言うと、さっきまでの神楽の表情が崩れる。前から、どうやら神楽は、俺と女子がパートナーを組む事を許容できないらしい。すぐさま、神楽は刀をすぐさま抜いて、俺の後ろにいる双鐘に向かって、神速を持って切りかかった。

「あんたなんか、死んじゃえばいいんだ」

「シンジャエバインダーなんていうなよ」

昔は凜としている子だったのに、今じゃ頭の中シャッフルされた

みたいにカオスな言動しか言わなくなってきたるな神楽……なるほどね、これがキャラ崩壊というやつか。

最近ますます言動が、ヤンデレキャラみたいになってるし、そんな、神楽は不要だ、かえてくれ。

そんなことを考えている合間にも、俺の幼馴染はヤンデレさながらの迫力を持って彼女に攻撃する。

左片手一本突き、刀を使った技の中でもっともリーチが長いであろう攻撃を神楽は双鐘に向かって放つ。

事態をよく読みこめていない双鐘は自分に向かって、何故、殺意を込められた一撃を放たれているのかわからないまま、後ろにバックステップした。

バックステップ、その行動は間違いではないと思う。

事実刀は彼女に届いていなかった。だけど、神楽は気を使えるのだ。

気を使う奴との戦いでは、気を練るという動作があるため、懷まで入ってしまったえば、純粋な戦いになることが多い。だけど、まれに気を練らずに気を放てる奴もいる。

そういう奴を天才と言うのだろうか？ まあ、その理論で言えば、神楽は間違いなく天才だった。

「竜牙絶刀」

かわしたはずの突きは神楽の放つ気によって、双鐘まで届き、そのまま彼女の軽そうな体は中庭に立っている木まで叩きつけられる。まるで、彼女のバックステップがそのままその木まで届いたような光景だった。

彼女は低く苦しそうな声を発した後、気絶したのかその頭を垂れた。

「ゴメン！」

ジョーカーを倒した光景を見て、一瞬呆けていた俺を現実に取り戻したのは神楽の一言だった。どうやら、双鐘を本当にパートナーと信じていて失格になったことをわびているらしい。

俺的には、あんなふうにあっさり勝つと思っていなかった。しばらくの間、戦うことになってその隙に俺が逃げると言う計画を立てていたのに。とりあえず何て言おう。いやどんな顔しよう。こんな時どんな顔したらいいかわからないの。笑えばいいのだろうか。笑えよベジータみたいな。

「ははは」

「どうして笑ってるの？」

「気にするな」

どうやら気が動転しているらしい。

「それより、早くここから逃げた方がいいぜ、彼女実は俺のパートナーでもなんともなくて、ジョーカーだから。すぐに医療班が来て、意識を取り戻したら、またバトルになるぜ」

「えっ!？」

「ゴメンな神楽。助かったよ。それじゃあな」

俺は軽く神楽に謝ると、すぐさま武道館から立ち去った。もうそろそろ、開始から一時間以上経つ。そろそろ葵ちゃんと合流しないとまずいね。

柳の下のどじょう

「留守番電話サービスです。合図の後にメッセージをどうぞ」

電話がつながらない。学生の友である、携帯がつながらないのだ。苦戦しているのかな。電話にも出れないほど……。そうだとしたら詰んでるな。

現在十時半、小腹がすき始めるこの時間帯。もうそろそろ、実力者ぐらいしか残っていない時間だった。

俺は非常用にいつも持っている、飴ちゃん（チュパチュパチャップス）を舐め始める。

甘さが身にしみ、そして、飴の糖分を頭に少しだけ回しながら考える。

俺が今後生き残るために必要なのは、葵ちゃん。これは絶対条件だ。神楽と一緒に行動するという手もあるが、あいつは剣道部。絶対最後には戦うことになる。それにたぶんあいつは俺と葵ちゃんがタッグを組んでることを知ったら問答無用で攻撃するね。間違いない。

さて、どうやって葵ちゃんと合流する？ 携帯がつながるのを待つのか？ または、かかって来るのを待つのか？

それは少々分が悪そうだね。もしかしたら、携帯を落として無くしている可能性もある。

あたりで派手に戦っている場所でも探していくか？

それもどうだろう。彼女に挑もうという挑戦者たちに近づくだけでも嫌なんだが。それに暴れている相手が葵ちゃんと違ったら目も当てられないぜ。

じゃあ、最後の手段で、学校の放送室で放送でもするか？

一番馬鹿な方法だね。彼女が来るよりも先に、双鐘の方がやって来るよ。そのうえ、放送室は特別棟の四階の一番端の部屋だ、逃げようとするれば、四階からのダイブをしないといけない。そんな無茶

はしばらくお預けにしたいもんだ。

結局の所、歩きまわって派手に戦っている場所を遠くから確認しながら探すしかないね。じゃあ、とりあえず見晴らしのいい教室棟屋上でも行ってみるか。

そう思い俺は、足を教室棟へと向けた。

ここまで来ると、銃などを使う連中はいなくなったのか、銃声はほとんど聞こえてこなかった。

射撃部なども積極的に乱戦に突入していたから、恐らく消耗も早かったのだろう。

そして、教室棟の中に足を踏み入れる。中は酷かった。

辺り一面のガラスは割れており、廊下には血が飛び散っていた。確実に派手なバトルがここで行われていた証拠である。

やれやれ、どこが脱落したのかと、俺は廊下を見渡す。

部活道の連中が戦ったのなら、そこいらにそいつらの痕跡が残っているはずである。

そして、廊下の片隅に落ちていたのは、サッカーボールと野球ボールとバットだった。

あいつら、校舎内で戦ってたのかよ！　なんでそこだけインドアで決着つけたがるんだよ！　お前ら普段あんだだけグランドの使用権で揉めてんだからさ、グランドで戦えよ！　というか、結局あいつら相討ちにでもなったのか、生き残りの気配すら感じねー。

相討ちという部分が気にかかり、俺はもう少し、この場を探してみた。もしかしたらジョーカーにやられたのかもしれないと思ったのだ。

ジョーカーならペンでも落ちていると思って少し詳しく、教室の中まで、歩いて行く。そこにあったのは薬莢と使用されていない手榴弾のようなものが落ちていた。

射撃部にやられたのかな？　というか今回の射撃部気合い入ってんな。いつもは人数がいても序盤であっさり消えて行くのに。だけど、閃光手榴弾のピンを抜き忘れて投げているところを見るとやっ

ぱり、戦いなれはしていないのかねー。

そう思いながら、閃光手榴弾をポケットにしまう、きっと役に立つだろうと確信めいた予感を感じながら。

探索の終わった俺は教室を出ようと振り返る、その時気配を感じた。一人ではなく集団だ。

とりあえず廊下からは見えないように、教室の廊下側の壁に隠れ、姿勢を低くしておいた。

「お前何人やった？」

「三人」

「俺の勝ちだな。四人だ」

「負けたよ。俺はたったの二人だ」

「俺は、五人やったけどさ、全員ザコだぜ」

「お前はさ、たった二人って言うけど、そのうち一人は野球部キャプテンだろ。あいつ一応序列十八位だろ」

「まあね。でもあいつらしぶとかったな、おかげで生き残りが四人だけになっちゃったよ」

「まあ、インドアでは俺達には勝てないってことだな」

「ちげーねー。アハハハ」

とりあえず連中の馬鹿な会話を聞きながら、相手が四人しかいない事を知った。

どうする、倒すか？

ここで逃せば、また射撃部の連中で部隊を組むに違いない。なら、戦いの後の連中を叩いておいた方がいいだろう。

俺は息をひそめてドアに潜む。

本日初めての先制攻撃だな、そう思い、呼吸を整える。大丈夫、銃を使う奴が、四人程度なら大丈夫。

それに俺には一年間の引きこもりの経験がある。インドアで俺に勝てると思うなよ！

奴らの馬鹿な自慢話が俺の潜んでいるドアまで来た時、俺はドアを渾身の力で蹴り飛ばした。

「なっ！」

ただ、ほんの少しタイミングがずれて、前方の二名しか巻き込めなかった。そのうえ、どうやら気絶もしてない。

だから俺が飛びかかったのは、ドアを蹴り飛ばした時巻き込まれなかった二人の内の弱そうな男である。

突然前方の二人がドアと共に吹っ飛んだことにビックリして、硬直した彼は簡単に俺の攻撃を許し、首筋に俺の一撃を受けてあっさり気絶した。どうやら、ドア攻撃に巻き込まれなかったもう一人の方が相方だったらしく、彼の首輪から警告音が鳴った。

あと二人。

だが、ドアに吹っ飛ばされた二人は、すぐに起き上がりこちらに銃を向けた。

そのため、俺は気絶した奴を離さずそのまま彼らに話かけた。

「撃たない方がいいよ」

「はあああああ？」

「ルール知ってると思うけど、気絶している人間に過剰な攻撃は失格行為になるんだよ」

「それがどうした。お前が気絶しているようには思えんぞ」

駄目だこいつ馬鹿なタイプか。

俺がため息をついたのを隙だと判断したのか、彼らは銃をこちらに向かって斉射してきた。

ホントの馬鹿だ。

俺は刀で彼らの弾丸を防がずに、気絶している彼らの仲間を盾にした。

ドスドスと鈍い音が響く。そして、撃たれた痛みで、一瞬彼は目を覚まし、そしてまた連射された痛みで、気絶した。

そして、彼らの首輪から警告音がなった。

「なっどうして！」

「あんたらの攻撃は、気絶した参加者への攻撃として受け取られたんだよ。だから俺が親切に撃つなって言ったのに。フレンドリーフ

アイアで失格なんて笑えるね」

まあ、狙いは確実に俺に向かっていて、俺が彼を盾にしないと弾は気絶していた奴に当たらなかつたけど。

「卑怯だぞ」

負けた彼らはまだ吠える。

「卑怯なんて言えば、あんたらは四人で俺は一人だぜ。それにルールを詳しく理解してない方が悪いんだよ」

そういつて、盾にした奴を廊下に寝かせ、俺は階段へ向かって歩き始める。

我ながらこすい勝ち方だ。一時期は武道を真剣に習っていた人間としては本来なら恥ずべき勝ち方だとは思う。

そりゃ、理想は正面堂々と戦いたいさ。

でも理想と現実の違いなんだ。俺は弱者、それが現実。

ならありとあらゆる手を使ってでも勝たなくちゃいけないだろ。

目標は同じように勝利なんだからさ。

そう自分に言い聞かせ、俺は屋上へと続く階段をのぼっていく。

他の階は見ないことにした。恐らくさっきの連中が教室棟の連中は倒してくれてると思うし、さっきの卑怯という言葉を少々引きずっていて安全確認についてないがしろになっていたのかも知れなかった。

屋上への扉を開けると、最悪なことに、道着を着た兄妹が待ち構えていた。

「はあ、やっぱり、俺はツイてないのか」

俺は天を仰ぎみて、つぶやく。

目の前の連中は空手部最強の兄妹。唐草からくさ兄妹だった。俺が買った雑誌によれば、彼らは、妹が二年で序列二十九位、そして、兄は序列八位の実力者。

現在の俺の勝率はゼロだった。二対一で来られたらどうすんのよ。どうしようもない。

反語しか出てこないほどの、ピンチだ。

「いやいや、お主はツイているさ。我々と戦うことになって良かったな」

「どこがだよ！ ていうか何でこんな場所に？」

「それはだな、仲間とはぐれて、いったん見晴らしの良い所に行こうとしてここに來たのだ」

俺と一緒に理由か。

「それでどうして俺がツイてんだよ。序列八位さん」

「ふふ、普通はこういう時、二人がかりで戦うものだろう。だが、ワシは一对一の戦いしか、好まんのだ」

「なるほどね。二人いっぺんに相手はしなくてもいいんだ」

だけど、それでもつらいね。

「お兄ちゃん。私にあの人譲ってよ。お兄ちゃんばかり、序列の高い人と戦ってずるいよ。あの人序列確か一位でしょ。それにあの人ならなんか序列と違って見たために、というか強くなさそうだし、譲ってよ」

「うーむ。どうするか。もともと、我が部は今回他の徒手空拳の部の連中に勝てればそれでよかったからの。他の部の残りは見当たらんし、もしお前が負けることになっても全然構わんのじゃが」

「負けるなんてひどいよ」

「すまんすまん」

かなりいかついお寺の住職みたいな坊主頭の男が、かわいらしいショートカットの女の子の頭を撫でている。

すごくシュールな光景です。もし、あのお兄ちゃんと呼ばれている男にサングラスがかかっていたら、俺はその場で百十番していたね。

「そうじゃの、お前さんはどっちがいい。女と戦いにくいというなら、ワシが相手になるが」

そのセリフで俺はしばらく悩む。そして、決断する。

「お兄さんで。どうせ一对一でもあんまり勝てる気がしないから、

それなら、序列の高い人と戦って負けたいしね」

「じゃそうじゃ、お前は、そのフェンスに座って見とれ」

そう言って妹さんをフェンスに追いやり、お兄さんは俺と真正面で向き合った。

妹は口を膨らまして不満そうにしていたが、おとなしく兄の言うことを聞いていた。

「お前さん。あの天上葵を一発で倒したらしいの。ワシも彼女と戦ったことがあるからわかるんじゃが、あの子は相当強い。そんな彼女に勝つお前さんは、今はそんな弱そうなふりをしているが、無茶苦茶強いんじゃない」

「一言、誤解がないように言っとくと、俺は弱いよ。葵ちゃんに勝ったのはまぐれ。というか、その時のこと覚えてないから、いまだに信じられないし」

「まあよい、戦えばわかる事ぞ」

「そうですね」

刀を握る手に力が籠る。さあ、超強敵とのバトル再びだ。

「お前さん、刀は抜かんのか。抜いてもらってから初めて構わんぞ」

「お気づかいなく。刀身を見ることなく終わりますよ」

そう言うとお兄さんは笑い始め、「了解した」といって拳をにぎり、ファイティングポーズをとった。

先に動いたのは、向こうだった。

まっすぐに右のストレートが俺の顔目がけて飛んでくる。俺はその攻撃の軌道に刀の柄を入りこませ強引に身体の外へずらす。

その動作に合わせて、俺が右足の蹴りを横っ腹目がけて放つが、それを今度は相手がキャッチする。

足をとられる、力は当然向こうが上、体勢が崩されて強烈な一撃をくらうイメージが頭に一瞬浮かぶ。だが、すぐさまイメージを消し去り、左手に握っている刀を地面に突き立て、第三の足とし、俺は左足で飛び上がり踵で相手のこめかみを狙って放つ。

だが、その攻撃も相手は簡単にスウェーでかわす。ただ、右足は

開放された。

俺の攻撃で自分自身が、一回転しながら着地し、その瞬間に軸にしていた刀を今度は鞘を持つのではなく柄を持って、相手の顎を狙って、下から上へ振り上げる。しかし、相手も俺目かけ、拳を突きだしていた。

共に顔を狙った攻撃はその途中でお互いに弾きあい、お互いにうしろに飛んで、距離をとる。

「大した一撃だな」

先ほどの一撃が当たった、右手をさすりながらこちらに向かって声をかけてくる。

「ありがとうございます」

息を整えながら相手を見る。そして、掴まれた、足に意識をやる。あいつの握力半端ねー。

そう思わずにはいられないほど、足が痛かった。そのせいで動きが鈍くなるほどでは無かったが、蹴りはやめたほうがいいと頭が命令を下す。下手に足を潰されるほうがやばい、と。

そうして、俺の攻撃の幅が狭まり、勝機がまた減ったのを知ってか知らずか、またしても相手の攻撃が飛んでくる。

文字どうり飛んできた。空中に飛び上がり、手刀を俺の頭目がけて撃って来る。とびかかる巨体の空手チョップを俺は受ける気などなく、俺はもう一度うしろにさがる。

だが、彼の攻撃はさらに勢いをます。今度は、足技で、まずは前蹴り、これは俺が刀で受けると同時にジャンプし衝撃を全て逃がす。そして、俺が着地する時に、相手は前蹴りを放った場所から回転しながら飛び込み、お手本にしたくなるような、回し蹴りをぶっ放す。だが、その程度の攻撃をガードできない俺ではない。もう一度刀で、彼の攻撃を止めようとした。けれども、それに失敗した。

蹴りをまともに喰らわないということが、防御の成功というなら、俺は成功した。しかし、ダメージを受けないということを防御というのなら、完全に失敗した。

彼の蹴りはジャストミートする必要なんてないのだ。刀でガードさせるだけで十分に効果を発した。

そう、俺は彼の蹴りを止められずに吹っ飛んだのだ。

壁に叩きつけられる。肉がつぶれる痛みが全身を襲う。一瞬意識が飛びかけるが、何とかこらえた。ただ、頭がクラクラしている。どうやらちよつとばかし、やばそうだ。

「やるね。こんなに痛い思いしたのは久しぶりだよ」

「少々身体が軽すぎるの。もう少し、体重をつける事を進めるぞ」

「はは、考えとくよ」

「足元がふらついておるの。どうする、ギブアップするか？」

「冗談。最後まであきらめないのが、俺のモットーですよ」

「いい心がけだな」

「ただ、一つだけ聞いていい。あんた気使えるの？」

「無論使えるが」

「なら、それで止めをつけてくれよ。波動拳でも霸王翔吼拳でもかめはめ波でも剛掌波でもいいからさ」

「どうしたんだ。最後まであきらめないでいるような奴のセリフとは到底思えないが？」

訝しげにこちらを見ながら構えを崩さず話しかけてくる。

「負ける時はカッコよく負けたいんだよ。敵の必殺技でやられたならまだカッコがつくでしょ」

「なら、望みどうりに」

そう言って、彼は片手を俺に向かって突き出す。

次の瞬間彼の手に気がたまっていき、空気が吸い込まれていくような感覚を味わう。

かといって自分はいまだに足がふらふらしており、どうも相手の攻撃をかわせそうもない。

背水の陣だね。完全なる劣勢。……だからこそ、一発逆転が狙えるんだけどね。

俺は真っすぐに立ち、刀を右手に持ちかえる。

この場にいる全員が、空手兄妹の兄の技に集中している。

ゆえに俺は小さく笑って、右手の刀を振り上げて放り投げる。

無論相手は、彼の妹に向かって。

「えっ!？」

兄の勝利を確信し、兄の技に集中していた彼女は、俺の不意打ちに面白いぐらいまともにくらった。投げられた刀は、回転しながら、彼女の頭を強打していき、彼女はその場で倒れた。

ピーピーと彼女の兄の首輪から失格を告げる音が流れる。練り上げていた気が一瞬で離散し呆然としている兄は妹に対して一瞥し事態をようやく飲み込む、

「お前は!」

鬼のような形相で彼はこちらに近づいてくる。

「なんだよ」

相手の迫力にビビりながら後ずさりする。

「お前は、それでも男か!　なんださっきの行動は!　お前にプライドはないのか」

大声でまくし立ててくる。

やめてくれよ、目立つ行動はよ。敵が来ちゃうだろ。

「ないね。言ったら最後まであきらめないのが俺のポリシー。最後まで、勝利することを考えたら、ああいう行動をとるしかなかったんだよ」

まあ、嘘だが。でも最初から俺は弱い方を倒すことしか考えていなかった。自分の実力なら、刀一本で本気で戦って勝てるのが序列五十位ぐらい。それもまあ結構厳しいんだが。だからこそ、確実に最後には勝てるように、待機している彼の妹の隙を常に探っていた。「第一、卑怯な行動は弱者に許された武器だぜ。強者が武で優位に立つなら、卑怯とルールで戦うのが弱者だ。まあ大目に見てくれ」

「ワシはな、今さっきの戦いに、確実に興奮していた。ワシの攻撃を久々に真正面から受けて、ワシに向かって来る人間が最近いなかったからだ。ワシはお前は決して弱者とは思わん。胸を張って自分

の武を誇っていいと思う。だから、こんな終わらせかたをされたのが残念だ」

あーあ、勝手なこと言うよ。弱者の経験がない奴はさ。

「うるせーよ！ なにが武を誇れだよ。負けりや意味ねーだろうが、俺みたいな弱者にとって、強者は弱者に何されても文句言えねーんだよ！ そんなに正々堂々戦ってほしいのかよ、そうだろうな、正々堂々俺とあんたが戦ったらあんたは俺に絶対負けないもんな！ 第一、お前ら強者が正々堂々なんて言葉を使うのはな、堂々と弱いものいじめがしたいからにすぎねーんだよ」

俺が叫ぶ。久しぶりにキレちゃったみたいだ。

相手は俺の言葉を聞くともう何も言わずに、気絶した自分の妹を抱きかかえてドアを開け下へ降りて行った。

自分の力に誇りを持て？ 馬鹿なこというなよ。だったらなんで俺は破門されてんだよ。堂々と戦え？ 結局ただの負け惜しみだろうが、俺じゃないのに、俺の力をわかった風な口聞くなよ阿呆。

どれだけ努力しても、限界が見えてる人間もいるんだよ。だったら、何してもいいだろうが。せいぜいルールに反しないこすい方法ぐらいとらせろよ。ああ、くそったれめ。

俺は頭をかきむしりながら、刀を拾う。俺は現在序列上位を二人倒した。けれども、胸の内は全くすっきりせず。わけのわからない怒りのみが心に沸いた。

とりあえず、頭がクラクラしているのが納まるまで、屋上で葵ちゃんを探しながら、ゆっくりした。非常食の飴ハイペロチュウをなめながら。

あんまり長居するのは良くないことはわかってはいたが、頭痛がとれないうちに行動する方が、危険だと思ったからだ。

外を眺める。どうやら、グランドの方で派手な戦いをしているらしい。多くの人間が集まっていた。

だが、どうやら葵ちゃんはいない。それから、隣の特別棟の教室を覗きこむ。

一階にはいない。

二階にもいない。

三階にもどうやらない。

四階にも発見できず。

ならどこなのか、俺は万遍無く辺りを見渡し、そして彼女をようやく発見した。部室棟に刀片手に、一人ずつ人を狩る人を発見した。どうやら部室に隠れている人間をジョーカーでもないのに倒しているらしい。

怖い怖い。だけど今は頼もしいね。

そして、俺も立ち上がり、屋上から去ろうとした。立ち上がった時、一瞬身体と頭に痛みがあったが、どうやら大丈夫そうだ。

出口に近づき、ドアノブを握ろうとする、しかし、おかしいことにドアが勝手に開いた。

あれこのドア自動ドアか？

そんなことを思っていると。

「咲夜の奴どこにいったんだよ」

そう言って、恐らく俺と同じようにはぐれた人間を探しに来たのであろう男と出会った。

ツイてない、そう思って、とりあえず相手との距離をとった。

男は髪の毛をツンツンに尖がらせて、やけに長い学ランを着ていた。いわゆる高校デビューみたいな格好だった。

……誰だこいつ？

まず始めに相手の顔をみて思ったことである。どうやら、昨日買った雑誌に載っている、序列百位までのランキングには入っていないさそうだった。

「うお、敵かよ。しかも、もしかしてアンタ神乃天下じゃね。まじかよ。序列一位におとといった人っすよね」

俺も有名になったもんだ。どうやら、相手は俺のことを知っているらしい。

「違うよ」

とりあえず嘘をついておいた。うん。深い意味はない。

「間違えるわけないっすよ。あの五年ぶりの女子序列一位、更に言えば天武学園初めて女子で二年時の段階で序列一位になった神童である天上葵を一発で倒した、遅れてきた天才っすよね。新聞部の号外に学生証の写真で大きく載ってましたもん」

「えっ。学生証の写真使われてたの」

まじかよ。ただでさえ、残念な顔なのに学生証の顔なんて残念度が五十パーセント増量されるだろ。ていうか、誰でも学生証の写真って手に入るのかよ。もうやってられんな。

「いやはや。最高の相手っすね。現在序列一位のあんたを倒せば、華々しいデビューが飾れるぜ」

「一つだけ聞いていいか。現在のお前の序列いくつよ」

「俺は現在千位です」

「何年生？」

「一年っす」

ちなみに、一年でも序列の上位に入るやつはいる。一年の序列を決めるのは、入学式である。例年ボコボコの乱闘事件の中で、序列選考委員会が一年を含めた全校生徒の序列をとりあえず決める。そして、会長戦でほぼその一年間の序列が決まる。まあ廊下で毎日のように序列を賭けたバトルがあるが、変動は微々たるものである。

そして、現在の学園序列最下位である彼、俺も学年では最下位だったが、学園全体の序列では最下位では無かったのに。

俺はとりあえず負けはないと思った。

「じゃあ、もう質問はないっすか？ ないならやりましょうぜ」

「もう一つ。名前は？」

「神風 なみかぜ 凪 なぎ っす」

「神風が吹かないのか。悪い名前だな」

「ほっといてください」

どうやら、そこには触れてはいけないらしかった。彼は少しいじけ始めた。

「いいすよね、先輩は、天下なんて名前かっこいいっす」

「はあー！　どこがだよ」

「神乃天下なんてむっちゃかっこいいじゃないっすか！」

「この名前はな、神の治める天界の下にいる人。つまりただの人間を表すの」

「嘘だ！！」

まあ、親に聞いたことないけど、天下なんて名前、そうでも思わないと名前負けしまくってるだろ。

「まあどうでもいいだろ。ほら一年生かかってこい」

「ラジャー！」

手で来い来いするとまっすぐに向かって、拳を振り上げて俺に向かってきた。

おそい。

さっきまでの空手兄妹（兄）のほうが、千倍ぐらい速いと思わせるほど、遅かった。まるで街のチンピラ程度の攻撃だった。

俺は彼のパンチを受け止めようともせずカウンターで顔面めがけて蹴りを撃った。

すると綺麗に顔面に攻撃入って、彼はパンチをやめて、後ろに下がった。顔を見ると鼻血が出ていた。

もしかして、序列どうり無茶苦茶弱いのか？

そう思えるほど彼のパンチにキレを感じず、反応も悪かった。

だが、彼は鼻血をぬぐうとまた向かって来る。こんどはボクシングのように腕で顔をガードをしながら。

彼は左手のジャブを二發放つが、全てかすりもせず俺が避けた。

そして、左手が当たってもいないのに右での大ぶりのストレートが放たれる。俺はこの攻撃を一步前に出ながらかわし、相手に背を向け、通り過ぎた風の右手を掴み一本背負いをする。そして倒れた風の顔面を思いつき蹴りあげた。

コンクリートに叩きつけ、顔面への蹴り。ほぼ完ぺきに決まった。本当ならもう動けそうもないはずだが……。

彼は立った。どうやら、相当タフらしい。

はは、正々堂々ね。

俺は左手にもった刀を地面に置いた。

自分より格下と戦ってわかった。お前ら自分が強くて、自分より弱い敵としか戦ったことないから正々堂々なんていうんだな。確かに自分の方が強いと思える相手だと、少しフェアプレーの精神がわかるね。

じゃあ俺も武器も使わず正々堂々と戦ってやるよ。自分より大分格下だけだな。

相手はふらふらしながら、こちらに向かって来る。また同じように、ただのパンチ。受ける必要もない。首の動きだけで、相手のパンチをかわし今度は、俺がボディーに三発打ち込む。そして、腹を押さえて苦しみながら頭を垂れる頭に追撃の一発。地面に膝をついて苦しむ彼の腹に止めのトゥーキックを入れて、彼が転がっていく。この学園に入って初めて、敵をボコボコにしていた。自分が強いんじゃないかという錯覚と弱者をいたぶる陶醉感を味わっていた。なるほどね。確かに気持ちはいいかもね。いじめが無くならない理由がよくわかる。

でも彼はそれでも立ちあがった。口元から、血を流しながら、そしてせき込みながらこっちを見てきた。

彼はボコボコにされていて目も目は死んでいなかった。それどころか信じられない一言を言う。

「もうそろそろ本気でいってもいいっすか？」

「へえっ!？」

「だって最初から本気だと、先輩が活躍するシーンが無いだろうと思って、それと俺結構タフなんで、少々の攻撃なら大丈夫ですし」
手加減ってまじかよ。そんなことして、なんの意味があんだよ。

意味わかんねーよ。

「でも先輩って結構えげつない攻撃するんですね。もうちょつとで俺死んじゃいますよ。見た目から、気絶狙いで顎狙いの一発で終わらせるタイプのやさしい人だと思ってましたよ。なにかやな事でも

ありました？」

「うるさい！」

相手の言葉に耐えきれず叫んだ。なんだよ。あの余裕。やっぱり自分の方が強いからあんなセリフがいえんのか？ 何なんだよ。あー、むかつく。少しくらい俺をいい気分のままにしとけよ。

今度は俺から仕掛けた。左手であいつの顔面狙ってぶん殴りに行く。

だが、その攻撃は相手の右手の甲で弾かれ軌道がそれる。そして彼は拳を掌にして脇腹に当てる。

「我流、『春風』」

彼が叫び足を地面にめり込ませるほど踏み込んだ。

瞬間俺の体が宙に浮く。そして、弾丸が如くスピードで吹っ飛び、屋上のフェンスに叩きつけられ、フェンスが大きく軋んだ。

フェンスのおかげで落下は防がれたが、自分の体の形にそってフェンスが大きくへこみ、その上、金網がところどころ破れていた。

もしこれがフェンスでなくコンクリートの壁なら俺は木端微塵だったろう。俺は打ち込まれた脇腹を押さえながら思う。

骨にひびでも入っているのか息をするだけで鋭い痛みが俺を襲う。やっちまったね。完全に後に響く怪我だ。

ふらふらと足元がおぼつかない状態ではあったが何とか立ち上がり、目の前の風を見る。彼は頭に手を当ててなにやら悔やんでいた。

「失敗した」

はあー！ なんて言ったよあいつ。

「何が失敗したんだよ」

脇腹を押さえながら俺が聞く、彼はこっちを向きながら説明してくれる。

「俺の技ですよ。ホントは俺の技は完璧に入ると、相手はその場でぶっ倒れるんですよ。逆に相手が飛ぶってことは、技の威力を完全に相手に伝えきれてないってこと何っすよ」

まじかよ、俺がこんなに痛がってんのに、あれでカスあたりなの

かよ。

本当は良く考えればわかるはずである。会長戦に初参加である一年がこんな時間帯まで生き残ってるてこと自体、本人に実力がなければありえない出来事であると。

けれど、俺は前の戦いのことを引きずっていて、相手の序列を聞いて、一年との戦いで優位に立っていた。これらのことが俺が気付かなければいけないことを全て忘れさせていたのだ。

ふふ、そうだね。まともに俺が戦って勝てる相手がこの学園にごろごろいるわけないよね。

「お前ってさ、どうして序列最下位なんだよ。いまの技の威力なら、いいとこ目指せるだろ？」

「それはっすね、俺入学式に遅刻して、俺が行った時には、乱闘が全て終了してたんすよ。それで、最下位っすよ。でもっすね、この会長戦で優勝すれば、序列一位じゃないっすか、最下位から一位なんてインパクト十分じゃないっすか。だから一ヶ月間序列最下位のままでいたんすよ。そしたら、おととい、序列九百九十位の先輩が序列一位でしょ、なんか、インパクトは薄れちまった気がするんすよ」

「そいつはわるかったね」

俺は再び拳を構える。刀が手元にほしいところだが、刀を手放したところと現在位置は離れすぎている。取りに行った瞬間狙われる。

凧もこちらに近付いてくる。ゆっくりと、素手のままで、そして互いに己の拳が届く距離になる。

凧はすでに手は掌の形になっている、どうやら本気らしい。そして俺はもう一発でもあいつの攻撃、たとえば、カスあたりだとしても耐えられるとは思えなかった。

俺は先ほど攻撃をあっさりと流され、カウンターを喰らっているから、自分から動く気はなかった。ただ、拳を構えて相手の出方を見る。

しかし、相手も手を出さない。互いに石になったように動きを止

める。

ただ、その間も俺は腹の痛みをしつかりと感じていた。自らが冷静に戦おうとすればするほど、痛みは思い出したように襲ってくる。息をつきながら、相手の出方をずっと待つ。額に痛みからか緊張からかわからないが汗が噴出し、それが地面にたれ始めた頃、痺れを切らした相手がようやく手をだした。

掌底は今度は俺の顔を狙ってきた、だが、スピードは本気を出す前とあまり変らない。つまり割とあっさりと俺はかわせた。

少々気が抜ける。かわしたあと、相手に反撃することを忘れるほど。攻撃をかわれた彼は連続で今度は腹に向かって掌底を繰り出す。ただし、今度はきっちりに対応する。その場で俺はしゃがみこみ彼の掌底をかわし、背を向けて彼の腕を捕まえもう一度一本背負いをする。

ただし、こんどは地面に向かって投げけるのではなく、すぐ後ろにある。俺が張り付いていたフェンスに向かって。

「ぐぎゃ」

フェンスへ投げられることは予想していなかったのか、妙にマヌケな驚く声が発せられる。

彼は上下逆さまに、頭が地面で、足が天に向かって、フェンスに張り付く。そして俺はすぐさまフェンスに向かって走りドロップキックを打ち込んだ。

無論、風に向かってではない、あいつはコンクリに叩きつけ蹴り飛ばしても踏みつけても平気だった、そんな男に俺のドロップキックが聞くとは思えない。俺が蹴ったのは、フェンスを支える、ポールだった。

メキメキと不気味な音を立てて、フェンスをつなぐ金具が壊れる音がした。そして俺はもう一発フェンスを蹴る。すると完全にフェンスは壊れ、片方のフェンスが、空中に向かって宙ぶらりんになり、もう片方のポールでフェンスを必死に支えている。風は空中に宙ぶらりんになったフェンスにぶら下がるだけの状態になった。

両手でがっちりとフェンスを握る凧だが、屋上の目の前には俺がいた、こちらに飛び掛っても、彼を叩き落すぐらいは簡単にできる。フェンスを伝って助かろうとすれば、今も軋んだ音を立てている、フェンスを破壊すればいい。彼が四階から落ちても大丈夫なほどタフかどうかは知らないが、とりあえず目の前の恐怖は去る。

「ひいー!!」

彼は下をみておびえたような声を出す。どうやら彼も屋上から飛び降りても平気なわけではないらしい。

さあ、最後通牒をつきつけようか。

「凧、ここから落ちたくなかったら、負けを宣言しろ。そしたら、俺が赤ん坊を抱き上げるように優しく助けてやるぞ」

「まだ、俺は負けてない」

凧はおびえた表情を一瞬で改め、こちらに向かって戦意十分でほえる。

俺は、フェンスを蹴った。当然フェンスがゆれ凧も再びおびえた表情になる。そして何より、フェンスを支えている金具が不気味な音をひびかせながら、徐々にフェンスを支えられなくなって、地面に向いて傾き始めていた。

「あんまり話す時間もお前を説得する時間もなさそうだ。さっさと選択しな、助けてもらいたいのか、死ぬかも知れない目に遭いたいのか」

彼はしばらく黙り込む。そして、五秒ほど悩んで、出した答えは、「負けは認めない。俺のパートナーも一生懸命戦ってんのに、俺が簡単にあきらめてたまるか。先輩、残念ながらあなたの望んだ結末にはならないよ」

だった。

いいね。その正義の味方みたいな、物語の主人公みたいな台詞。

俺は大きく笑った。声をあげながら。

「いいね。かっこいいね。気にいったよ」

そういつて俺は壊れたフェンスにゆっくりと近付く、彼は覚悟を

決めたのか、目をつぶった。

俺はフェンスをゆっくりと校舎に向かって引き寄せた。

「えっ!？」

落とされると思っていた彼は驚き大きく見開いた眼でこちらを見た。驚きと戸惑いがあった。

そして、近付いたフェンスにぶら下がった凧に向かって手を差し伸べる。彼は戸惑いながらその手を握った。

「どうして？」

再び屋上に立った彼は俺に聞いてくる。

「そうだな、お前と契約がしたくなった」

「なんすか。助けてもらっても仲間にはなんないっすよ」

「いや、会長戦の間は別にいい。あのな、凧、お前との戦いに俺が勝ったらお前俺の舎弟になれ、それとお前の技教えろ」

面喰らったのか、凧は口をパクパクと動かしてはいるが、言葉を発していない。

「なんっすかそれ!」

ようやくでた言葉は信じられないという台詞だった。まあそうだろうね。この学園って自分より序列低い人間全員が舎弟だしね。

「いやはや、俺がもし序列最底辺に戻っても、ずっとこき使える舎弟を一人くらいほしくてね」

「先輩馬鹿なんすか!？」

まあそんなに突っ込んで聞いてくるなよ。単に屋上から突き落としてお前が死んだりするのが怖かったから助けただけなんだから。

俺は凧と距離をとりながら離れ転がっている自分の刀を拾う。そして、柄のトリガーの部分に指を突っ込んでくるくると回す。

「まあさっきの話はこの場で俺がお前に勝ったらの話だから。嫌なら全力でかかって来いよ」

そういうと、彼も構える。どうやら目は真剣、助けてもらったことなど、頭のどこかに飛ばしている。

うん、それでいいよ。そのほうがやりやすいしね。

「なあ、これは推測なんだが、お前の技ってカウンター専門なんじゃないのか、というよりお前の攻撃のスピードが遅すぎるだけかも知れないが。たぶんお前の勝ちパターンは、相手からの攻撃を誘って、それを受け流してできた隙に、お前の技をぶち込むってやつだろ。ていうか、お前の攻撃のスピードがああ程度ならそうでもしないと当たらんのだろ」

刀をぶんぶん回しながら俺が喋る。隙を作って誘っているのだけれど彼からはまったく動かない。俺の言葉も難しい顔をしてだんまりを決め込んでいる。

どうやら凶星らしい。

俺は刀を回すのをやめて、左手でしっかりと鞘を握り締めた。

「オーケー、心配するなよ。今度はこちらから攻撃するから、きっちり反応して、俺に一撃を叩きこもうとしてみるよ、反応できなかったらな」

そして、俺は全ての力を抜く、手の、足の、腹筋の、背筋の、首の、頭の。

当然ながら脱力しきった体は立っていられず、気絶したかのように俺は倒れようとする。尻も慌てたような顔をしている。

馬鹿。ちゃんと反撃しようとしないと終わるぞ。

最速のパンチを出すときにもっとも不必要なのが、腕の『りきみ』である。筋肉というのは、事前に力をいれていては本来の力を出すことは不可能である。

ゆえに『天剣』という無天流の最速の居合いはまず全身の力を抜くことから始まる。全身のありとあらゆる力を抜き、一瞬にそれらを順番に効率よく爆発させるのだ。

相手よりも早く動き始め、相手よりも速く動き、相手よりも疾く攻撃する。ただはやさのみを追求した、攻撃それが『天剣』だった。

眼前に地面が近付いたとき俺は、そこで初めて脚を動かす。事前

にイメージしておいた、普段ならとても脚が付いてこないであろう自らの限界を超えた動きを。

そして、凧との五メートルの間合いを一瞬、いや、刹那で詰める。地面を這うように迫った俺は体を起こしながら、刀の柄に右手をあて、トリガーを引きながら刀を抜く、刀のそりと鞘を十分に利用しながら、相手の顎を狙って俺はリラックスしていた右手を筋肉が引きちぎれるほど、疾く疾く。

凧はその間時が止まったかのようにまったく動かない。というより、俺が速すぎて、ついて来れないのだが。

刀は凧の抵抗を受けるわけでもなく、難なく彼の顎を横に薙いでいく。顎を正確に打ち抜かれればいくらタフなあいつでも倒れるだろう。

彼の顎を正確に薙いだ刀を俺はすぐさま鞘に納める。

カチンと刀を納める音とともに、時が元のスピードにもどったような感覚を味わいそして、ドサっという音を立てて凧が倒れた。どうやら戦いは俺の勝利らしい。まあ初見で天剣を止める奴なんていないと思っていたから、ある程度安心していたが……。

俺は大きく息をつき、それと同時にわき腹の痛みを思い出す。

「舍弟になったからにはこき使ってやるよ」

倒れている凧に、捨て台詞を履きながら、俺は屋上のドアを今度こそ出て行くために開ける。

そして、そこには、かわいらしいツインテールの先ほどまで鬼ごっこをしていた、双鐘恋がいた

リベンジ・オブ・ザ・ジョーカー (前書き)

投稿してた小説の間が一個吹っ飛んでました。

スイマセンでした。

リベンジ・オブ・ザ・ジョーカー

俺は目の前にいる人物を認めたくなかった。よって、とりあえずドアノブを握り締めながらドアを閉めた。

何で、あいつが目の前にいるんだ！俺が屋上で長居しすぎたからか？ そんなに、俺のことが嫌いなのか。そんなに俺を倒したいのかよ。勘弁してくれよ。

涙目になりながら祈るが、程なくして、双鐘がドアを開けようとしてくる、何とかドアノブが回らないように俺は必死でドアノブを握り締める。

まるで包丁を持った押し入り強盗でも来たみたいだ。

そんな風に思いながら、一分、二分、三分、五分、十分、ドアの前で俺達は熾烈な攻防を繰り返していた。力は基本的に俺のほうが強いため、彼女の侵入を拒むのは難しくない。けれど、いかんせん彼女はしつこかった。

かわいらしい声とは正反対の罵倒をドアの向こう側にいる俺に向かって、叫んでいる。

でもなんだろう、かわいい子に罵倒されるのってそれほど嫌じゃないような……

バスン！

そんな阿呆なことを考えたのが悪かったのか、俺の目の前をペンが通り過ぎていく。

あれ、ドアは開いてないのになんでペンが？

俺は恐る恐るドアを見る、ドアは見事にペンで貫通していた。

「ぎゃー！」

一応言っておくがドアは鉄製である。彼女のペンはどうやら、鉄も貫くらしい。

そして、ドアが恐ろしい勢いで穴だらけになっていく、俺はぐさまドアから飛びのいた。

どうやら、相手は包丁持った押し入り強盗じゃなくて、拳銃持った銀行強盗らしい。

彼女はペンを投げまくり、ドアを人型にくりぬいた。そして、まるで映画のようにくりぬいた部分を蹴り倒し、彼女は威風堂々とツインテールをなびかせながら入場する。

そんな彼女が最初にみた光景は、屋上で倒れている、先ほど倒された風のズボンを必死で脱がせている俺の姿だった。

「何をやってるんです!!」

戦いに負け気持ちよく天を仰いで気絶している風のズボンを脱がしている俺に双鐘が問いかける。

「見てわからんか」

「わかるわけ無いです、というかわかりたくないです」

「いやはや、俺の行動の真意を知った時、お前はきつと驚くぞ」

「もういいです。さっきの仕返しもこめて死んでくださいです」

彼女は指に挟んだペンを俺に向かって投げつける、今回は左右両方の手にペンを三本づつ握って六本を一斉に投げてきた。

俺はやつとのことで脱がせたズボンを抱えて、その場から転がるようにして、ペンをかわす。

かわされたペンは気絶していた風の下半身に突き刺さった。

「オうっ!」

気絶していたはずの彼はその一撃で意識を取り戻し、その一撃で口から泡を吹いて、その一撃で何故か気持ちよさそうな表情をして再び気絶した。

気絶した者への攻撃による失格は、どうやらジョーカーには当てはまらないらしい。ジョーカーの彼女も首輪をつけているが彼女の首輪は赤くは光っていない。

すまん風、お前を盾に使ったみたが、駄目だった。

俺はとりあえずいつも握っている刀を自分のベルトに差した。代わりに両手にはまだ風の暖かさが残るズボンを握っている。

まあ、別に風のズボンでなくてもいいんだけどな、目の前に敵が来てるのに、自分のズボン脱ぐのもなんか危ない人みたいで嫌じゃん。

「他人のズボンを脱がしてるひとも十分危ないです」

「あらそうなの。俺が小学生の頃なんかは他人のズボンを脱がせるのが日課だったからな」

「今の年齢を考えてください」

「天武学園三年生ですけど」

「じゃなくて、もう十八か十七ですよね」

「おっとこの世界で、年齢の話はするな、何のためにここまで高校生という表現を使わなかったか考えてみる」

「意味がわからないです？」

「お前らは、これから、学生でありながらお酒を飲んだり、エッチな本を読んだり、タバコをすったりするかもしれない。そんなときに、役に立つのが、『この物語はフィクションであり、登場する地方、生徒、学園などは存在しません、また、登場人物は二十歳以上です』という裏技だ。だがこの技はな、実年齢とか中学生とか高校生とかいう、年齢を特定できてしまう呪文で使えなくなるんだよ。お前らが、安易に高校生です。なんて言ったら、非實在青少年なのに、お前らにいろいろできなくなるんだよ。頼む、お前は二十歳以上、せめて、一万十七歳と言ってくれ」

俺の必死の台詞に戸惑って、双鐘はわけもわからずにうなずいた。チャンス。俺は彼女がうなづいた瞬間できた隙に先ほどの戦いで壊れたフェンスの方向へ向かって走る。幸い双鐘はペンを投げて追撃しようとしなかった。

そして俺は、屋上からジャンプした。

「アイキャンフライ」

前から一度は言ってみたかった台詞を言いながら。

「嘘!」

まさか屋上から飛ぶとは思っていなかったのだろう。双鐘の驚く

声を聞きながら、俺は屋上から垂れ下がった射撃部が突入するために利用したロープにしがみついた。

そう、この屋上にはロープがぶら下がっていた。言わずもがな、射撃部たちが会長戦開始直後に使用したロープである。そしてロープは屋上から三階の教室に飛び込むものと二階に向かって飛び込むものの二種類あり、俺は二階に飛び込むものをつかんでいた。

俺はそのままロープに沿って二階の教室に飛び込んだ、着地した場所はガラスが転がっており、その上で俺は転んでしまっていた。

「痛ってえ」

脇腹を含めた全身の痛みが転んだ瞬間広がった。俺は呼吸を整えながら痛みをひとまず忘却する。

「ああ完全に使えなくなった」

俺はロープを使って降りるときに利用した、風のズボンを見る。

ロープを使って降りるときは手に手袋でもはめておかないと摩擦熱で手はずるずるになる。苦肉の策で風のズボンを利用したわけだが……、使い心地は最悪だった。十分手は熱くなったし、そこそこの痛みも感じていた。

そしてなにより、風のズボンは摩擦熱でぼろぼろになっていた。履けないことはないが、「これを履いて何を隠したいんだ」ってくらい悲惨だった。

ご愁傷様だ風。お前はパンツ一丁で救護班に救助されて、パンツ一丁のまま今日を過ごさないといけない。

あいつに始めに買いに行かせるものが決まったな。カッコいいパンツだな。

「そこは人に見られてもいいカッコいいパンツを選ぶより、普通にズボンをはかせてあげなさいです」

後ろには軽快に着地している、双鐘の姿があり、その手には風のものと思われる、上着があった。

風、かわいそうに上も脱がされたのか、救護班が勘違いしないといいが。

「そろそろ観念するのですね」

「凧お前の犠牲は無駄に終わったな」

「今すぐあなたの行動も無に帰るのです！」

双鐘は手にペンを挟み、爪のように扱い俺に突き刺そうと、飛び込んで来た。

俺はとっさに手に持った凧のズボンを投げつけ、教室を飛び出す。

「汚いのです！」

投げつけたズボンは細切れにされ空中に散っていった。

最後まで無駄になったな、凧のズボン。

教室を飛び出し俺は廊下を駆ける。

全速力で走っているが、双鐘も今回は本気で走っているらしく、すぐに追いつかれる。

「死になさいなのです！」

「ギャオース」

俺は叫びながら彼女の攻撃をかわす、かわす、かわす。

とりあえず、致命傷にはならないように、薄皮一枚のところかわしまくっている。

彼女の攻撃は、ペンを投げつけるものから、ペンを指で挟んで直接攻撃するものに変っていた。それが俺には幸いだった。瞬間的に三つのペンをかわすよりも、連続して振り下ろされる腕の一撃のほうが、俺にははるかに対処しやすい。

とは思いつつも、さすがにジリ貧だ。こっちは手負いのうえ、勝機がない。まともに戦うのは勘弁してほしい。

「お逝きなさいなのです」

「断固辞退する」

そう言って走った。痛めた脇腹はズキズキと俺の脳に痛みを訴えたが、おあいにく様、ここで立ち止まったほうが痛い目を見る。

絶望的なマラソンを強いられたかに見えた俺だがギリギリでついにたどり着く、学園内において、唯一にして絶対の聖域に。

俺は迷わず飛び込んだ、頭から、床を這いずり回った。

そう、そこは、男子トイレだった。

相手は華も恥らう女子校生（高じゃないよ、校だからね。ここテストにでるよ）が、汚い場所の筆頭である、男子トイレにおいてそれと入れる訳が……

「行き止まりですね！」

俺は逃げ切ったと思い膝に手をつき息をしていたが、目の前の声に気付き前を見る。

確かに俺は男子トイレの中に入っていた。そして、双鐘も男子トイレの中にためらうことなく足を踏み入れていた。

あっさり入っちゃったよ。どうなってんの？

「双鐘さん、あんた今どこにいるかわかってますか」

「男子トイレです」

「何で平気な顔して入ってきてるんですか」

「あなたの死ぬとこみたいからです」

「はい、良くできました」

畜生め。どうやら、彼女は男子トイレに足を踏み入れることより、俺が生きているほうが不快らしい。くやしいのう、くやしいのう。

まあ、逃げ道はちゃんとあるんですけどね。

俺はベルトに挟んである、軍曹からの選別のリボルバーを抜いて、目の前のジョーカーに向かって三発ぶち込んだ。

ガキン、カキン、ペキンと三射三様の音を出しながら、あっさりと銃弾ははじかれた。

「何のつもりです？ こんなもの効くわけ無いです」

「そうだね」

そう言って、今度は俺はトイレの窓に向かって走り、窓に銃弾を二発ぶち込む。そしてそのまま本日三度目のダイブを決行した。

二階からのジャンプ、下はコンクリだった。けれど、膝と背骨で最大限まで衝撃を殺し、そして転がることで、無傷で着地をした。

どうやら、俺はまだ気絶せずにすんだらしい。

すぐさま俺は飛び降りた先の男子トイレを見る。窓から、双鐘が

覗いている。そして、すぐさま彼女も窓に足をかけた。その姿をみて、俺は笑いがこみ上げる。

おいおい馬鹿。やめとけよ。お前パンツ見えるよ。
けれど、彼女は下に向かって飛んだ。

どうやら彼女は俺と敵対すると冷静な判断ができないらしい。

彼女が窓から飛んだのを確認すると俺は拳銃をベルトに差し、すぐさま刀を左手に持つと彼女の着地予定地点へと走っていく。

「えっ」

彼女は驚く。逃げ一辺倒の俺が彼女に初めて彼女に向かって攻撃を仕掛けに突っ込んできたからだ。

彼女は手にもったペンを向かってくる俺に投げようとする。ゆえに俺は大声で叫ぶ。

「みえた！！！！ ピンク」

その声に彼女は俺に向かってペンを投げるのをやめスカートを抑える。

余計なことを言うと、屋上からの落下でばっちり中身は見えていたので、ピンクは正解です。

彼女が俺への迎撃をやめてできた隙をついて、俺は彼女の落下地点の裏へと回りこんだ。鞘を左手で握り、右手で柄を握り締める。

狙うは一瞬、着地の瞬間である。

彼女が俺に背を向けて着地したとき俺は抜刀し、彼女の首筋に全力で打ち込んだ。

彼女の体は落下の衝撃を殺すため、ただの塊になっていた。普通なら攻撃を喰らえばその勢いを殺すために体が動き十の力の攻撃が五か六になるのだが、彼女はもうひとつの衝撃の処理をしているためこちらの十の力の攻撃が十の力で直撃した。完璧だった。

まともに喰らった彼女は振り向くこと無く、そのままうつぶせに倒れた。

「グッナイ」

なんとか、ジョーカーをやりすごすことに成功した、面倒なことからできるだけ遠ざかりながら戦いぬくという当初の計画は木っ端微塵になっていたが、なんとか俺は生き残ってる。

俺は歩き出した。彼女を再び退けたと安心したら再び脇腹の痛みが強くなった。

どうやら急がないとやばいらしい。俺の限界が見えてきそうだった。

とりあえずは部室棟に行って、葵ちゃんと合流して休憩だ。そうじゃないと持たない。

先ほど利用した銃を取り出して残弾数を確認し、何度数えても一発しかないことを嘆きながらポケットへと再びしまった。

さつき無駄に撃つんじゃないかった。後悔しても遅いが、少し悔やまれる。何となく軍曹の無念を晴らしたくてダメもとで撃ってみたけど駄目だった。

俺はちらりと後ろを振り返る。彼女は気絶していた。けれど、すぐさま治療を受けて復帰してくるだろう。もし気絶者への過剰攻撃のルールがなければ、復帰なんてできないようにしてやるのに。

けれど、とりあえず葵ちゃんといれば、彼女も俺ばかりを過剰に攻撃することはないだろう。

そう思い、俺は歩くスピードを速めようとしたその瞬間だった。ゾク、

言葉にならない殺気と憎悪が混じった威圧感を感じ後ろを振り向く、けれどそこには誰もいない、双鐘が倒れているだけだった。

とりあえず先ほど感じた威圧は勘違いではないと思い、俺は走って部室棟まで行こうと足を踏み出そうとした瞬間もう一度先ほどの真っ先に逃げ出したくなりそうな、威圧感を感じた。

俺はこのとき、一目散に走って逃げ出せばよかった、けれど俺はその威圧感の正体を確かめようと振り返った。

振り返った先にはやはり双鐘しかいない、だが正体はすぐにわか

った。

うつぶせに倒れている双鐘がホラー映画さながらの迫力でゆっくりと起き上がっていたのだ。

まてまて、確かにあいつは気絶していたぞ、医療班も到着してないのに復活とかありかよ。

その上彼女は先ほどまでとは、比べものにならないくらいの、禍々しいオーラが漂っていた。たとえるなら悪鬼羅刹のようだった。いつものかわいらしい目はうつろで、ツインテールになっているリボンが解け、髪の毛が意思を持っているのか、蛇のようにうねうねと動き回っていた。

「クロス」

ボソッと彼女が呟く、その言葉で見とれていた俺はその場からようやく逃げ出そうとする、だが彼女は許さなかった。

彼女が取り出したのは巻尺。それを俺の脚目掛けて、投げつけた。きゆるきゆると巻尺は俺の脚に絡まり、俺はその場で転んだ。

「痛えー！」

豪快に転がった俺は、起き上がろうとした。けれど立てなかった。巻尺はなおも絡みつき、それを双鐘が容赦なく引っ張りながらこちらに近付いていた。

俺は双鐘の方へ向き直ると這いづり回りながら距離をとろうとしたが、相手が逃がすわけもなく、俺との距離をあっさりと詰めた。

「クロス」

そしてもう一度おんなじことを言われた。彼女の手には、今度は定規が握られていた。双鐘はペンが弾丸のような武器になる、つまり定規がただの定規として扱われるとは到底思わない。

十中八九、ナイフぐらいの威力にはなるんだろうな、まあ、こうなったら逃げられないし、やるだけやるか。

王手の状態となって、ようやく俺は戦う決心をし、俺は腰に差してある刀を抜こうとした。けれど彼女はそれすら許さず、抜こうとした手を蹴り飛ばし、そのまま、腰に差してあった刀を器用に足で

鞘ごと抜き取って、遠くに蹴り飛ばした。

「武士の魂をぞんざいに扱うなよ、俺の元宝物であり魂だぜ」

「お前のどこが武士なんですか！ 卑怯で、変態で、自分でまともに戦うこともできない、唯一できるのは、人の裏をつくことだけです。お前なんかに必要なんです」

うわー、傷つくわ。そういうことって思っても普通言わないでしょ。どうやら、復活した双鐘は、声が低くなるだけでなく、性格も悪くなるらしい。怖いね。まあ、もとからだったけどね。

まあ、そんなわけで、俺は最後の武器である拳銃を腰から引き抜いて相手に向ける、距離は一メートル以内。この学園の上級者レベルでもまずかわせずにあたる距離だ。ただし、目の前の敵は序列二位、そのうえ、なんか普段より強そうである。

「無駄です、私に拳銃は効かないです」

「この距離だぜ、たとえお前でも試す価値はあると思うけど」

「そうですね、もし弾が二発以上あるなら試してもいいですけど、お前の銃、残り一発しか弾が入ってないです」

「いや、お前が気絶した間にリロードしてるぜ」

もちろん嘘である。弾などはなから持ってない。

「嘘はもつとうまくつくのですね、お前がその銃を受け取ったとき、私もそこにいたですよ。もしお前が弾を保持しているならあそこでわざわざ銃をもらう必要なんてないです」

あらあら、簡単に嘘を見抜かれてる。

「おいおい、あのあと俺が銃弾を手に入れたとかは考えないのかよ」

「射撃部の持ってる銃とお前の持っている銃は全然違うし、もし射撃部から銃弾を奪っているとしたら、一緒に銃も奪っているはずですよ、そんな六発しか撃てない拳銃なんて捨ててですね」

その手があったな、射撃部の連中から銃を奪っておけばよかった。いまさらながらくだらないことを思いながら、俺は鉄槌に指をかけた。

「OK、答え合わせの時間というこう」

「そうですね、お前のたった一発の希望を弾いたあと、絶望に満ちた顔をたっぷりといったぶってあげるです」

「そりゃ楽しみだ」

そういつて、俺は寝転がりながら目の前にいる、双鐘の顔に向かって銃口を向ける。

毎回思うが、こうしている瞬間に向こうが仕掛けてきたら俺何もできないままやられるのに、双鐘って馬鹿なんだね。同じミスは何度もするなよ。言ってやっただろ『相手が勝ち誇ったとき、すでにそいつは敗北している』って、やれると思った瞬間にやらないと大変な目に遭うぜ。こんなふうにな。

カッーン。

俺は、トリガーを引いた。けれど響いたのは銃声ではなく、鉄槌が空を打った音だった。

双鐘は当然呆然とする。銃弾が飛び出すと思い、顔の辺りに定規を動かしていた。けれど、飛んでこない銃弾と鳴らない銃声に一瞬隙だらけになる。

その瞬間に俺はもう一度トリガーを引いた。狙った場所は相手の腹だった。

今度は本当に銃声が響き、弾は双鐘の腹にヒットする。弾の威力は金属バットで殴ったぐらいなので、ピンポイントで急所に当たらないと気絶はしないが十分痛いことはお墨付きである。

「ぐふ」

おおよそかわいらしい体と顔からは似合わない声を出して、双鐘が腹を抱えて苦しんだ。

なんてことはない、ただの子供だましの一手だったけどどうやらうまくいった。さっき弾数を確認した時、最初の一発は俺がわざとリボルバーのシリンダーをひとつ横にずらしておいたのだ。一発しかない銃では、この学園の化物どもに対してあまり効果がないが、猫だましの効果でも与えられたら状況が変わるかもしれないと思い、半ばやけくそ気味で使ったがこうもうまくいくとはね。

俺は弾切れになった銃をすばやく捨てて仕上げに移る。

俺はすばやく立ち上がると「ゴメン」と呟き。拳を握りこみ、生まれて初めて、グーパンチを、腹を抱えて苦しむ女の、顔面に、ぶち込んだ。

バキッという気味の悪い音と感触が手に伝わる。恐らく相手の鼻の骨が折れたのだろう、けれどまだ彼女の首輪は赤く光らない。

彼女は俺のパンチをくらって、ようやく俺から距離をとろうと、後ろに飛んだ。けれど、俺にとってここが最後のチャンスである。俺が簡単に距離をとらせるわけがない。やるなら徹底的に、今日の会長戦にはもう復帰できないほどにやってやる。

彼女が後ろに飛ぶのにあわせて、俺も飛び込み、彼女が着地する直前に彼女の足を払う。当然着地できない双鐘は転んでしまった。

そして、俺は脚を大きく自分の顔まで上げる。いわゆる踵落としという奴だ。的は当然、双鐘の顔面である。

「ひっ、ちょ、ちょっと待って、まいっ——」

彼女が何か言おうとしたが俺に聞く気などないし、言わせる気もなかった。そして、そのまま踵落としを彼女の顔面に落とし、双鐘を完全に粉碎した。

ジョーカーの首輪はそれでようやく赤く光った。

合流&同盟

ジョーカーを倒したはいいものの、俺は疲れきっていた。

一番、厄介なのは風にやられた脇腹だった。双鐘に追いかけていたときはあまり痛みを感じなかったが、冷静になって息を整えようとするとか赦なく痛みが襲ってきた。もしかすると骨が折れるかもしれない。

「早く合流しなきゃ」

俺は呟きながら、重い足を引きずるようにして、部室棟へと向かった。

部室棟に向かう途中、学園長の途中経過の放送で、ジョーカーが少し早いが退場になったことと、残りが十組になったことを連絡していた。

とりあえず、もうジョーカーに追い回されることがなくなったことに安堵しつつ、多少急ぎながら、俺は部室棟へと向かった。

もうこの時間まで残った連中の相手ができる状態ではなかった。

一刻も早く合流しなければ。

さしたる出来事もなく、俺は部室棟までたどり着いた。ああ、あと報告しておくとするれば、飴ちゃんがついに底をついた。貴重なエネルギー補給源が無くなってしまったのである。

最後の一個である、ソーダ味をかみしめ、いや、舐めしめながら道中を歩いた。

部室棟は空襲にでもあったのかというくらい荒れていた。そして、多くの生徒が倒れて、救護委員会と無傷のリタイア連中が救護活動をしていた。

「死屍累々とはこういうことを言うのか」

部室棟の奥に向かいながら呟く、こんな状況で相棒の状態が気になったが、警告音も鳴っていないことから恐らく無事であることが

伺える。

そもそも俺が彼女の立場を心配できる立場かよ。

「本来俺は守ってもらう立場のはずなのに。何でこんなにつらい目に遭ってんだよ。畜生、当初の予定では天上葵の後ろで震えている予定だったのに」

「悪かったわね、守ってあげられなくて、それと天下くんって陰では私のこと呼び捨てなのね。まあいいけど」

不意に後ろから声をかけられる。その声が誰のものなのかは、振り向いて確認しなくてもわかる。だって、ずっとあなたと合流することだけ考えて行動してたんだから。

「葵さまー！」

俺は振り向いて彼女に飛びついた。

「ちよっと、えっ、なにしてんの！　どうしたの！！」

「うえーん」

俺は泣いた、鼻水を垂れながら。開始から、約四時間、俺はずっと心細かった。久しぶりの実戦な上、序列上位の化物達と緊張感あふれる争いをしてきたのだ。感情のタガが外れても無理はないよね。だから、何にも言わずに泣かせてください。

「やだ」

べし

彼女の胸に飛び込んでいた俺は葵ちゃんに投げ飛ばされ、固いコンクリートとキスをしていた。

やべえ、コンクリートの熱々のキスに唇がやけどしそうだ。

「あつ、痛、って言うか、ここまでがんばったパートナーに対して酷くない！」

顔を上げて葵ちゃんに訴える。彼女に労をねぎらってもらう権利はあっても、彼女に投げ飛ばされてコンクリートに叩きつけられる義務は無いはずだ。

「まだ戦いは終わっていないんだから、シャキとしなさい、それに、胸に泣きついてくるのは絶対おかしい、あなたの方が背が高いのにとど

うして抱きついてきたら頭の位置が胸なのよ」

チッ、ばれたか。

「そこは、女の子の胸に顔をうずめてみたいピュアなボーイの心情や、小説だからその辺の描写はどうとでもなるかなと……」

声が徐々に小さくなりながら答えるが、どうやら彼女は許してくれないらしい。

「却下です。胸に顔をうずめてみたいという願望の時点でピュアなハートを失ってるわ」

「ああ、確かに心はピュアじゃないかもしれないけど、俺は正真正銘、体はピュアな少年だぞ」

「あーあ、うるさい。もう、さっさと戦いに行くよ」

彼女は少し顔を赤くして、部室棟の出口に向かって歩き出した。俺もすぐその後が続く、出て行くとき周りの連中の目が痛かったが、まあ気にしないでおう。あれはきつと、ここまで生き残っている連中をたたえている目だ。

「あーあ、天下くんが泣きつくから、制服が汚れちゃったじゃない。しかも、所どころ鼻水ついてるし」

葵ちゃんはまだぶーぶー言っていたが、さすがに悪い気がしてきた。

「ゴメン、後でクリーニング代払うよ」

「いいわよ、今日一日で大分制服痛んじやったし、買い換えるわ」
良く見ると彼女の言った通り、制服のあちこちが汚れている。ど

うやら彼女も苦戦していたらしい。

「マジ！ 新しい制服買うんだったら、俺がお金だすよ！」

「なんで!？」

「いや、何でって、葵ちゃんががんばってたから、俺からのプレゼントなんだからね。決して、『じゃあ新しい制服のサイズがからないからぼろぼろになった制服頂戴、大丈夫俺がちゃんと捨てとくから』って言って葵ちゃんの制服を手に入れようとしてるわけじゃないんだからね」

ゴツン。

殴られました。どうやら、彼女は冗談が通じないらしいです。

そうやってくだらないことを話していると、また学園長の放送が始まった。

「みんな、腹も減ってきた一時ごろ、ご機嫌どうかな、かなかなかな、ヒグラシかな」

……くっ、くだらない。

「それじゃ本題じゃ、ただいま、残り五組となった。もうそろそろ、決着がつくころなので、がんばってくれ、後もう、メンバーが少ないのでそれぞれの連中の場所をこの放送で言っちゃうぞ」

「まじかよ」

そういう、情報は早めに言えよ、できるだけ敵が来ても対処しやすい場所に行かなくちゃ。

「では、発表。あーあ、何じゃ……」

何か問題でも起こったのか、急に学園長の声が止まった。

「緊急ニュースじゃ、たった今二組倒されて、残りは三組じゃ。それぞれの現在位置を言うぞ、まず、一組が部室棟周辺」

「俺らのことだな」

隣にいる、葵ちゃんを見ながら言う。彼女もうなずく。

「後の二組は割と近くにいますぞ、どちらもグラウンド周辺に陣取っておるな。それでは全校生徒の諸君、というより、残り三組の諸君ががんばれよー、後、これからは二十分ごとに現在位置を連絡するからもう逃げるのはあんまり意味無いぞ、じゃあの」

そう言って、放送は終了した。

ヤバイね。これはすぐに行動しないと。

「早くグラウンドに行くよ」

そう俺が言っていると彼女が驚いた風にこちらを見る。

「どうして？ その二組が戦った後に戦えばいいじゃない」

「もし、もしもだ、その二組がとりあえず手を組んで先にこちらを倒そうと計画していたら？ もし、その二組があらかじめ同盟を結

んで行動をしていたら？ 人間ってのは見えてる敵よりも見えない敵のほうが恐ろしく見えてくるもんだ。だから、実力の不透明な俺達を協力してでも倒そうとしてくる可能性は十分にある。もし、相手が同盟を組んだりしたらもう手遅れだけど、とりあえず現状を確認しないと、俺達は追い詰められるよ」

そこまで言うとな彼女もうなずいてくれた。

「ここからならすぐにいけるわ」

そういつて俺達はグラランドへと急いだ。

グラランドは部室棟の隣である。脇腹のキズが痛んだが、もう、戦拳も大詰めだ、多少の痛みは我慢である。

俺達はグラランドの回りに生えてある林に身を隠しながらグラランドを見つめた。グラランドには一人の男が立っていた。両手に銃を持ち、指で銃をくるくると回して遊んでいる。ちなみに俺は序列を百位ぐらいまでなら目を通したが今グラランドで立っている男は知らなかった。

だが、油断はしない。凧みたいなダークホースがいたってなんら不思議じゃないしね。その上、この学園の武器としては比較的不利な銃を使っているのも気になる。銃を使う連中がこの時間まで生き残っているってだけで、隠し玉を警戒しないといけない。

こいつは慎重に動かないと。

「隙だらけみたいね、見たところ一人みたいだし先手必勝で行こうか？」

しかし、落ち着いている俺の隣にいる相方は、刀の鯉口を切って殺る気まんまんだった。

「ちよつとストップ！」

今にも飛び出しそうな相方の肩を押さえる。おかしいな、葵ちゃんてこんな猪武者みたいな考えなしの人だったっけ？

「どう考えても、あれは罠か何かでしょ。残りが三組にまでなって

るのに、一人で行動する理由が無いし。それに、学園長も放送で二組はグラウンドにいるって言ってたじゃないっすか、絶対あれはあいつを囷にした罠ですって、だから、軽率に動くのはやめてくれるとありがたいっす。葵さん」

「なんで変な口調になったの？」

「俺があんたをなだめてるのに、なおもあんたが飛び出そうとしてるからだよ！」

泣きたくなってきたぜ。けれど、これだけ言っても彼女はそわそわしている。どうやら『見敵必殺』の精神を持っているらしい。眼前の敵に対して我慢ができないタイプだ。

「でもどうするの」

「もう一組を探すのが先ですね」

そういうと、彼女は少し不満そうな顔をする。

「えー……。あんまりじれったい行動とかは好きじゃないんだけど勘弁してくれよ。もうここまでがんばってきたんだから俺だって勝ちたいのに。」

「とりあえず、もう一組および潜んでいるグラウンドの男の相方を探すのが一番優先事項ですね。もう一組と出会えたら、少し様子を見て、声をかけるか放っておくかします。もし彼らが敵に突撃したら、片一方がやられたところで突撃で漁夫の利を得て勝利。仲間になれそうな奴なら、仲間になってグラウンドの敵を共同で倒して、彼らを倒してゲームセットです」

そこまで言うとなんか私達卑怯じゃない。

「それってなんか私達卑怯じゃない」

「戦術ですよ」

そう俺が答えてもなにやら彼女は納得がいてないらしい。

ふっ、甘いなこの程度で不満を言っていたら、この戦術で俺がどんな手を使って生き残ってきたかを知ったら叩きのめされてお説教をくらいそうだな。今日の俺のストーリーは黒歴史へと封印だ。

まあ、俺の思っていることを誰かが書き記して本にするわけもな

いし、俺の卑怯な行動も誰かがわざわざ被害者全員にインタビューして拾い集めでもしない限り安心だろ。

さあ、それよりも現状だ。少ないリスクで大きな見返りを求めるためには、一に情報二に情報、三四が運で、五に人材だ。

まあ、手札には最強のカードを持っているが、えてして、最強の切り札は使い方によってはババへと変化する。そのうえ、残りのカードは負傷し戦闘力の落ちた大富豪という所の四か五のカードである俺である。

どう考えても、もう一組がどう動くかだな。まあ、実のところ誰が残っているかは少し予想はできるのだが。

「それじゃ移動しようか」

どうやらじっとしていることに我慢ができなくなった彼女が俺に話しかける。

「グランドの回りは林ですけど、うろちよろするのは危ないからやめときましよう」

「じゃ、どうするの!？」

「ひとつ質問ですけど、葵さん残りの一組の存在に心当たりありますか？」

彼女は顎を押さえて少し考えいるが、すぐにわからないと答えた。
「了解。じゃあ俺は心当たりがあるんで今から電話を」

そういつて俺がポケットから携帯を取り出そうとしたとき、急に背後を誰かに取られた。

マズイ、ここまで来てドジ踏んだ。

すぐさま手に持っている刀で対処しようとしたが、首筋に刀を当てられて、そのまま切れない刀を使って絞め技に入れる体勢になっていた。

「ちよつと、警戒がゆるすぎないかな」

首を絞めようとした奴の台詞が俺の耳に届く、そして俺はこの声を聞いたことがあった。どうやら最後の一組は俺の読み通りだったらしい。そのうえ、お迎えまでよこしてくれた。

「そっちからのコンタクトを待ってたのさ、八十一さん」

「九九と呼びなさい、せめて」

首に刀を当てたまま、九九こと、九条九信があきれながら答えた。
「それよりも、神楽は？ あんたとパートナー組んでんじゃねーの？」

「主将なら、あなたの相手と」

彼女は俺の背後からそのまま、指を差す。見ると葵さんと神楽が刀を抜きあって一触即発の状態だった。

「お前が天ちゃんをたぶらかしたな」

おいおい神楽よ、相手を見て言え。俺みたいな雑魚が仲間になって喜ぶのはお前ぐらいしかない……、悲しいが。

「たぶらかしてなんか無い。脅迫しただけよ」

うん、間違いなくその通りだが、はつきりと言われると、がんばってきたのが馬鹿みたいだな。

まあこのままほっといたら、殺りあって自滅しちまうし、止めるか。

「まあ、話を聞けよ神楽。とりあえず、今は協力しようぜ。決着はもう一組を倒してからでいいだろ」

俺の言葉に反応して、とりあえず神楽は構えていた刀を下ろす。続いて葵ちゃんも下ろした。

「とりあえず、僕も天ちゃんといろいろ話したいことがあるんだ。昼前のあの双鐘って子ジョーカーだったでしょ。おかげで僕達は拠点失うわ、運悪く戻ってきた別行動の部員は全滅するわ散々だったんだからね」

珍しく神楽が俺に向かって怒ってきた。こいつも部員のことを考えて行動できるようになったんだな。

「すまない。緊急事態だったもんでね。あととっさに助けてくれる人間といえはお前意外に思いつかなかったんだよ」

俺は神楽に謝った。

まあ、こいつには多少のおべっかをつかっておけば、そんなに怒らないだろう。

「いや……いいよ別に……なんかその、頼ってくれるとうれしいしさ……」

計算どおりにすぐにおとなしくなった。

何だろう、こうも従順だと、罪悪感をすごく感じるな。今度なんかおこるよ、神楽。

「とりあえず、グランドに今立っている奴の情報とさっきからずっと俺を拘束しているお前のパートナーに俺を解放するように命令してくれ」

「あっと、ゴメン天ちゃん、九九放してあげて」

そういつてやっと解放された。女の子に後ろから絞め技をかけられると、胸が当たるのはうれしいのだが、刀が首元にあるっていうのはどうも受け付けないな。

そんなことを考えていると、神楽がとりあえずわかっていることを話し始めた。

「グランドにいる奴の、詳しい情報はほとんどないんだ。今さっき脱落した連中とあいつが戦ってわかったことだけ言うと、あいつの使う武器は銃。今お手玉して遊んでいる拳銃だよ。」

「見たまんまだな」

「さらに四人同時に相手して余裕を持って戦ってた」

そいつはすげえな。頭の中でシミュレーションするが、会長選で最後まで生き残っているグループを四人同時に相手するなんて化物クラスである。

「それと、恐らく奴のパートナーは今の僕達みたいに、グランドの林に隠れて、恐らくライフルか何かで敵を狙ってる。さっきやられてた奴は恐らくライフルでやられたと思う」

「ちよっとまで、スナイパーがいるのにこんなところでのんびりしていいのかよ」

俺は慌てて周りをみながら言う。

「大丈夫だと思うよ、撃つつもりならとつくに撃ってるでしょ」

「そんな楽観的な」

しかし、事実として撃たれなかったのだから、相手はこちらを狙えない場所にいるのだろう。もしくは余裕を見せているかだが。

「ちなみに聞きたいんだけど、君達場所がわからない敵から撃たれても反応して弾をかわしたりはじいたりできる？」

「「無理」」

三人が揃って言った。

なのにどうして三人とも余裕なんだよ。わからん、凡人には天才の神経がわからん。

「でも倒された奴が撃たれたとこ見てるんだろ、場所とかわかんないの？」

そう言うと、神楽が学校のさっきまで俺の居た場所とは違う方の校舎、特別教室棟の屋上を指差した。

「あそこに、たぶんリモコン操作で動かせるスナイパーライフルを設置してる」

俺も屋上を見ているが、俺の目にはスナイパーライフルのようなものは見えなかった。だが、俺は神楽のことは信用している。ここで嘘を言う奴ではない。

「それでもって、さらに本体はグラウンドにこれまたライフルを持って潜んでいるわけだ、そっちの位置はわかるのか？」

「いや、屋上の方を見ているときに恐らく林に隠れている奴が撃つてたから、僕にはわからない、九丸も見えてないらしい」

俺が九条のほうを見ると申し訳なさそうに頭を下げた。

とりあえずここですつといても仕方がないので、作戦を立案する。「とりあえず、位置のわからないスナイパーは放って置いて、グラウンドの中心で余裕かましてる奴を叩きに行こう」

簡単に言っただけだが、本当はかなり面倒な作戦である。まず、グラウンドにいる奴は先ほどの戦闘で四人同時に相手をして動じずに対処していること。それに加えて居場所のわからないスナイパー。

向こうのアドバンテージを述べるとかなり不利である。

それを踏まえた上で俺が問う。

「さて、誰があのガンマンと対戦する？」

俺の問いに葵ちゃんが口を挟む。

「どういうこと？ 全員で戦えばいいじゃない？」

「うーん。神楽の話を聞くと、グラウンドにいる奴は一对複数の戦いに慣れてる。それに俺達は連携が取れているわけじゃない。四人全員で行っても、足を引っ張るだけだと思う」

「だったら、戦わない人間はただ観戦してるだけなの！？」

彼女は不満をにじませて言う。それに対し俺はなだめるように言葉をつなぐ。

「違うさ、むしろ戦わない方が本命だ。戦闘で向こうのスナイパーが発砲すればその場所にすばやく行って、スナイパーを倒すのが俺の立てる作戦だ」

「つまり、グラウンドにいる奴と戦う奴が囧になるということ？」

今度は九条が口を挟む。そして一人納得したような顔をする。

「その通りだね。そして、最初の質問に戻るわけだよ。『誰があのガンマンと対戦する？』」

今度はみんな黙り込む。当たり前だ、囧になる奴は非常に危険な役だ。スナイパーに撃たれ、当たり前どころが悪ければそのまま失格となるのだから。

けれど、沈黙は意外と早く破られる。

「僕が囧になるよ」

神楽が手を上げて言う。まあ、恐らく神楽が引き受けると思っていたが、割と決断が早かった。

「なら、私がお供します」

そういつて、九条も神楽に続こうとする。確かに二人で戦わないと、最低でも防げる可能性のある校舎の屋上から飛んでくる弾に対応できないだろうから、コンビで向かうことには賛成だが。

「いや、神楽のお供は俺が行くよ」

一瞬九条と葵ちゃんが、「何言ってるのこいつ」みたいな顔をしたが、無視だ。

「いや、あなたでは部長の足でまといになるだけでしょ」

九条が俺に向かって容赦のない言葉をかける。

わかってるよ。ていうか、お前らレベルの連中に合わせる事ができる連中が何人いるってんだ。

「まあ、たぶん大丈夫だよ。大体の神楽の技はわかってるし、銃弾を弾くだけなら俺でもできる。それに万が一どちらかがやられても俺達がパートナー同士だと思って、相手が油断すればそのまま反撃もできる。それに何より、協力関係を結んだ相手に一方的に不利な役を押し付けるのは後味悪いんでね」

言いながら、俺は手に持った刀をくるくると回す。神楽の方を見たら神楽もどうやら異論は無いらしかった。

「ほんじゃ、葵ちゃんと八十一さんはスナイパーをよろしく頼むよ」

「やだ」

「了承しかねます」

あっさりと断られた。この案に納得しているのは神楽のみであり、女子側は不満をあらわにしていた。

「じっと待ってるのは性に合わないのよね」

そう言ったのは葵ちゃんだ。何だろう、彼女はドンドン好戦的になっていっている気がする。普段彼女に挑んでくる敵がいなかったためにたまりたまったストレスをこの戦いで発散して、タガでも外れたのだろうか？

一方、九条は主将の傍にるのが俺というのが不満らしい。そりゃあんたには二回背後を取られるという、ミスを犯しているから信用できないのも無理はないが、男が格好良く決めた決意をものの一行でひっくり返そうとするなよ。

結局彼女を説得するのに五分かった。九条の方は神楽が二言三言交わすだけでしぶしぶ納得したが、葵ちゃんはなかなか了承しよ

うとしなかった。結局俺が「俺のわがまま一つぐらい聞いてくれ」と言って強引に引き下がらせたが……。

そうして、俺達は元居た場所から少し移動して、そこからグラウンドで相変わらず拳銃で手遊びをする男に近付いていった。彼は俺達を見つけると遊んでいた拳銃を両手に握り直して、こちらに向かつて一礼をした。

「こんにちは、先輩方、先週徳島から転校してきた、二年生の仁木衛まろむと言います、これからの短い間よろしくお願いします」

非常に丁寧な口調で聞いてもないことをべらべらと喋った。なるほど、転校生だったからノーマークだったわけだ。

「そうか、徳島からきたのか、九州からの旅は大変だっただろ」

「徳島は九州じゃねーよ！」

俺のボケに全力で仁木は突っ込んできた。さっきまでの丁寧な態度をぶち壊して叫ぶ。

「そうだよ、天ちゃん、徳島は北の方だよ、宮城県のした辺り」

「それ福島だから、徳島じゃなくて福島だから」

「そうだぞ、神楽、今思い出したが、徳島ってのはパスポートがない県で確か南にある県だぞ」

「いらねーよ！ パスポート。南ってのはあってるけど、ちゃんとした日本の四国の県だから」

俺達のボケに的確に突っ込んできた。ちなみに俺達二人とも、日本の地理は理解しているので、冗談で言っている。

「天ちゃん思い出した、お盆に鳴子もって阿呆みたいに踊る県だよ」

「ちげーよ、鳴子使うのは高知県のよさこいだ。徳島県は阿波踊りだよ！」

さすがに仁木もうそろそろ面倒臭そうな顔をした。だが、攻撃の手は緩めない。

「思い出したぞ、神楽。確か電車が通ってない県だ。そして、都会に来て電車を見ると『次の汽車いつ来るんじえ？』って言う民族だ」「僕も思い出したよ、県庁所在地に映画館の無い残念な県だよね」

今度はずばり凶星を突いてやった。ちなみに、俺達が徳島県のくだらないことを知っている理由はアンサイクロペディアにいろいろ教えてもらったからである。

言いたい放題言われた仁木は今度はうつむいていた。

「畜生、何だよ、田舎馬鹿にすんなよ。畜生せっかく転校して新しい学園生活を堪能するはずだったのに、射撃部に入ってみんなの役に立とうと思って作戦まで立ててがんばったのに、みんな負けちゃうし、もうせこくて、やってられねーよ」

「なあ、せこいって誰が？」

俺が聞いたが、無論意味は知っている、つらいという意味である。「あーあ、俺がだよ。せっかく、こっちに来るにあたり、いろいろと言もチェックしてたのにあんたのせいで失敗したんじよ。もうさっさと戦って終らしてやるちゃ」

どうやら、彼の怒りは沸点を超え両手に持った銃をこちらに向けて威勢よく、発砲した。

両手の銃はそれぞれ、左手の銃が俺、右手の銃が神楽という風に相手を決めて発砲していく。だが、俺は十メートル、神楽は八メートル程度の距離で戦っていても弾丸が俺達に当たる可能性はほぼ皆無である。俺は割と緊張しながら鞆に収まったままの刀を両手で操りながら、正確に頭と胴体を狙う弾をはじいていく。神楽は涼しい顔をして、ほんの少しづつ仁木との距離をつめながら弾をはじいていく。恐らく、リロードの瞬間に攻撃を狙うつもりであろう。本来ならスナイパーを倒すという作戦なので無理はしないでいいのだが、目の前の男を簡単に倒せるならそれでもいい。ようは勝てばよからうなのである。

俺は神楽のように前に向かっては行かなかった、とりあえずスナイパーがどこから攻撃してくるかわからない以上、弾を防ぐのに一杯一杯の状態になればあっさりとゲームオーバーである。

負けたくない、恐らくこれがここまで勝ち残っている全員の気持ちであろう。俺にとってその気持ち初めは非常に小さかったが今

となつては脇腹の痛みを押しつけるほど大きなものとなつていた。
カチッと彼の拳銃が弾切れを知らせる音が響く。銃声で痛めつけられていた俺の耳にもそれははっきりと聞こえた。

その音と同時に神楽が彼に向かって突撃をした。だが、仁木は大きく慌てたそぶりも見せずにベルトに備えつけてあったマガジンを指で空中に小さく投げた。そして、両手の拳銃のマガジンを排出し、空になった銃底にそのまま空中に投げた新しいマガジンをすっぱりとはめ込み、両方の銃の銃底を叩きつけあっさりとそして手早くリロードを完了させた。

「危ない神楽！」

弾がたつぷりと補充された銃の前に飛び出す形となった神楽に声をかけたが、叫んだところでどうにかなるものではない。神楽と仁木との距離は二、三メートル、そして、仁木は両方の銃口を神楽に向け、容赦なくトリガーを引いた。

けれど、銃声は響いたが神楽の呻き声は響かなかった。発射された銃弾その全てを止め、神楽は一旦詰めた距離を再び開けた、すごい神技を俺は眼前で見た。神楽に向けて発射された銃弾は四発。それぞれ頭と腹に向かって二発ずつだった。まず最初の二発は仁木を倒すために振りかぶった剣をそのまま振り下ろし二発を叩き落とした。そしてもう二発は一瞬で刀を逆手に持ち替え、腹に向かってきた銃弾を刀の刃で、顔に向かってきた弾を刀の柄でそれぞれ止めたのであった。

これにはさすがに仁木も驚いたらしく、口を大きく開いていた。

「完全にやったとおもいましたよ、先輩」

「甘いな、後輩、このお方を誰だと思っている。序列七位の式宮神楽様だぞ。これからは舐めた口を利くんじゃないぞ」

まったく威張らない神楽の変わりに俺が威張っておいた。もちろん神楽を立てる感じで。

「じゃあ、気を取り直して行きましようか先輩」

仁木は俺を無視して神楽に向かって話しかけていた。どうやら、

俺の言葉は聞く価値も無いと判断されたらしい。その上、仁木はどうやら自分の脅威となるのは神楽だけだと判断したらしく、両手の銃で神楽一人を狙って銃撃を開始した。俺も向こうがその気ならばと、場所を動かこうとしたが、十メートルのラインより近付こうとすると仁木もこちらに向かって銃を撃ってきた。

「どうやら、十メートル以内に近付かなければ何もされないらしい。むしろ、よろこぶべきだね」

スナイパーの攻撃に備えて置くという点においてはここまで最高の状態は無い。神楽と仁木との激しい戦いにわずかに意識を裂くだけにして、俺は辺りからの攻撃に備えた。

仁木は弾を撃ちまくるほどにテンションが上がっていった。

「先輩、戦いをする奴は二種類に分けられるんですよ」

仁木が銃を撃ちながら俺達に話しかける。しかし、神楽は完全に仁木のことを無視していたので俺が答える。

「どんな風に分けれるんだ？」

「簡単すよ、やられる阿呆とやる阿呆ですよ。同じ阿呆ならやらなきゃそんですよね」

そう言ってさらに銃を乱射させていく。銃声で音楽でも奏でているようにリズムカルに。

銃の乱射と鉄壁の守りとの戦いは完全なる消耗戦だった。銃弾が神楽の体力を削っていくだけの戦いである。ただ、弾は無限に補給できるわけではない。リロードの隙は己の技量でどうにかできても、弾切れという事態には対応するすべは無い。ともすればスナイパーが動くのは確実である。

俺は感覚を研ぎ澄まそうと息を深く吐こうをした瞬間、息を呑む光景を見た。仁木の撃った弾が神楽に被弾したのである。距離は五メートル以上は離れているというのに。さっきあれほどの近距離からの攻撃を防いだ男が喰らう距離ではなかった。

とりあえず最初は勘違いだと思った。だが、被弾した神楽の頬には真っ赤な痕が残り、神楽自身血の混じったつばを吐いた。

「やっと一発当たったね、先輩」

得意げに仁木が言う。対する神楽は深刻な顔で考えていた。

「何やったんだよ、仁木？ それとも、神楽がミスっただけか？」

俺が聞くと仁木は軽快に口を動かした。

「先輩はさ、何年か前にやってたアンジョリーナジョリーが演ってた、弾を曲げる暗殺者達の映画知ってますか？」

「ああ、シナリオはともかく、なかなか馬鹿らしくて笑いながらみてたよ」

腕を振りながら銃を撃つと弾が曲がる説明がまったく無いところがさすがだと思った映画だった。

「あれとおんなじように弾を曲げたんですよ」

「はあー。なにかよお前、自分は超能力者ともいいたいのか？」
確かにこの学園で気を使って化物じみたことをやってる連中は山ほど見たが、超能力使う奴はまだお目にかかってなかった。

だが、相手は超能力をあっさり否定した。

「いやいや、違います。俺は手品師であり、魔術師ではない。タネも仕掛けもありますよ」

仁木はもったいぶりながら説明をする。

「タネも仕掛けもわかつちゃうとなーんだと思うのが、手品ですけどね。答えは簡単、弾の重心を変えてあるんですよ、当然ながら弾の重心が安定しないと弾はまっすぐ飛ばない。当然狙いも無茶苦茶になる。銃弾としては失格だけど、この学園にいる奴らみたいに銃弾を簡単に弾く連中には酷く有効なんですよ」

なるほどね、多くの連中は弾を見て弾くのではなく、銃口をみて弾を止める。けれど弾が変化球だと計算が狂って被弾してしまうわけだ。

「なるほどね、ちなみにネタばらししてよかったのか？」

俺が聞くと、笑いながら仁木が答える。

「あんたらは、銃弾がまっすぐ飛ぶことを頭じゃなくて体が覚えちゃってるんですよ。そう簡単に対応できるもんじゃない、そのうえ、

どの弾が曲がる銃弾かは俺もわからない。マガジンにランダムで設置してるからね」

そうかい。なるほどね。銃を使う連中はこの学園では不利だと思っただけ、工夫一つで立派に戦えるようになるんだな、転校してから間もないのに……。

こいつの適応能力と応用力に素直に敬意を表した。

けれど、俺の同盟者はそうではなかった。

「天ちゃんあいつ倒しちゃっていい？」

それまで黙っていた神楽が静かに告げる。目をみると、いつもの落ちていた目ではなく、まだ俺達がガキでイタズラをしていたころの茶目っ気あふれる目だった。

やばいな。そう俺は心の中で呟く。何がって？　こういう目をしたときの神楽は容赦がない。ガキが虫の手足を千切る様に罪悪感も無く、ただただ、自らの力を弱者へと振るうのみである。どうやら相手に一杯食わされたことで俺の隣にいる幼馴染は非常にご立腹らしい。

「手加減してやれよ」

俺も別になだめる気は無かった。ただ、相手が気の毒だというだけである。

神楽は刀を正眼に構える。なんの変哲の無い構えである。そして、その構えのまま静かに相手に向かって直進していく。

さっきまでとなんら変わりない行動。だが、相手を確実にしとめる覚悟がそこにあった。さっきまで饒舌に語り余裕を見せていた仁木も神楽の雰囲気の違いを感じ取りすぐさま銃を構え弾丸を射出する。けれど、銃弾は神楽までには届かない、それは先ほどまで一緒に緒の光景だった。けれど、仁木は気にせず銃を撃つ、先ほどと同じように曲がる弾が発射されれば被弾するそう考えていたのか、それとも、こちらが途切れなく銃を打ち続ければ三メートル以内に侵入させることは無いと考えているからだろうか。

けれど、いつでも予想という奴は本人を裏切る。五メートルに近

付いたとき、例の曲がる弾が放たれたが、簡単に弾かれた。その弾は確かに仁木から見ても俺から見ても曲がっているように見えたが他の弾を処理するような感覚であっさりと弾いたのだった。

その時はまだ仁木も冷静ではあった、彼があせり始めたのは絶えず弾を撃ち続けているのに、三メートル以内にあっさりと侵入したからである。俺自身はあまり驚かない、神楽がそれぐらいのことを簡単にしてしまうことを知っているから。この状態に比べれば、先ほど神楽のスイッチが入ってないときに四発の銃弾を止めた事の方が驚きである。

神楽は気をタメなしで使える天才だが、本当に恐ろしいのはそこではないと俺は思っている。本当に怖いのは、銃弾の中を颯爽と歩いていけるほどの剣速である。神楽は正眼の状態から一メートルの距離で、銃が撃たれたのを確認した状態で弾をとめることができる。つまり、弾が曲がっても関係ない。今の神楽は銃口をみて弾を防ぐのではなく、銃弾をみて弾をとめているのだから。無論これができるのは、スイッチが入った状態。つまり集中した状態のときに限られるわけではあるのだが。なんの事はない、相手は勝手に神楽のスイッチを入れてくれた。

『神速絶刀』ただ、すばやく刀を振るうだけの技だが、それゆえに同じ刀同士では対抗策の無いという技だった。俺の『天剣』でも最初の一撃のみ同じスピードが出せるというだけである。しかも、神楽は一撃をはなっても同じスピードですぐさま二撃目が出せる。よって俺もあの状態の神楽には対抗できない。

『竜牙絶刀』と『神速絶刀』。天は彼に二物を与えた、恐らく単純に剣術ではこの学園で彼にかなう男はいないだろう。俺がかつて負けた相手は雲の上にいるほどの実力者になったのだ。

戦いは一方的に仁木が追い詰められていた。相手が止まらないために、自分から銃を撃ちながら後退していく有様である。そして、ついに仁木が叫ぶ。

「ちよっ、ちよっと!？」 止まれよ。近付いてくんなよ! もおお

おお、いい加減にしろよ！ 畜生、『光』^{ひかる}、手伝え！」

その声は、何故か俺達が作戦会議をしていたほうに向かって投げかけられる。そして、俺がその方向をみた時、黒光りするものが動くのが一瞬見えた。

まじかよ。

心の中で毒づく。スナイパーはよりによって俺達のすぐ傍に居たらしい。そりゃ攻撃したくてもできないわな。二組敵がいたら自分がやられるしね。

俺はとりあえず、神楽に向かって走った。理由は簡単、あいつはスイッチが入ると周りのものが見えなくなる。つまり、俺がスナイパーから守らないと奴を守る奴がない。

俺が動き出したのとほぼ同時にスナイパーは銃弾を発射した。一直線に飛ぶ弾丸。どうやら、神楽とスナイパーとの斜線上には入れない。俺は意思を固める。

やろうとしたことは、言葉にすれば簡単明快。飛んでくる銃弾を神楽の真横で落とすのである。困難な点の一つ、高速で飛んでくる銃弾を線ではなく、点で処理するということである。

飛んでくる弾の横っ腹に剣撃を加えるなどということはしたことが無かったが、やるしかなかった。

俺は走りながら鞘に収まった刀を握る。そして、高速で引き抜き、下から上へと刀を走らせる。

ガキンという音とともに自分の手に確かな感触を感じる。刀の刃の上を弾が滑ろうとしていくのを上へと思い切り弾き飛ばす。空中に刀を振りぬき、神楽のほうを向くと神楽が、仁木との距離を完全に詰め一撃を加えて彼を眠らせたところだった。どうやら銃弾は無事弾けたらしい。そのうえ、神楽も仁木を倒してしまった。

どうやら、当初の予定が外れて、ガンマンそのものを撃破することに成功した。

そして、俺は抜いた刀を見つめた。今仁木を倒した神楽は俺に背を見せている。当然ながら、残り二組となった俺達は敵同士、最強に近い神楽を倒すなら絶好のチャンスである。

やるべきかやらざるべきかそれが問題だ。

ここまで散々卑怯な手を使った俺ではあったが、さすがに同盟を組んでいた奴を後ろから攻撃するのは気が引けた。けれど、葵ちゃんと神楽が戦ってどっちが強い？ 葵ちゃんが強いのは知っているが、神楽も序列七位という器に収まらないことはわかっている。そのうえ、何故か、神楽は俺と葵ちゃんが組んでることを怒っている。スイッチが入る可能性は十分ある。

恥を忍ばず神楽を後ろからヤル？ はたまた、葵ちゃんを信じて決戦を葵ちゃんに任せる？

会長戦での最大の分岐点であった。

どうするの俺！？

切り札

結局俺は手を出さなかった。

刀を鞘に納めて神楽に声をかけた。

「お疲れさん」

すると神楽はこちらに向かって笑う。

「どうして、今僕が背を向けてる間に攻撃しなかったの？」

俺は思わず表情が固まった。どうやら彼は彼で俺のことをよく知っているらしい。

「酷い冗談だな、せめて笑える冗談を言ってくれよ。確かにこの後俺達は戦わないといけないが、それは正々堂々とだろ」

何とか表情をつくろいながら答えるが、恐らく自然な表情を作れていないと思う。

「もちろんだよ、そして、この瞬間から僕は天ちゃんの幼馴染としてじゃなくて剣道部主将として対峙しないといけない」

だから、さっきの隙を見せている間に攻撃して来いっていうのかよ。さっきのは幼馴染としてのサービスってのか。なめられてるねーかし。

「だからなんだよ。お前が剣道部として本気を出すからって別に負ける気は無いぜ。それにさすがの俺もお前が幼馴染だからって手を抜くとは思ってねーよ」

まあ、勝てる気はそれほど無いが、黙って負けてやるつもりも無い。ここまで面倒なことをがんばったんだ、最後まできっちり終らせて、うまい飯を食わないとやってられねーんな。

微妙な空気が流れる中、分かれていた別動隊がグラウンドまでやってきた。向こう側のグループは結局無駄足になったが、まあ結果オーライだろう。

「神楽、決着はさ、一騎打ちでいいか？」

ぼそりと俺が呟く。俺の声に神楽が軽く「いいよ」と答えた。

そして、俺はとりあえず葵ちゃんの所へ行く。無論決勝戦の参加者を決める話し合いである。

普段の俺ならば、あっさりと葵ちゃんに決勝の相手を譲るのだが、残念なことに神楽が相手である。俺は自分でもびっくりすることに自分で神楽と戦うことしか考えていなかったのである。俺ならきつとスイッチの入らない神楽との戦いになる。そうだとしたら、俺の方が勝つ可能性がある。

でもね……。面倒なことは寝ていてもやってくるのに、わざわざ自分から突っ込みに行くとはどうしたことかな。

頭をかきながら、とりあえずさっきの戦いについて、お疲れ様と互いに声を掛け合ったあとすぐに本題を述べた。

「さっき神楽と話したんだけどさ。決勝は一騎打ちってことにしたんだ。それでさ、俺が出たいんだけど……」

後半にいくに従い声は小さくなり、代わりに俺の声とかぶるように彼女が答える。

「やだ」

さっきも思ったが、彼女は男を立てるということを知らないらしい。こんなことを言っていたら女性の権利団体に怒られそうだが。

俺がとりあえず彼女を説得しようとしたとき、彼女は急に俺の懷に入って痛めている脇腹を押した。

「ふみゅー」

俺は激痛を歯をかみ締めて耐えた。そして口からは奇妙な声が漏れる。

それを確認して彼女は俺に言った。

「怪我してるのに、いいカッコしすぎだよ」

「いやいや、別に怪我してるわけじゃない。こそばゆくてそれを耐えただけだ」

無論嘘である。確かに動いているときは痛みは頭から飛んでいるがひとたび思い出したら相当の痛みであることに気付く。まあ、葵ちゃんが言わなきゃ忘れていられた気もするが。漫画のキャラが先

週号に怪我していても今週号になるとスポーツでもしているように。
「私と合流する前から痛めてたんでしょ。ここから先は私に任せて休んでてよ」

どうやら、ずいぶん前から気付いていたみたいだった。そのうえ、この台詞かつこいいね。さすが俺の見込む学園最強の女だ。

だけど、今回ばかりは譲れない。

神楽に対して遠い昔の借りを高い利子つけて返さないといけないのだ。それをやるなら今日しかないんだ。

「なあ、正直なところ、葵ちゃんがさ、神楽に勝てると思う？」

この問いにいささか口を膨らませながら反論する。

「勝てると思ってるわよ。確かに、神楽くんはすごい剣の使い手だ
ってことはわかるけど、それでも勝って見せる」

「百パーセント？」

「それは……」

そこで彼女が言いよどむ。まあ神楽相手に百パーセントの確率で勝てるなんて言うやつは頭がどうかしてる。

「俺なら絶対に勝てる。今日この一戦だけなら」

つまり、何が言いたいかというと、俺の頭はどうかしてる。

「怪我して、疲れ果ててるあなたが、無傷の私より確実に勝てるって言うわけね」

「まあ、そういうわけです。なあ頼む、一生のお願いだ」

俺は頭を下げて頼む。そして、彼女の大きなため息をつくのが聞こえそして、諦めた風に言った。

「しょうがない。でも、約束して、絶対負けないで」

強い声で念を押される。俺は顔を上げて彼女を見た。目をつぶって、頭を手で押さえて、やれやれと呟いている。

どうやら、本気で自分が戦いたかったらしい。内心悪いことしたなと思いつながら、俺は振り返って、本日のラスボスと向き合った。

神楽はラスボスと形容するには抵抗のある人もいると思う。小柄で華奢な体で見る人によっては女の子と間違える容姿をしている。

けれど、刀を持たせたら右に出るものはまずいないほどの実力者である。そんな奴が相手なのだ。あんな大言壮語を吐いたけど、負けても許してくれるよね。

「天下くん、負けたらもう一回、教室の窓から飛び降りてね」

背後から、声援にしてはやけに毒の強い声が聞こえた。どうやら許す気はないらしい。ていうか勘弁してくれ、今日だけで三回も学校から飛び降りてるんだから。

葵ちゃんに堂々と見得を切ったのを早速後悔しながら、俺は神楽の方へと向かっていく。神楽は九条と一言二言話ただけでグランドの中央に一人で佇んでいた。右手に抜き身の刀を握りながら。

「待たせたな」

五メートルぐらいの距離で俺が言う。別にそれほど時間はたってはなかったが。まあ決闘に遅れた男が必ず吐くお約束の台詞だ。

「やっぱり、天ちゃんが相手か……。天上さんでも僕はよかったんだよね」

俺の目をまっすぐ見ながら言う。綺麗であり、見るものを底なしの沼に落としそうな深さを持った黒い瞳が俺の瞳を覗き込んでくる。

神楽とはじめて出会ったのは覚えていない。親同士が剣術家で知り合いであり、道場が隣同士であるということから小さいころから互いの道場を行き来し、稽古で技を磨き、稽古が終ったら日が暮れるまで一緒に遊んだ仲である。

そんな、幼馴染だが小学校に入ってから嫌いなものがあった。神楽の顔だった。男にしては整いすぎ、そしてかわいらしすぎた。おかげで小学校に入るまで神楽が男だと知らなかった俺の初恋の相手は目の前の幼馴染である。そして、あれからずいぶん経ったのにいまだに男らしい体つきにも顔つきにもならない。

無論俺は俺は神楽のことを親友だと思っているし、時々悪態をつくがかけがえの無い大事な奴である。けれど、俺は奴の顔を見るた

びに幼いころ神樂のことが好きだったという黒歴史を思い出してしまう。それが嫌で神樂の顔が大嫌いだった。それ以来あまり目を合わせないようにしてきたが、今回は目を見ないわけにはいかない。いつ攻撃されてもいいように。または、相手の隙にいつでも自分が攻撃できるように……。

「俺はお前と戦えてうれしいぜ」

「僕も久しぶりに戦えてうれしいよ」

「何年ぶりだ、俺達が戦うの？」

「八年ぶりだよ」

神樂の目が一瞬遠くなる。

「あのさ……」

弱々しい声で神樂が聞いてくる。

「あの日から剣を捨てたのって、僕が勝ったせいなの？」

神樂の言葉で、幼き時代が一瞬よみがえる。剣術を習うのが楽しくて仕方なく、家族にほめてもらうのが至福の時間だった。同世代には誰にも負けず、神童なんてもてはやされてた。目の前にいる剣の天才にだって剣をやめる一週間前までは負け無かった。けれど、俺は剣を捨てさせられた。

「馬鹿言うなよ、自分で才能ないってわかったからやめたんだよ」

「嘘だよ！ 毎日あんなに楽しそうにしてたじゃん」

そうだな、すごく楽しかった。

「もう済んだことだよ神樂。それよりも今に集中しろよ。言っとくけど、さっき後ろから攻撃しなかったのは、そんなことしなくても勝てると思ってるからなんだぜ」

振り切るようにいう。もう思い出すなよ神樂、その昔話で一番苦しんだのは俺に勝ったお前だろ。だからさ、もう忘れようぜ、最後の戦いがあんなふうな幕引きだから、いつまでも俺達は引きずってしまっただよ。だからさ、今日の戦いで塗り替えようぜ。勝っても負けてもどっちでも明日のために進もう。

「そうだな神樂。一個予言しとくぜ、勝負は一瞬で終るぜ」

「『天剣』なら通用しないよ」

わかってる。あれは初見しか意味が無い。そのうえ、お前が本気なら初めてでも止められるだろ。

「だからこそ、一瞬で終るのさ。せいぜい用心してくれ」

「そうだね。じゃあ僕も全力で行くよ」

刀を正眼に構える。目つきからみるにスイッチが入ってる。言葉どうり全力らしい。

「剣道部主将、序列七位、貳宮神楽。いざ勝負」

「帰宅部徒歩通学代表、序列一位、神乃天下、お手柔らかに」

そして、俺も刀を左手に持ち、右手をポケットの中に突っ込んだ。

正直なことを言おう。神楽、俺はこの会長戦で最後まで残るのはお前だと思ってた。お前はさ自分のためにはあんまりやる気を出さないし、序列だって、七という数字が好きだからわざわざ序列七位に甘んじてる変わり者だけどさ、今回は剣道部の主将として戦ってるわけだろ。それはつまり珍しく本気を出すってわけだ。自分のためじゃなく剣道部のために。

そんなお前に勝つ方法なんてさ、俺は思いつかなかったわけだ。だから一番最初に同盟を持ちかけたわけだ。でもさ、最後はやりあわないといけないよな、でも勝てる手は思いつかなかった今の今までは！

俺はポケットの中に手を突っ込んで、射撃部の連中からくすねた閃光手榴弾のピンを抜いて投げた。そして、俺はスタングレネードが引き起こす、強烈な閃光と爆音から身を守らず、むしろ体の力を抜き、自分の唯一の武器である『天剣』で自ら放り上げた閃光手榴弾とともに神楽目掛けて突っ込んだ。

「これで、幕引きだ」

これが本日考え付いた俺が神楽に勝つ可能性を見出したやり方である。

閃光手榴弾単体ならば、あいつの超人的な反応で防がれるかもしれない。『天剣』だけならば確実に防がれる。でも二つ同時なら？ あいつの意識を閃光手榴弾に向けているうちに、天剣を放てば？ いくらあいつでも、どう行動すればいいか迷うはずだ。そして、俺の『天剣』は迷う暇なんて与えない、ことスピードだけなら最強の技だと思っている。さあ、どうする神楽！

当然閃光と爆音は俺にも届き、頭がクラクラするほど脳に音と光の衝撃が来た。だが、動き始めた俺は止まらない、閃光で何にも目には映っていないが、お前が立っていた場所に俺は最速の居合いを打ち込んだ。

ガキン！

俺の耳は閃光手榴弾のせいで何も聞こえなかった。けれど、手ごたえから、俺が勝利の希望をこめて打ち出した技がとめられたことを悟った。

俺の刀は神楽の体に届かず、神楽の刀で体の前で止められていたのだ。

『天剣』が必勝の剣ではなく初見殺しなのは訳がある。なるほど『天剣』は「消えた！」と感じさせるほど一瞬で間合いを詰めて最速の居合いで敵を討つ技だ。けれど、この技はいくつかの制約がある。一つは射程距離、五メートル以内でなければ初見でなくても反応される確率が高い。二つ目には技を撃つ瞬間全身の力を抜く必要がある。この隙はほんの一瞬なのだが、次の弱点と合わせられると実力者だと完璧に防がれる。その弱点は『天剣』の剣の軌道は決まっているということである。

正確に言えば、刀が鞘に入ったままの状態で横薙ぎにしか撃てない。型どうりにやらないと著しく剣速が落ちるのだ。

そして、その弱点ゆえに、相手が脱力した瞬間、または相手が消えたと思った瞬間に刀で胴払いを防ぐように構えれば、確実に止め

られるのだ。

「やっぱり、最高で最強だよ」

スタングレネードが投げられたのを確認した上で、目を閉じるのでもなく、耳をふさぐわけでもなく、次の俺の行動のみを正眼のまま待ち受け、一瞬だけ行った脱力を見逃さず、俺の天剣を止めた神楽に感動していた。

俺の最後の小細工すら通用しなかったのだ。

「もう、一生お前には勝てねーよ、神楽。だから、今日の俺の勝利で俺達の勝負は永遠に終りだ！」

わかってたさ、なんとなく止められる気がしていたことも事実だ。だから、今日仕込んだネタじゃなく、過去にお前に『天剣』を止められて負けてから、破門される一週間の間に考え付いた、無天流の技ではなく、自分のオリジナル技を見せてやる。

まあお互いに目が見えてないんですけどね。

「天・地・人」

そうして放った切り札は、光の残光のなか誰にも見られることなく、目の前の親友をふっとばし気絶させた。

たった一つの卑怯なやり方

俺の耳に周りの声が聞こえ、自分の目の前に葵ちゃんが立っているのを確認出来たのは、しばらく経つてのことだった。かろうじて見え始めた目で、辺りを見回すと、さっきまで戦っていた神楽が女子にしては大柄な九条に抱えられて、けが人が集合している治療テントに向かっていった。

「勝ったんだ」

霞がかった、良く働かない頭で導き出した答えを口にした。目の前の葵ちゃんが口をパクパクさせて何か言っているが、今の俺には耳鳴りの一部となるのみでよく聞き取れなかった。そんな俺の状態を察したのか、彼女は顔をウンウンとうなずかせて、ジェスチャーで俺に勝利を伝えてきた。

身近な人に自分の勝利を肯定してもらうことによってようやく勝利を実感できた。

長かった。それが率直な俺の感想である。平凡を望んで生活し、ようやく卒業まであと一年という所まで来たというのに、たかだか昼寝を邪魔されたくらいで寝ぼけて生徒会長をぶっ飛ばし、その生徒会長から脅されて戦拳に参加して、化物達との戦いに巻き込まれる。面倒臭い事このうえない出来事からようやく本来の目的を達成し解放されると思うと、とても穏やかで晴れ晴れとした気持ちになった。

安堵していると、スピーカーから学園長の声が聞こえてくる。まだ耳は本調子ではなかったが、内容は想像できる。戦拳の終了を告げるのだろう。

「――より、最後の戦いである生徒会長決定戦を行う！」

「えっ！」

何だろう、まだ耳が遠いからだろうか、俺の予想を裏切るような台詞が聞こえた気がする。

「ねー、葵ちゃん、今学園長がスピーカーで放送したのって、戦拳の終了についてだよね？」

おそろおそろ、すぐ隣にいる葵ちゃんに聞いてみる。始めは喋って答えようとしたが、俺の耳が聞こえないことに気づき急いで首を横に振った。

「あの一、だって俺達が最後の一組なんでしょ？　これ以上誰と誰が戦うってのさ」

葵ちゃんはまず、自分自身に指を向ける。

「葵ちゃんと……」

そして、彼女の指はゆっくりと俺の顔を指差した。

「俺ええええええええ！！」

驚き叫んだ。なんでよりによってまだ俺がつらい目に遭わなきゃいけないんだよ。

「どういことだよ。なんで俺達が戦わないといけないんだよ」

すると彼女は俺の耳元まで、顔を近づけ声のボリュームを一段階上げて俺に説明してきた。

「このままだと、パートナー両方が序列一位の生徒会長になっちゃうから、一騎打ちで勝者を決めるの」

そこで、俺もようやく納得した。なるほどね、それなら結論は簡単だ。

「葵ちゃんの勝ちでいいよ」

俺には生徒会長の権利も序列一位でもいい、平和な毎日が俺の理想だ。

「やだ」

しかし、彼女は俺の提案をあっさりと踏みにじった。

「私はきちんと自分の力で生徒会長の座を掴み取りたいの！　誰から譲られた勝利なんてほしくない。それにずっと天下くんに戦いを譲ったんだからいいでしょ。天下くんが神楽くんと戦いたがっていたように私は天下くんと戦いたい！」

熱くなりながら、彼女が言う。

だけど、さっきまであなた、僕の怪我の心配してくれてましたよね。怪我人相手に戦いたくないなんて勘弁してくれよ。

「でも、俺は戦いたくない！　もう面倒なことはゴメンだね」

必死になって断る。今のさっきまで、これが最後だからって自分に言い聞かせてがんばったのに、ものの十分で裏切ったら二度と無理を聞かない俺になる自信がある。

けれど目の前の彼女は思いつめた表情で俺を見つめる。

「私は、この学園に入って、誰にも負けなかった。それが誇りだった自信だった。でも、あなたに私はあっさり負けた。だからもう一度戦いたい。あの時の自分は油断してたし、あなたのことを舐めた。だけど今は違う。天下くんにはここまで生き残れるぐらい、すごい実力があることもわかってる。だから、もう一度きちんとした場で本気のあなたと戦いたいの。お願い」

そう言って、彼女は頭を下げて俺に頼んできた。

「ちょっと待てよ。俺に実力なんてねーよ。ただ、俺は逃げ回りながら、さっきの神楽との戦いみたいに卑怯な手を使ってきただけだよ。俺が葵ちゃんに勝ったのも単なる不意打ちだっただろ！」

「不意打ちでも負けは負けよ。それに、今は、リベンジとして天下くんと戦いたいじゃなくて、純粹にあなたと勝負がしたいの」

「ちょっと、ちょっと、……ハハ、勘弁してくれよ」

それでも俺は嫌がった。もういい加減許してくれ。俺はもう治療斑の所へ行って怪我の治療をして、飴を買って舐めながら帰りたいんだよ。

「お願い、戦ってくれたら何でも言うこと聞くから」

彼女は頭を下げながら言う。

おいおい、女の子が簡単に何でも言うこと聞くからなんて言うなよ。俺が紳士だったからいいものの、もし、女子生徒の汗が染み込んだ制服をほしがるような変態に言ったら身の破滅だぜ。

そうやって、頭のなかで彼女の決意を茶化していても彼女は諦める気配もなく真剣に俺に頼み込む。

「お願いします」

顔を上げ今度は俺の目を見ながら言ってくる。黒い髪がなびき、外なのに女子特有の甘いにおいが俺の鼻まで届いた。彼女の目は不安げに俺の顔を覗いてくる。

つくづく、俺は馬鹿だと思う。自分にとって何の利益もないお願いを必死にしてくる女の子に対して、かわいいなんて感情を抱いて、この子の喜ぶことをしたいと思うなんて……。

「わかったよ」

「えっ！」

不安げな顔に驚きが混じる。

「やってやるよ、ただし条件が一つ、俺は閃光手榴弾のせいで耳と目がまだおかしいから、一旦救護班で休憩させてくれ、その間葵ちゃんも休憩していいから」

そう言ったとき彼女の顔は満面の笑みとなり「ありがとう」と言っ
て、俺の手を握ってきた。握った手を痛いくらい握りこむと彼女は、さっき俺の言った話を学園長に伝えてくるん
というって戦拳本部まで駆け出して言った。

卑怯だと思う。俺ではなく、目の前を駆けていった女の子は。彼女は俺の嫌がることを平気で押し付けてくる。でも、彼女の表情を見るたびにがんばってやるかって気持ちになる。俺の数々の卑怯な行動よりもよっぽどたちの悪い卑怯なやり方だ。

ほどなくして、彼女は戻ってきて、学園長の許しが出たことを知った。俺は葵ちゃんと別れて救護テント立ち並ぶ保健室前に来た。

ここ保健室は保健室と名がついているが、一般的な保健室とは違い、病院のようになっており、校舎とは別に独立して保健室のみの教室棟となっている。理由は言わずもがな、この学園の無茶苦茶な校風のために毎日死にかけの患者が生まれるからである。そして、こういう全校生徒が参加する行事ではベッドの数が足らなくなるた

め、テントを立てて外で患者を並べているのだった。

今年も盛大にぼろぼろになった生徒がぐったりとテントで転がりながら、手当てをしてもらっている。どうして、ここまで毎年盛大な怪我人が出るのに、死者がでないのか不思議である。

そんな中に、白衣を着た背の高い女の人を見つける。

「おい、棺先生！」

手を振って彼女を呼びよせる。彼女も俺の姿を確認するとすぐさま近付いてきて、俺の頭を思いっきり殴った。

「いてー！ 何すんですか！」

周りに殴った音が聞こえるほど強烈な一撃になんとか気絶せずに耐えた俺は理不尽な攻撃に対する非難を目の前の白衣の天使改め『保健室の白い悪魔』に浴びせた。

でも目の前のお医者さんは、テンション低めに「どうでもいいけど一応言っておく」ってな感じで俺に語りかける。

「お前な、いくら何でもありの戦いとはいえ、女の子の顔面がぐしゃぐしゃになるほど蹴りつけるなんてことするなよな」

すぐさま該当者が思いついた。双鐘恋の事だ。

「いや、あれは。だってジョーカー無茶苦茶なんですよ。あいつ俺ばかり狙ってくるし」

「まあ、どうでもいいさ。一応誰かが怒らないといけないことだから私が怒っただけのことだ。別に私は気にしてないし、双鐘の顔は私が治療したから痕も残らず綺麗に治る。だから別に気に病む必要もないしな」

世間一般的に非難的になる、女子に向けての過剰攻撃は目の前にいる医者にはあまり関心のある出来事でもなさそうだった。というより、この人の性格からして、自分の仕事を増やした俺へのささやかなる反撃という所だろう。

目の前にいる、校医である、棺ひつぎ留美るみは眼鏡をかけた、出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる美人のカテゴリーに十分入る女性だった。眼鏡というパーツが彼女を非常に利口そうに映し

出し、白衣姿はいかにも名医という雰囲気をかもし出しているが、口にくわえている火のついていないタバコが全ての利点を打ち消し、美人の医者という評価を著しく下げており、加えて美人特有のきつい目をしていることから言い寄る男がおらず、三十手前婚活にいそしむ世間一般のOLとなんら変らない女性だった。

「勝手に年齢と気にしていることをばらすな」

頭の中で棺先生の情報を思い返しただけに俺は殴られた。もしかすると、知らず知らずに口に出していたのかもしれない。気をつけよう。

「それより、先生飴持っていないですか、自分の分切らしちゃって」

俺がタバコでも分けてもらうかのように言うと、すぐさまポケットの中から飴を取り出し、それを俺に投げ渡してきた。俺はすぐさまキャッチし、口に放りこんだ。

俺が喜んで飴を食べる様子を棺先生が見ながら彼女が呟く。

「しかし、本当に飴が好きだな。あの時、タバコを与えなくてよかったよ」

彼女が言っているのは、初めて保健室に運ばれた、入学当日である。先輩のかわいがりを無抵抗で受けた結果、見事に保健室のベッドから起き上がれなくなり、ずっと保健室で棺先生と話しをしていたのである。そのときにタバコの味を聞き、吸ってみたいと言った俺に渡したのが飴だったのだ。

「俺も飴にこれほどはまると思わなかったすよ。二年かけて、いろんな飴を舐めましたけど、飽きる気がしないですよね」

「お前の舌が、私みたいにならばタバコという高級品を気に入らずに、飴という安いものを気に入ったことを喜んでおけよ。タバコのおかげで、私の財布はいつも空だぞ」

「よく言いますよ、高給取りのうえに、タバコだって火をつけずに啜っているだけじゃないですか」

「もし、私が昔みたいにタバコを吸ったら、五年で家が建つぞ。今も学校じゃ吸わないが、家なら結構吸ってんだよ」

五年で家が建つってどんだけ吸ってたんだろう。

「あの頃は、常に火のついたタバコを啜えてた」

また、俺が発言してないのに、割り込んできた。というか、睡眠時間以外ずっと吸ってたのかよ！

「あの頃はよかったな。タバコ吸ってても誰もあんまり文句言わなかったし、安かったし……。いまじゃ、誰もかれも文句言うから、がんばって火のついていないタバコで我慢できるように特訓しなくちゃいけないからな」

「素直に禁煙しようよ」

「馬鹿言え、私がタバコやめたら、誰が税金払うんだよ。私はな、国と地方のことを思って吸ってたんだよ」

なら、値段については文句言うなよ。と思うが無駄なんだろうな。それに、みんなタバコやめたら、税金が上がることは目に見えてるから、別に俺はタバコ吸ってる人がいてもいいと思ってる。ゆえに、熱心に禁煙は勧めない。

「つと、そんなことより、治療にきたんだったな。でも、耳も目もほとんど回復してるように見えるけどな」

俺の体を舐めなめまわすように見ながら医者言う。

「別に治療がしたいわけじゃないんですよ。単に休憩したかっただけですよ」

「ふーん。普段から何をするにしても、不真面目なお前が会長戦に真面目に参加するだけでも驚きなのに、最後まで生き残って、そのうえ、最後の戦いに全力を出して勝つつもりか？」

「別に勝てるとは思っていませんけどね。やるだけやってみようかなと」

はなはだ不本意だが、とりあえず面倒でもやらなきゃいけないことはあるということをお願い知った現在、全力を尽くすつもりだった。「お前の決意に水をかけて悪いが、医者として言っとくぞ、無理はせずにさっさと負けて来い」

彼女はいたって真面目な顔で言った。

「お前もわかってると思うが、その脇腹のキズは結構深い。あんまり激しく動くと、肺を傷つける恐れがある。別に私がこの学園にいる以上、死人は出すつもりはないし、生徒に無茶をやれと言ってやりたくもあるんだが、万が一肺を傷つけると面倒な手術を私がしないといけないから、さっさと負けてこい」

敗北を進められた理由が面倒くさいという、最悪の理由だったが、こと診断結果については間違いがないことは俺が良く知っている。この学園で死にかけた生徒を幾度も死神から守りぬいた医者^の診断は正確だ。

「一つだけ聞きたいんですが、何回ぐらいなら無茶しても大丈夫ですか？」

俺の発言に少し驚いた表情を棺先生は浮かべた。これだけ脅しておけば、さっさと負けてくると思っていたのだろう。だが、少しだけ俺の目を見つめたあと、彼女はやれやれ、仕事が増えるという風に頭をかきながら、脇腹を見つめて、淡々と言った。

「別に普通に動くくらいなら、今までどうり激痛が走るくらいで済む。ただ、体を極端にひねる動作をすると、あと一回か二回で肋骨が折れて、肺に突き刺さる可能性が高くなる。せいぜい無理はするな」

「了解です」

舐めかけの飴玉をくだき、全て胃袋に収め俺は言った。

「先生もう一個飴ください。ソーダ味のやつ」

先生はポケットをごそごそと探ると、ソーダ味の飴^{トリップキャンデー}を投げ渡した。それを受け取ると口に放り込み立ち上がった。

体の痛みは、口に放り込んだ飴の甘さだけを考えることで無視した。

「勝算はあるのか？」

立ち上がった俺に先生が声をかける。俺は笑いながら答える。

「あるわけないでしょ。あんな人に真正面から戦って勝てるなら、俺は学年最下位の序列のまま二年間も過ごしてませんよ。せいぜい

派手に散ってきますよ。なので介抱よろしく」

そういつて手を振りながら俺はその場を後にする。俺は治療らしいことは何もしなかったが、負ける準備を肉体的にも精神的にも整えた。

「面倒くさいね、しかし」

空に向かってぼやきながら、俺はもう一度グランドまで歩いていた。

グランドには多くのギャラリーがいた。どうやら、最終戦ということで、今まで邪魔にならないように待機していた連中にも観戦権が与えられたらしい。

やれやれ、どうやら俺は多くの生徒の前で豪快に負けなきゃならないらしい。頭が痛くなるのを感じながら、グランドの中央に歩いていく、そこには、地面の上で正座で待っている、いと麗しい学園最強の女性がいた。刀を自分の隣に置き、先ほどまで乱れていた髪を整えずと俺のことを正座で待っていてくれたのであろう。

俺は素直に彼女が綺麗だと思った。何がどうしてという理由は頭には浮かばない。けれど、わけもなく、彼女のことを綺麗だと思ってしまった。

そんな彼女が近付いて来る俺の姿を見て、立ち上がる。表情は真剣そのものだった。けれど、そんな彼女に俺はこの場に酷く似つかわしくない、軽い言動で話を始める。

「待った？ いやー決闘とかって、遅れてきたほうが勝つだろ。だからせいぜいゆっくりしてきたら案外時間たっぷりだった」

「別にそれほど、待ってないよ。それじゃあ、始めましょう、ちなみに手加減なんて一切するつもりはないからそのつもりで」

彼女は俺の言葉に冷たく答える。そして、刀を鞘から抜いて構えた。気が早いねしかし。

「ちよっと待ってよ。もっとお話しようぜ」

「何か聞きたいことでもあるの？」

「彼氏いる？」

俺や葵ちゃんではなく、周りが一斉に吹き出した。まあ自分でもくだらない質問だと思ったけれども、こういう言葉に反応して隙でも見せてくれれば、俺にも勝つチャンスがあるかなと思って言ってみたが、本気モードの剣術家が動揺することは何もなかった。

「答える必要を今感じない」

「まじで、いるの？」

「ノーコメント！ 戦いに集中しなさい！」

「まじかよ、ショックだぜ！」

俺は頭を抱えこんだ。

本気でショックを受けている俺に哀れみでも感じたのか葵ちゃんが俺に投げやりになりながら声をかけた。

「あーあ、いないわよ！ ちゃんと答えたから早くかまえなさいよ」

さっきまでの冷たい表情だったのが、頬に少し赤みの差した、普通の女の子の顔になった。まあ、まずは目的達成。平常心はなくなしておかないとね。

「もう一つ質問していい？」

「何？ もしどうでもいいようなことだったら、すぐさま戦闘を開始するわよ」

まあ今度の質問はどうでもよくない。大事な大事な質問だ。

「俺が神楽を倒したときの技。見えてた？」

「いや、閃光手榴弾を投げたのが見えたとき、腕で顔を隠したから見えてないわ」

その言葉を聴いて、俺は安堵した。勝つ可能性がわずかに見えただからだ。

「あっそう、ならいいや。あと、遠慮せずに気を使った技使ってきたよ。別に気にしないからさ」

「わかってる」

そう言って彼女は持っている刀を再度握り直した。俺も鞘に収ま

った刀を左手でしっかり持って構える。

ちなみ、先ほど俺は口で気を使った技を出して来いとは言ったが、神楽みたいにタメなしで放てない場合は、五メートル以内なら俺のほうが有利である。一瞬早く俺の天剣が相手に届くからだ。

けれど、葵ちゃんは俺の天剣を一度見て実際に喰らっている以上、リスクを犯してまで、気は使わないだろう。まあ俺が近付いてくるときに何にも仕掛けず待っている時点で気を使って俺と戦う気なんかなかったのかも知れないが。

俺はリラックス状態で、葵ちゃんは正眼に刀を構えたまま、お互いに身動きせずににらみ合う。出方を探るというより、勝負を始めるきっかけを両方が待っている感じだった。

穏やかな時間が流れる。思えば今日起きてから初めてかもしれない。けれど、静寂は簡単に破られる。

「はくっしゅん!!!」

学園長の盛大なくしゃみによって。

空気を読めていないことこの上ない見事なくしゃみに俺の体が反応した。動きだした体は止まらず、そのまま相手の体目掛けて一直線に突っ込む。

刀の射程圏内に入り、柄の、トリガー部分に指をかけ、滑らせるように刀身を鞘から吐き出す。

「天、」

けれど、一度俺の『天剣』を見ている彼女はしっかりと対策ができていたようで、一度彼女を倒したこの技は、彼女の刀に簡単に止められた。なんせ、俺がすばやく動いたと思ったただの横薙ぎを止めるように刀を出せばいい。サルでもできるお仕事だ。

だけれど、この技には続きがある。というより、昔俺が作った。

「地、」

単純な話だ。単撃が通用しないなら、連撃にすればいい。鍛錬も実践使用もほとんどないから、次撃の速度と威力はがくんと落ちるがな。

俺は先ほどの攻撃で踏み込んだ右足の先に今度は左足を踏み込んだ。そして、体をひねりながら鞘を持っている左手で、葵ちゃんのガードの隙間を縫うように下から上へと振り上げる。

そして、自分の耳に先ほど刀を止められた時と同じように、鉄と鉄が激しくぶつかった、鈍い金属音が流れる。

彼女は俺の二撃目も止めたのだ。

でも、俺は攻撃を止められても、あまり驚かなかった。さっきの神楽に対して使った時は決まったが、あれは神楽の目を封じていたからに過ぎない。むしろ、天才はこのぐらい止めてしかるべしだろう。

だからこそ、本命の一撃をこの後に控えてあるのだ。

俺はひねった体に一つの棒をイメージする。そこに自らの体を足から巻きつけているイメージだ。そして、俺は前に出した左足をその場でもう一度踏み込む。

踏み込みと共に、巻きつけていた体を独楽でも回すように、急速に逆回転させ、その勢いを右手にのせ、右手の刀を大きく相手に向かって突き出した。

「人」

神速とは言えない三連撃、けれど、間違いなく高速である三連撃を繰り出すのが、『天剣』の派生技である『天・地・人』である。

神楽ですら倒したこの攻撃は、恐らく『天剣』と同じように初見では止められないと思っていた。特に最後の突きには自信がそれなりにあったのだ。

でも、俺はちゃんと覚えておくべきだった。凡人の努力など、天才の前では塵に等しいことを。

俺の最後の一撃はタイミングを読んでいたかのように、葵ちゃんのバックステップでぎりぎりかわされた。そして、彼女はバックステップの後、後ろへ飛んだ反動をバネのように利用し、弾丸のように俺に向かって飛び込んできて、俺の連撃の後にできた隙を見事に突いてきてくれた。

目の前に刀が迫ってくるとき、頭の中で声が流れた。

「ああ、負けたかな。まあ、良くがんばったし、いいんじゃない。このまま彼女の攻撃を受け入れて、『生徒会長おめでとう』とでも言って抱きつけば、最悪だった本日も最後にいい思いして終わるさ」

いつも聞いている自分自身の妥協と墮落の声である。剣術をやめてから、度々聞こえてくる声。彼らの声はいつも甘く、そして、理想におぼれる俺に手短な着地点を教えてくれる。努力のむなしさ、過程の無意味さをささやいてくれた。がんばってるときには出しやばらず、疲れたときに優しく話しかけてくれる。最悪にして最高の人生の悪友。

「もともと、彼女のために始めた戦いだろ。彼女に勝ったら本末転倒だろ。お前は十分がんばったし、誰もお前を責めやしない。脇腹も痛むんだろ。無理したら駄目だって」

もっともな正論を吹っかけて、本人を夢や目標から遠ざける。そして、それを正当化する。いつもその声にしたがって来た俺だった。面倒ごとから遠ざかり、できないことに言い訳を作って、次第にはできることも、やらなくなつて、努力を忘れた。だけど、今回は久しぶりに努力した。それは決して悪い気持ちじゃなかった。疲れて痛い目に遭って、説教までされたけれど、逃げ続けてきた人生よりは、輝きと希望に満ちてた。

「だから、ここで終わらせるんだよ。今ここで負けて終われば、いい思い出が一つできて、卒業まで厄介ごとなんてせずに生活できるんだ。ここでお前が勝てば生徒会長として面倒なことを率先してやらない

といけなくなるぞ。そんなの嫌だろ」

だけど、ここががんばったらさ、前と違ってもったいい思い出ができる気がするんだ。それは、結果として、負けてもだ。どんなにがんばっても負けが負けなのはわかってる。努力という過程は勝利に結びつかないと評価されないのもわかってる。だけど、これまでの卑屈でやる気のない自分が、変われるかどうか、一歩前に進めるかどうかは、自分しか知らない過程の中での努力だ。ここで、あっさり負けを認めたら、今までの自分に逆戻りだ。もし、結果が悪くても、その中で苦しくても、あがいてる自分をほめてやる権利があるのは、最後まで苦しくても、あがくことをやめなかった自分のみだ。墮落や保身に走る自分には自分自身をほめる権利もねえ。せいぜいがんばるふりをした自分と馴れ合うしかねーのさ。

今日の俺はがんばった。そう胸を張って俺は今日の俺をほめてやりたいから、俺は最後まであがいてやる。

俺は目を見開く、刻一刻と迫る刃に対し、技の直後でとっさには動けず、刀で防ぐという行動は取れない。だから、俺は隠し玉を使った。

俺は口をすぼめて、迫り来る敵の顔目掛けて、口の中に残っている飴玉を吐き出した。

すぽん、と飛び出した飴は彼女の額に当たった。葵ちゃんは突然目の前に飛び出した飴に驚いたようで、わずかに攻撃のスピードが緩む。俺はその一瞬できたチャンスに鞘で胸を突きにきた彼女の刀を防ごうとしたが、鋭い突きは完全にとめることはできずに、俺は肩に突きをあびて後ろに吹っ飛んだ。

地面に数度回転しながら転がって俺は立ち上がる。肩に痛みはあったが、刀を振れないほどではない。鞘で割り込んだのと、飴玉の

せいで威力が落ちたのが大きかったようだ。

立ち上がって、刀を鞘に納め、制服の汚れをはたいて落しなが
ら、真正面に立って、吐き出した飴と共にかったつばをハンカチ
で拭いている葵ちゃんに向かって声をかける。

「ゴメンね。緊急事態だったから」

「別にいいわよ。鼻水をつけられた時と大差ないから」

「そういいながらも、多少不機嫌そうなのは気のせいですか？」

「でも、葵ちゃんも酷いな、神楽を倒した技見てないって言った
のに、ちゃんと見てたんじゃないか」

「ホントに見てないよ」

「嘘だ！ 初見であんなに完璧に裁いた上に反撃までしてくるなん
て」

「神楽くんを倒すところは見てはないけど、神楽くんが倒れていた
ところはちゃんと見てた。彼は突き飛ばされて気を失ってた。だか
ら、なんとなく、最後に突きが来るのは読めてたの」

なるほどね。嘘はついてないと。それでも、状況から判断しただ
けで、あの完璧なカウンターを繰り出すとはね。凡人には理解でき
ないや。

「なるほどね。これで俺は万策尽きたわけだ」

「なんか嘘っぽいねその台詞。さっきも私は決まったと思ったのに、
口から飴玉が飛び出すし」

「どうやら、俺の台詞は信用度がゼロっぽい。まあでもこれから言
うことは事実なんだけどね。」

「文字どうり、手も足も、口もでない状況まで俺は追い込まれたわ
けだよ、現在。残ってる手段はこの刀を使って、馬鹿みたいにさっ
きの技を繰り返して葵ちゃんに当てるしかないわけですよ。この状
態を万策尽きたといわずになんという」

「なら、潔く諦める？」

「はっ！ 冗談でしょ。俺は潔い負けを誰かに尊敬されるよりも、
かっこ悪い負け方をした自分を自分で慰めてるほうが好きなんでね。」

かなわなくても、ドMだと言われようが、せいぜい自分のためにがんばりますよ」

そうやって、ほんの数分前に自分自身が固めた決意を彼女に述べると、彼女は目を丸くして、そして、笑みを浮かべた。

「安心して、天下くんが負けたら私も慰めてあげるよ」

「ありがとさん、せいぜい派手に散るんで、よろしく」

そう言って俺はもう一度、彼女に向かって飛び込んだ。

まずは初撃、これはあっさりと止められる。続いて二撃目、これを今度は鞘を上からかぶせるように放った、けれど、鞘をわざわざ上に持ち上げ、上から下に振り下ろすため、先ほどよりも余裕を持って止められる。今思えば何でこの時反撃されなかったのか不思議なぐらいだ。そして、終撃、こいつを放とうと、ひねっていた体を元に戻そうとする。その時、彼女はタイミングを見計らって、後ろに飛んだ。どうやら、彼女は先ほどと同じような対策で俺を倒すらしい。

射程から逃れた敵を倒すためには、気を使うか、刀を伸ばすでもしない限り倒せない。だが、残念なことに俺の刀の刀身は伸びないし、気も使えないのである、だから、刀身を伸ばさずに、俺は刀の射程を延ばした。

二撃目で使った鞘を俺は手から離れた。地面に向かって落ちる鞘。それ目掛けて俺は突きを撃った。

放たれた突きは、鞘の中に吸い込まれていかず……、その合わない方向にはまり、強引に刀の長さを伸ばし、後ろに飛んだ彼女まで十分に届く長さになった。

「えっ!？」

カウンターの体制になった葵ちゃんへ突如現れた伸びた刀。恐らく表情を見るに体にストップをかけようとしたのだろう。けれど、必殺の意思を込めた体は急には止まらなかった。

「げはっ!」

ちょうど心臓の部分にカウンター気味に当たった一撃は、威力の

問題を気にしなくてもいいくらいに完璧に入った。彼女自身が俺への反撃のため向かって行こうとしていたのが仇となり、威力を高めたのだ。

ゆっくりと彼女は地面へと向かって倒れていく、まだ安心はできない。こっちは息もできないほど苦しいんだ。もし立ち上がられたら俺が今度こそゲームオーバーだ。

倒れた葵ちゃんは手を地面につき体を起こそうとする。

立ち上がるな。

心が叫ぶ。

だが、彼女はゆっくりと上体を起こした。

終わった。俺の体と心がそう叫んだ。

けれど、

「おめでとう、天下くん。あなたの勝ちだよ」

そう言って彼女が再び倒れたのを魂が聞いていた。

「生徒会長決定戦拳、優勝者は神乃天下」

そうやって放送で、俺の名前が叫ばれたとき、ようやく俺が勝ったんだと心が理解し始める。それと同時に脇腹から激しい痛みが襲ってきて、激しく咳き込んでしまった。口に鉄の味が広がる。口に当てた手を見ると、血がついていた。

「はは、ゴメンね先生、仕事が増えるよ」

そして、血をみた俺はそのまま地面に倒れた。

目を開くと天井には蛍光灯が光っていて、自分はその光を浴びながらベッドに横になっていた。

「おはよう、それとも、こんにちは、かな？」

隣から、安堵をたっぷりと含ませた声が聞こえた。隣を見たら葵ちゃんが横で座っていた、何を喜んでいるのか、笑みで顔が満たされていた。

「俺は負けたの？」

俺の最後の記憶は葵ちゃんに勝ったと思ったところで途切れている。しかし、勝者がベッドで寝ていて敗者が隣で笑っているとは考えにくかった。

「いや、お前が勝ったんだよ。脇腹の骨折って自分の内臓傷つてな。おかげで大変だったんだからな治療が」

俺の問いに眼鏡をかけて、タバコを啜えた女医が答えた。

「おまけに、治療してそのままほっとくわけにも行かないし、土曜だったのに出勤だぞ！ 給料を上げてもらわないとやってけねーよ」
そういつて、タバコを啜えた女医、棺先生は窓を開けて、保健室でタバコを吸い始めた。

「ちょっと、ちょっと、怪我人の前で吸わないでくれますか」

俺が棺先生に声をかける。俺はタバコの煙は嫌いじゃないし別に平気だが、隣にいた葵ちゃんが嫌そうな顔をしたので一応言うだけ言ってみた。まあ無駄だろうけど。

「うっさいな。今日は土曜日で休日で、この場所は私の居場所なんだよ。平日この場でタバコを吸うのを控えてるんだから、休日くらいいいだろう」

「いや、よくないと思うんですが……」

「がたがた言うとお前の臓器を売り飛ばすぞ。第一、私立なんだからルールは学校側が決めるんだ。学校側には、生徒の前で吸わなきゃOKって言われてるんだからいいだろうが」

「いや、俺達生徒ですけど」

「五月蠅い。休日に生徒なんて存在しないんだよ。今日のお前らは一般人とおんなじだ」

どうやら、先生は機嫌が悪いらしい。タバコぐらい吸わせてあげよう。

だから、俺が出て行くか。

俺はベッドから出て、靴を履いた。

「じゃあ、先生ちよつと屋上に行ってくるんで」

そういつて、タバコの煙にむせている葵ちゃんの手を引いて出て行こうとする。

「あー、そうそう、まだ派手に動くなよ。私の超一流のテクでもう動いても大丈夫だが、あんまり派手に動きすぎると傷が開くからな」
そう言つて、先生はタバコをふかしながら俺達を見送った。

屋上は涼しい風が流れており、心穏やかに空を見上げた。太陽が高く昇っていることからもう昼頃なのだろう。俺はフェンスにもたれかかった。

「まず、あなたに伝えとかなんといけないね」

後ろに立っていた葵ちゃんから声がかけられる。振り向いて彼女の顔を見る。負けて落ち込んでいる様子はなく、いつもの元気そうな表情だった。

「今回の戦拳協力してくれてありがとう」

そういつて彼女は頭を深く下げる。

「別に礼を言われる立場じゃないと思うけど。俺だって最後に葵ちゃん倒しちゃったじゃん。恨んでくれてもいいんだけど」

彼女は首を横に振る。

「戦いたいつて言ったのはあたしだし、本気で天下くんがかかってきてくれたこともうれしかった。全てにおいて感謝しかないよ。ただ、脇腹があんな状態だったのを教えてくれなかったのはちよつと心外だけど」

「いやいや、あんさん、俺が怪我してたこと知ってるじゃないですか?! そう思うんだったら俺が負けるつて言った時に素直に勝ちをもらってくださいよ」

そうすりゃ、棺先生をあれだけ不機嫌にさせることもなかったと思うのだが。

「だって、いくら怪我してるって言ったって口から血を吐くほどの大怪我とは思わないでしょ!? それに直前まで治療してから戻ってきたんだから、戦っても大丈夫だと思うじゃない!」

いや、治療らしいことは何もしてなかったんだけどね。

「まあ、今回は無事だったからいいけど、怪我してるときは無理せずと言っしてほしいんだよ。仲間だったらお互いに協力していくのが普通でしょ」

目の前にいる人が勝手に俺を悪者扱いしているみたいだが、どう考えても俺と戦いたいとごねた葵ちゃんのせいで怪我が悪化した気がするのだが。

まあそれは言わないお約束だろうかね。

胸の内に不満をしまいこんでふと葵ちゃんの顔を見ると今度は頬が少し赤くなっていた。

「ところでさ、試合前に言った、何でもお願いを聞くっていう約束……覚えてる?」

「当然!」

本当は言われてから思い出したことをまるで前世からの因縁のように覚えてるといった風に、即座に返答し、親指まで立てた。

その反応に少し葵ちゃんは引き気味になりながら会話を続ける。

「あのさ、なかったことにならないかな。約束……」

「無理!」

もじもじしながら喋る葵ちゃんに堂々と返答する。今こそならうNOと言える日本人。

というか何を頼むか考えただけで、胸とキズと俺の刀が熱くなるな。キズが開きかねないぐらいに全身に血がめぐっていつている。

「やっべ何頼もう! あーあ、ヤバイぐらい妄想が広がる。やべえ、煩惱が百八じやたりねーぞ」

何せ俺は、『勃てばケダモノ、萎えれば賢者、普段の姿はマジ変態』という変態マイスターとして最上級の称号を授けられている男だぞ。生半可なお願いだだけで満足できるわけが無い。

そして、悩みまくった結果、頭がフィーバした。もちろんこの場で俺の妄想を全て語ってもいいのだが、とたんに世界がピンクとモザイクと伏字に彩られそうなのでやめておく。

ふと葵ちゃんを見るとおびえたように体を震わせていた。どうやら身の危険を感じているらしい。そんな彼女がとってもかわいく見えた。というよりおいしそうに見えた。

「ねえ、どんなお願いでも絶対に聞いてくれるよね？ 約束は絶対だよね！　どんなに葵ちゃんが嫌がることでも大丈夫だよね！」

何故か俺より何倍も強いはずの葵ちゃんは俺の言動に終始ビビっていた。そして「なんであんなこと言ったんだろ」「絶対にやられる」などと小さな声で一人ごとを呟きながら俺の問いに対して悩み、苦しそうな表情を浮かべ涙を目に滲ませながら、「お母さんゴメン」と最後に呟き俺の問いにうなずいた。

俺は彼女に対して何を要求しても合意の上という約束をゲットしたのである。これで警察も怖くない。怖いのはアグネスちゃんだけだこん畜生め。

「とりあえず候補がいっぱいあるから、今日と明日じっくり考えるよ」

舌なめずりしながら葵ちゃんに言う。

百八を軽く超える妄想の内なかなか一つ決められなかったので、とりあえず保留ということにした。

「それとさ、一つ謝っとくよ。葵ちゃんを生徒会長にできなくてごめん。それともう一つ今度はお礼だけありがとう、今回のことはさ、面倒でつらかったけど楽しかったよ。これからもいろいろよろしく」

「当然でしょ、私も生徒会として活動するからね。一緒にがんばりましょう生徒会長様」

その一言で俺は忘れていたことを思い出した。もしかして……、俺ってこれからも生徒会長として面倒くさい出来事をドンドンこなさないといけないのだろうか。

「はは、頭が重たくなってきた……」

「どうしたの、傷が痛むの？」

首を振って否定する。けれどピンクの妄想は現実というもつとも見たくない二文字を直視させられることで中断をせざるを得なかった。

とりあえず今日はもう帰ろう。よく考えないとやばい方向に出来事が転がってしまう。この選択肢を間違えたら、バッドエンドに直行だ。

そんなこんなで月曜日になった。怪我の経過も順調だったし、俺の願い事についても良く考えてみた。これからの学園生活についてもだ。

一度は払いのけた妥協と墮落という悪友達と仲直りしながら真剣に考えてはみたが、結局たった一つの冴えたやり方は見つからなかった。

そして、現在俺は新生徒会長として、生徒会長任命式で最初の挨拶をするため、現在壇上に上がっている。

全校生徒が俺の方を見つめている。まったくもって嫌なものだ。人に注目されるのはどうも好きになれない。

「えー、皆さん、このたび生徒会長に任命された神乃天下です。えー、私は、会長戦の三日前まで学園最底辺の序列だったため皆さんの記憶には薄い人間だったと思います」

一応文は考えておいたのだが、どうも緊張してしまっとうまく話せない。俺は隣に控えていた葵ちゃんの方を見る。彼女はなれているようで堂々と背筋を伸ばして立っていた。

「今回会長戦で勝てたのも、今回の形式がタッグ制だったことと、パートナーを組んでくれた天上葵さんのおかげだったと思います。そして、今回パートナーを組んでくださった天上さんには生徒会長決定戦の規定通り生徒会副会長を務めてもらおうと思っています」

多くの生徒は壇上に葵ちゃんが控えていたことから予想はできていたみたいで、驚いているものはほとんどいない。けれど、これらの俺の発言には全員が口をあんぐりと空けて驚くだろう。

「ですので、今回の成績は自分の力とは思えないため、生徒会長の権限と勤務を全て副会長に譲渡したいと思います。いつか自分自身に自信と力がついたときに生徒会長として皆さんの役に立ちたいと思います。それまでは、副会長及び会長代理として天上葵さんがいろいろと仕事をするので、天上さんに皆さんいろいろ頼ってください。では続いては天上さんのお話です」

そう言って俺は、生徒会長として面倒臭そうな仕事を葵ちゃんに押し付けた。案の定生徒はみんな驚いている。でも一番驚いているのは葵ちゃんだ。

「ちょ、ちよつと待ってよ天下くん。聞いてないよ!？」

言ってないもん当然だ。

「これが、俺の葵ちゃんに対するお願いだよ。何でも言うこと聞いてくれるんだろ。だったらせいぜいがんばって生徒会のお仕事やってくれ。じゃあ後は任せた!」

驚き慌てている彼女をほつという俺は式を堂々と抜け出した。序列一位の俺を注意する先生はいない。もとより、この式自体序列上位者なら別に参加しなくてもなにも言われないのだから。唯一、壇上に残されていた葵ちゃんが「い、いきなり全部私にまるなげしないでよ、ていうか戻ってきてよー!」と叫んでいたが今回ばかりは無視さしてもらおう。

そして、ポケットの中から飴を取り出し、口へ放り込むと俺は屋上へと向かった。
ドロップキャンデー

屋上へ上るとすでに先客がいた。女子生徒の制服を着た、小柄でかわいらしい女の子だった。

この時間に抜け出しているってことは、序列上位なのだろうか？でも俺の記憶には上位にこんなかわいらしい子がいた記憶がない

ぞ。

「やっぱり抜け出してここに来たね」

見ず知らずの女の子は俺を知っているのか、友人のような口調で俺に話しかけてくる。

あれ、この声どこかで聞いたような……。

「どうしたの？」

なんの反応も返さない俺に目の前の女の子は心配したかのように声をかけてくる。

おかしい。もし、俺の知り合いならこんなかわいい子を忘れているはずがない。目の前の女の子は俺の好みのなかの好み。ストライクかボールでいえば真ん中高めのホームランボールだ。絶好球だ。

「えーと、ごめん。誰だっけ？」

俺は頭をフル回転させながら、記憶をたどりつつ、目の前の女の子の名前を聞いた。もし、知り合いなら名前を忘れているという好感度最悪なところから始まるが、まあいいだろう。とりあえず、目の前の子とおしゃべりがしたかった。

「何言ってるんだよ。神楽だよ、神楽。貳宮神楽だよ」

怒った様子で女の子が俺に言う。俺はしばらくフリーズした。

「ははは、馬鹿言うなよ。俺の幼馴染がこんなにかわいいわけがない」

「だから、本物だよ」

「嫌だ、信じたくない。こんなかわいい女の子が、男の娘だなんて信じたくない。俺は俺の幼馴染しか知らないことを言わないとお前を男だと信じないぞ」

半ば暴走気味に俺は言う。

「じゃあ、周りに誰もいないから言うけど、天ちゃんは幼稚園のときに僕をお嫁さんにしてくれるって言ったよね」

「ゲハッ！」

俺が目背けたい過去を堂々と本人に言うなよ。傷が開いて吐血

しただろうが。

それは、悲しい話だった。いつも一緒に遊ぶ幼馴染、一緒に剣を学ぶ幼なじみ、そのいつのいつも笑っている顔に俺は恋をした。初恋だった。幼馴染の小学校入学前日、俺は告白した。返事は返ってこなかった。次の日、小学校に登校したとき幼馴染は男として俺と接することになったのだ。

初恋は実らないとよく言うけれど、俺の場合はタネをまく代わりに花卉をまいていたようなものだ。実るわけがない、芽が出るわけが無い、というより実らなくてよかった。

「実ってたら禁断の果実だね」

「それはただの腐ったリンゴだ」

どうやら、目の前の女の子は俺の幼馴染らしい。俺は同一人物に、二回失恋を経験した。

「どうして、お前がそんな格好してるんだ」

気を取り直して俺が尋ねると、少し怒りながら神楽が答える。

「天ちゃんが女装して来いって言ったんじゃないか！」

「あっ！」

思い出した。そういえば言ったねそんなこと。

「じゃあ、どうしてこんな場所にいるんだ？」

「天ちゃんが生徒会長として、式に最後まで参加するとは思えないから」

どうやら、神楽は俺が式の途中で抜け出してくることを予想していたらしい。さすがは幼馴染だね。

「なんだよ、神楽。お前俺の晴れ舞台見てなかったのかよ」

「見てないけど想像がつくよ。どうせ天上さんに生徒会長譲ってきただんでしょ」

さすがだな神楽。お前俺より俺のことわかってんじゃないね。昨日一日悩んで答えを出していたのに。

「残念ちよつと違う。一応、肩書きだけは俺が生徒会長だもんね」
神楽の答えは正解と言ってもよかったけど、少し癪だったので訂

正してやった。

すると神楽は少し顔をひねらせた。

「おかしいな？ 面倒なことからはできるだけ距離をとるのが天ちゃんの行動パターンなのに。肩書きだけでも生徒会長だときつと面倒ごとに巻き込まれるのわかってるでしょ」

「面倒でもちよつとやらないといけないことがあるんだよ。会長戦で協力してくれた連中への部費の割り増しとかな。あれは葵ちゃんにだけ任すわけにはいかないからな」

少々俺から無理を言わないと、部費の割り増しなんて許さないだろうからな葵ちゃんは。

「ふーん。それはきつと嘘だね。正直なところ、天ちゃんは天上さんと一緒にいたいだけでしょ」

「ばっ、馬鹿、ちげーよ。それにもし俺が葵ちゃんのことが好きだったら自由に使えた命令権で十八禁の展開迎えてるよ！」

「よくいうよ。好きなものほど怖がって触れないタイプなのに」

「おい、まてよ神楽。お前俺のこと馬鹿にしたな！ 残念だが、俺は葵ちゃんの胸に顔をうずめているぞ」

「じゃあ、天上さんのこと好きなのは認めるんだ」

「い、いや、……それは、また、別の話であって」

「ははは、まあいいや。天ちゃんが元氣そうで、そして、変ってなさそうでよかったよ。じゃあね天ちゃん」

そう言って手を振りながらスカートを翻し神楽は一足お先に階段を下りていった。

全く、どうして俺のことを良く理解している幼馴染が女じゃないのだろう。女ならあいつほどいいパートナーはいないのにな。

空を見上げて飴を舐めながら考える。

今回の出来事で俺が得たものなんて、面倒事でしかなかった。でもそれでよかった。努力はきつと無駄ではないと思えたから。最後

までがんばった自分をほめてやればそれでいいと思えるようになったから。

あっ、忘れてた。そういや大事なことがもう一つあったんだ。

「お疲れさま、自分。最後まで良くがんばったな」

自分自身をほめた言葉は空へと消える。

自分以外の誰にも届かない自己満足の言葉。

俺はその言葉に満足しながら屋上で昼寝をした。

目が覚めるとちょうど夕日が西の山にかかり始めていた。グラウンドと武道館では共に部活動に精を出す生徒の声が聞こえた。

「はああ、良く寝た」

「ホントにね。まさか放課後まで寝続けるとはね」

起き上がると目の前に葵ちゃんがいた。いつもの通りの笑顔では……なく、若干怒り気味の表情で。

「いやー、いつからそこにいたんですか？」

「昼休みぐらいに見つけて、起きるまでずっと待ってたよ」

「そんな、待っててくれなくてもよかったのに」

「別に天下くんが起きるのを待つ必要はないし、生徒会の引継ぎの作業とかもあったんだけどね。突然生徒会長の仕事を私に押し付けて、自分はのんきに屋上で昼寝をしている生徒会長様に文句が言いたくてね」

話をしている内に収まりかけていた怒りが再び燃え始めたのか、段々声に力が籠ってきていた。

「誠にけしからん奴ですな、誰ですかそいつは!？」

「天下くんだよ!」

「ふぎゅー」

突っ込みのパンチが怪我をしている脇腹へと入った。

マジで死んじゃう五秒前。

傷口を突かれて苦しんでいる俺の手を葵ちゃんが捕まえる。

「ありがとうございます、そのまま保健室まで連れてってください」
「何言ってるの？　これから、天下くんは私と生徒会の引継ぎの仕事をやらないといけないんだよ」

「えっ、だって俺生徒会長の仕事全部葵ちゃんに任せたはずじゃ？」
「だけど、あなたは生徒会でしょ。なら生徒会長代理の命令をちゃんと聞いてもらわないと困るよ」

「めんどくせー、嫌だよー！」

俺は嘆きながら、階段を引きずられながら下りる。何も見るところがないので葵ちゃんの顔を見ていてそしてふと気付く。

「あれ？　葵ちゃんって口紅なんてつけてたっけ？」

ほとんどナチュラルに近い色の口紅だったが確かに口に何かを塗っていた。

「ちよつと唇が荒れてたからリップクリーム代わりに塗っただけだよ。さあ仕事するよ」

そう言って、何故か顔を赤くした葵ちゃんが、より強い力で俺を生徒会室まで引きずって行った

「ただいま」

家に帰るともう真夜中だった。九時を過ぎたくらいで腹が減ったという続けてようやく解放されたのだった。

「お帰り天くん。……なんか疲れてるね」

玄関でねーちゃんが出迎えてくれた、ねーちゃんもう仕事は終って帰っていたらしい。

「いろいろ面倒な仕事を立て続けに起こってね、やんなるよ」

「そうなの？　でも素敵な『お礼』はされたんじゃない」

何故か俺の顔を見て笑いながら、ねーちゃんが言う。

「はぁ、どういう意味？」

「だってほっぺにキスマークついてるよ」

本日の俺の記憶の中に、俺のほっぺにキスしたやつは思い浮かば

ない。でも口紅をしていた女子は一人だけ思い浮かんだ。

全く、俺が寝ているうちにするなら、後を残すなよ。それとも、後を残すためにわざと口紅をしていたのかな？　ありえるな結構俺に負けず劣らず卑怯な手段を利用するからな。

なにはともあれ、俺はこれからも葵ちゃんの頼まれごとを聞かなくちゃならないのだろう。面倒なことにもドンドン巻き込まれていくのだろう。

でもまあいいじゃないか、最高の『お礼』ももらえたことだし。これからももらえる可能性はゼロじゃない。

「にひひひ」

「いやらしそうに笑わないの。さっさと手を洗ってご飯食べよう」

「了解！」

ねーちゃんに笑われながら、俺は手を洗いに行った。

たった一つの卑怯なやり方 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。御座いました。

感想をいただけると嬉しいです。

よろしくおねがいします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9991w/>

上下逆天

2011年10月18日03時38分発行